



**平成 1 9 年 度  
外 部 評 価 報 告 書**

**日 本 大 学**

## 目 次

刊行に寄せて

### I 外部評価結果（大学全体）

1	村 上 義 紀	1
2	揚 村 洋一郎	9
3	石 川 明	21
4	森 山 敏 久	29
5	宮 嶋 宏 幸	33
6	朝 倉 敏 夫	37

### II 外部評価結果（学部等単位）

1	法学部	41
2	文理学部	47
3	経済学部	55
4	商学部	59
5	芸術学部	67
6	国際関係学部	71
7	理工学部	73
8	生産工学部	79
9	工学部	84
10	医学部	89
11	歯学部	97
12	松戸歯学部	101
13	生物資源科学部	105
14	薬学部	110
15	通信教育部	115
16	短期大学部（三島校舎）	121
17	短期大学部（船橋校舎）	123
18	短期大学部（湘南校舎）	127

平成19年度外部評価者



## 刊行に寄せて

全学自己点検・評価委員会委員長 高田邦道

本学における外部評価は、平成16年度に次いで2回目となる。本学の改善・改革の仕組みの一つである3年ごとの全学的な自己点検・評価に基づく改善・改革のサイクルが自己満足に陥らないようにするためには、本学教職員以外の方々からの評価や期待を常に認識する必要がある。その意味で、外部評価への期待は大きく、今後とも継続的に外部評価を行う所存である。

今回は、前回とは若干視点を変えて、以下のような方法で行った。

- 1 評価願う上での主なテーマを「学生支援」とした。
- 2 学部等単位の評価を当該学部等の卒業生（合計36名）にお願いした。
- 3 学部等単位の評価を参考に、大学全体の評価を学外の有識者（6名）にお願いした。

本学は、外部評価と並行して、文部科学大臣の認証する機関が行う認証評価を受けている。認証評価は、主に他大学教職員によるピア・レビューであり、機関全体を総合的に評価するのに対して、今回の外部評価では、実際に本学の教育サービスを受けた卒業生が、本学の「学生支援」を評価しているので、認証評価とはまた異なった視点から、本学の良さや改善点が浮き彫りにされている。また、大学全体の評価をお願いした有識者6名は、実際に学生支援や大学経営に長年携わった方をはじめ、高等学校教育、教育行政、教育産業、企業経営、報道関係と様々な分野で活躍されている方々であり、それぞれの御経験に基づいた厳しい目で評価をいただいている。

評価に御協力いただいたこれら42名の方々には、この場を借りて改めて御礼申し上げますとともに、今後一層の御支援・御鞭撻を賜りたい。

今回このような形で各位の評価結果を報告書としてとりまとめたが、「外部評価」はこれで終わりではなく、この先が重要である。評価結果を真摯に受け止め、本学が社会から一層信頼されるよう改善努力を重ねることに意味がある。本学教職員各位におかれては、本報告書を熟読し、今後の改善改革に大いに役立てていただきたい。



## 平成19年度日本大学外部評価：学生支援を全学部の視点から

財団法人私立大学退職金財団 常務理事  
村上 義紀

はじめに

外部評価に当たっては、与えられた実態調査と関係資料を読んだでの評価であることをはじめに記しておきたい。

とはいえ、日本大学法学部を今年卒業した知人を通じて、その後輩である現役の学生と今年卒業の同期のOB十数人（法学部、商学部、経済学部、文理学部等）に、文系、社会科学系（理・工・医学系を除く）学部における履修登録、講義、体育活動、図書館利用等について学生支援の現状と母校への思いについてインタビューしてもらった。その評価は自分が在籍あるいは卒業した学部への帰属意識は大変強く、かつその評価も高い一方で、他学部生との接触はなくて意識したこともない、というものであった。必然、日本大学全体への帰属意識は薄いとの感想をもった。

そうしたかれらが大学に希望したことは、学部によって違いもあろうが、①学生が利用できる体育施設がない、②図書館の休日利用、会館時間の不統一がある、③講堂（大教室）の閉鎖時間が早く、会合（学部のクラブ）のために空いている教室を利用できない、④クラスの担任制度が4年次までほしい、⑤半期で履修できる講義が少ない、⑥学生の交流の場が少ない、⑦学部間の連携がない、⑧職員の対応が悪い、⑨資格試験志望の学生が多く予備校的なイメージがある、というものであった。

その中で、「学部間の学生交流がなかった」ので「他学部は他校と同じです」との心象風景は、良し悪しはともあれ、第三者の外部評価者の胸に強く残る。少人数のインタビューではあるが、学生生活実態調査と概ね共通していると感じた次第である。

以下は、外部評価者として、平成18年度学生生活実態調査による全学部の集計結果の数値表を読んだでの評価である。

### 1 各学部等に共通して見られる外部評価結果

#### ① 長所

強く印象に残ることは、総じて卒業生である外部評価者自身にも、学部への

強い愛校心が記述の端々に伺えたことである。それは、問26-13への回答に、「今の学部に入ってよかった」とする現役学生が7割強あり、かつ「自分の学部に誇りをもっている」（問26-28）が5割弱いることの延長線上に示されているように思われる。そして「日大生であることを誇りに思っている」（問26-31）学生は「学部を誇りに思っている」のには少し落ちるが、4割強いることである。この数値が他の大学に比べて、高いか、低いか、は指標がないのでいえないが、健全な数値ではなかろうか。願わくは、これが5割を超える数値になるように目指してほしい。ただし、この数値が8割を超えたとしたら逆に、強制された誇り、のように感じられるから高ければよいと言うものではないだろう。

一方、「問26-5」は日本大学全体に対する評価と思われるが、「日本大学に来るべきではなかった」に対して8割が「いいえ」と回答していることは、「学部を誇りに思っている」の回答の7割より1割低いが高い数値を示している。

以上のことから察するに、日本大学の学生は、大局的にみれば「健全」であり、各学部の学生支援の取り組みは、差はあるが、高く評価できるであろう。

## ② 問題点

だが、学部を超えての日本大学全体からの学生支援の取り組みを希望するものが、OB評価者の声にもあるように、現役学生にも強い。この声は、日本大学における総合大学とは何か、についての問いかけではないだろうか。今後も各学部が自己完結的にすべてを保持する道を進むのか。あるいは学部の再編成をも含む知の総合、施設・設備の共同利用の強化の道を進むのか、について、現役学生は潜在的にOBである外部評価者同様、これからの日本大学が進むべき選択の道を注視しているように思われる。その期待への強い願いが、逆に「自分の子供・身内にも将来は日本大学に学んでほしい」（問26-34）に対して8割の「いいえ」となったのではないのか。これは重く受け止めるべき数値である。その深層にある心理を推察すれば、日本大学の学生は、問27「日本大学をより魅力のある大学にするには・・・」の回答で「魅力的な授業の多い大学」（第1位）にして「学力的にレベルの高い大学」（第2位）になってほしいと共に4割願っていることである。これは、「日本大学の質向上」に対する期待への表明ではないのか。その方策は全学で取り組むべき先送りしてはならない緊急課題であると思われる。

## ③ 調査に対する希望

この実態調査からは大学本部機構の学部等への学生支援の取り組みがあるのか、ないのか、学生にも、外部評価者にも見えないことである。全学的な問題

の解決に取り組む本部機構の学習支援に対する実情の調査と評価が別にほしいところである。なぜならば、大学全体の学習支援の質の向上に本部機構がどのように共同の責任を負担しているか、を知りたいからである。もっとも学部の学生の立場からすれば、大学本部の現状と役割についてはほとんど意識されていないかもしれないが、はたして学部と本部の関係はこのままでよいのか、との検討が必要のように思われる。

## 2 日本大学の取り組みに対する注目すべき評価結果

ところで、かくも大規模の大学がこのような外部評価に取り組んでいるその姿勢は高い評価に値する。全学部からデータと聞き取りによって浮き彫りになった問題を一学部ではなく全学で共有することになった意味は大きい。だが、この調査結果から日本大学はなにを執行するかが問われていることになる。

日本大学の全学の運営が、学部等所在地の地理的条件もあり、各学部に権限を大幅に委譲して行なってきたことは、大きな特徴であろう。だが一方では、学問領域にないものがないとされる日本大学が、各学部に分散した知をどう結集するのか。すなわち日本大学の力を集中して発信する総合力システム構築への願いが、OB評価者のみならず、学生自身が望んでいるように思われる。

以下に、学生生活実態調査からみた学部別学生の評価の特徴を見てみよう。

### ① 教員の教え方について（問15-1）

不満に思っている学生が7学部で5割を超えている。これを多いから悪い、少ないからよい、とみるかは評価基準をどこに置くかによる。が、不満が多くなるのは、学生の要求水準が高いから不満が多くなって評価が低くなることもあるから、その不満の要因を解明する必要がある。なお、芸術学部と歯学部は満足度が6割を超えて高い。

### ② 総合教育科目の授業内容について（問15-6）

芸術学部、医学部に不満が高いのはなぜか。学生の希望する内容とは違っているからか。内容がやさしいからか。学問領域への関心が違っているからか。その理由がわからない。

### ③ 外国語科目の授業内容について（問15-7）

上記に同じく、これも芸術、医学部に満足度が低く、不満が高い。外国語として教授される内容が芸術、医学を学びたい学生の希望に合っているのだろう



か、との疑問がわく。

④ 保健・体育科目の授業内容について（問 1 5 - 8）

この科目は全学部で驚異的に満足度が高い。その高さの理由を解明して他の科目にも応用できるのではないか。

⑤ 授業料に見合った授業内容、施設等について（1 5 - 1 3）

この設問は授業内容よりも施設に対する満足度に引きずられているように思われる。不満度が7割と高いのは、薬学部、医学部、芸術学部、歯学部であるが、授業内容に対する不満か、施設等への不満かどうかわからない。反対に満足度が他学部よりも高いのは、生物資源科学部の5割、次いで理工学部、工学部と理工系が高く、文系でも文理学部、法学部が高いのはなぜだろうか。なお、経済学部の外部評価者が、専任教授の4割強が61歳以上であると記述している。この問題は教育の質の維持向上と教員の後任人事にかかわるので「3」で述べたい。

⑥ 教室、教室内の設備について（問 1 5 - 1 4）

不満度が7割を超えるのは薬学部、医学部、六割が歯学部である。文系でも商学部の6割、次いで経済学部の5割強と高い。学問の進歩に設備が追随していないのだろうか。

⑦ コンピュータのサービス利用環境について（問 1 5 - 1 7）

不満が高いのは、経済学部と医学部が他の学部に比して高い。学問の性格からその利用は不可欠であるからか。

⑧ 図書館の設備、雰囲気について（問 1 5 - 1 9）

不満が高いのは、医学部、歯学部、次いで経済学部である。

⑨ 図書館の閲覧、貸し出しシステムについて（問 5 - 2 2）

これも医学部と経済学部に不満度が高い。学術図書・雑誌の購入・配架に遅れからくる不満ではないかの調査が必要である。

⑩ 体育施設・設備について（問 1 5 - 2 3）

これは学部間で不満と満足が二分している。学部環境の違いから来るものだろうが、学部間の格差をどうするか、の問題はないのか。

⑪ 学生食堂のメニューの値段について（問15-25）

メニューの値段がとても不満とする回答が、松戸歯学部、薬学部、医学部が抜きん出ている。実験・研究の継続のため、遅くまで大学にいるための夕食に対する不満なのであろうか。理工・医・歯学系学生は実験、研究論文作成のため徹夜も多いと思われるが、大学在留時間調査との関係がないかの調査が必要である。なお、総じて半数以上が不満としている学生の食サービスへの配慮は重視されるべき課題である。

⑫ 事務窓口について（問15-32）

全学部で平均5割強（56%）が満足しているが、さらに高くするには何をすべきかを論議してほしい。なお特に、とても不満である、とするものが2割を超えている学部がある。学部の性格によるものであろうか。事務所に種々頼みに立ち寄る必要が多ければ、他の学部よりも不満が高くなる可能性があるかも知れないが、窓口対応の善し悪しは一生涯忘れることがないとされる。サービスは先輩・後輩の関係から職員・学生の対等の関係に移行しているともいわれる時代だけに、これも大きな課題であろう。

### 3 これからの日本大学の取り組みへの期待

卒業生のある外部評価者が述べているように、これからの日本大学は、総合力をどう構築していくか、であろう。第三者には、日本大学はないものがない「総合大学」と認識されており、世界にも類のない私立大学の姿としてあるかもしれない。

そして、学生時代には強く意識されなかったのに、卒業後に、他学部の学生の考え方に触れ合う機会があったら、というOB評価者の願いに大学はどうこたえるか。

以下に述べることは、外部評価者の役割を超えているようにも思うが、実態調査を読んだ評価者の、学生支援に関わる希望として、お取りいただければ幸いである。

① 総合大学としての実をあげるための取り組みの第一歩は、特に1年、2年の都内に学ぶ学生のために、他学部共同の授業カリキュラムを編成してはどうか。学部を超えて学生が共に学ぶ場の創設である。

② そのためには語学クラス、体育・保健クラスあるいは一般教育科目や総合科目を再編成して、全学対象のオープン科目の設置を検討すると同時に全学

的なカリキュラムの見直しと、短期集中プログラム等の開発が必要である。

- ③ これをもって「日本大学は変わる」との意思表明を、120周年を期して全国に発信してはどうか。
- ④ このプログラムの実現するため、共に学ぶ場としての全学共同施設「日本大学都心セミナーハウス」を原点回帰で、複数学部がある一帯に設け、年間を通じて常時利用できるようにする。そこでは、短期集中プログラム、全学開講プログラム、セミナー等を宿泊して集中的に行うだけでなく、クラス、クラブ、団体等の全学部の学生が寝食を共にして語り、学ぶ施設とする。このことにより全学部の学生が共通に学習し場所を記憶してOB/OGも帰郷する場所とする。
- ⑤ 次に、先にふれた専任教授の高齢化と後任人事の問題は、ひとり経済学部のみの問題ではないことがわかった。日本大学の未来は、一部の学部を除いて、全学部がこれから10年間に取り組むべき問題は、専任教員（教授）の多数の定年退職に伴う優れた後任人事政策がとれるかどうかにかかっているのではないのか。それは今後の日本大学の命運を確実に左右することになるから、優れた後継者確保は学生実態調査で学生が評価した結果に対する最善の回答ではないだろうか。

因みに、学部別に61歳から69歳までの教授職の年齢構成を関係箇所に問い合わせたところ、1,083人中454人がこの10年間で退職する。毎年、平均45人が退職していくのである。教員人事はある専門分野の後任を必要とするので、限られた人数のなかからの人事となるだけに大学当局は承知のことと思うが、あえてこの問題の対策の重要性を問いかけておきたい。

学部別のこの10年間の退職者は次のとおりである。

法学部（46％、85人中40人）、文理学部（37％、157人中58人）、経済学部（41％、71人中29人）、商学部（44％、65人中29人）、芸術学部（46％、79人中37人）、国際関係学部（33％、49人中16人）、理工学部（40％、177人中70人）、生産工学部（56％、99人中55人）、工学部（40％、76人中30人）、医学部（43％、40人中17人）、歯学部（13％、20人中4人）、松戸歯学部（26％、38人中11人）、生物資源科学部（47％、104人中55人）、薬学部（13％、23人中3人）。通信教育学部を除く。

なお、56歳以上の15年間では、法学部（73％）、文理学部（58％）、経済学部（58％）、商学部（73％）、芸術学部（72％）、国際関係学

部(77%), 理工学部(67%), 生産工学部(85%), 工学部(77%), 医学部(66%), 歯学部(45%), 松戸歯学部(58%), 生物資源科学部(73%), 薬学部(48%)。

以上を見るに、61歳以上が、14学部中の9学部が4割を超え(56歳以上では7学部が7割を超える)、完全に逆ピラミッドとなっている。助教授を昇格させてもその人数はうまらないので、新規の大量採用が必要になる。したがってこれからの10年から15年間の問題は、定年退職者に対応して“優れた教授陣”を確保できるか、である。

教授陣の採用問題は、関係する機関で最重要な問題として取り組まれているが、全学的な採用基準を表明して、開かれた日本大学を宣言してはどうだろうか。いわゆる団塊世代が大学では10年遅れでここ10年間に退場するのであるから、ひとり日本大学だけの問題ではないが、その退場者数が大きいだけに影響も甚大である。日本大学の更なる飛躍のためにはこの採用の時を逸してはならない、と思うものが多いだろう。これからの学生のために断固実行してほしい。

なぜなら、問27の回答に象徴されているように、学生は、「魅力的な授業が多く」、「学力的にレベルの高い大学であってほしい」と願っているからである。そうすれば、問26(34)の「自分の子供・身内を日本大学で学ばせたい」とする回答の数値を暗黙のうちに高めることになるだろう。

- ⑥ 最後に、日本大学が総合大学としての力を発揮させるには全学部間等と本部間でもあらゆるデータが双方向に流通していることが必要である。学部の長い自治の伝統から学生支援情報、教学情報、研究支援情報、経営情報は全学的に統一されていない部分もあるやに聞く。それが結果的に閉鎖的では総合大学の力は発揮し難くしていないかを検討してほしい。

すなわち、あらゆる電子情報データを相互に利用できる全学オンライン・システムの基盤整備に問題がないかを検証してほしい。オール日大データの一元管理があつて初めて上記①から④に述べたことが実行できるからである。たとえば、オール日大生にかかわる情報は入学から卒業後まで一貫して管理するシステムになっているか、を問いかけてほしい。そうでなければ学部に分散した7万人余の現役学生と100万人のOB/OGの力を永続的に結集する基礎データは生み出せない。すなわち入学試験、科目(履修)登録、成績、卒業、校友までの一連の学生情報システムの一元化は必要ではないのか。奨学金情報、健康診断情報、授業をもっている教員人事情報、全学の教室・施設情報あるいは教員の研究費等の出納に財務情報システムは相互に関係しているだろうか。それがこの実態調査では見えないことである。日本大学の

実態がいつでも把握できるようになっているか、と知りたいと思った。学生の学習支援サービスのさらなる向上のためにも、いまある全学的なシステムに問題がないかを検証してほしい。総合大学としての力を遺憾なく発揮されて一番よろこぶのは、学生たちであり、その顔を見たいと願うからである。

## 変化の求められる大学経営

東京都立戸山高等学校長

揚 村 洋一郎

大学の役割は、学術的知識の獲得・職業への準備・広義な教養の形成の3つの分野にまとめられる。日本大学の場合は、設立の趣旨＝建学の精神に基づいて、小嶋勝衛総長から日本大学に漂う3つの危機、取り組むべき4つの課題、教育・管理運営に対する5つの決意が示されている。

少子化により各私立大学は入学者確保においても、競争的な環境の中で志願者・受験者の量・質を確保しなくてはならない。大学の学納金が大学財務収入の多くを占める日本大学にとって、志願者・受験者の減少は、大学経営存続の根幹をゆるがす。

大学改革を行うにあたり周囲の現実は厳しい。新入社員の採用に際して質の高い学生を要求する企業、高等教育の「質の保証」を求める文部科学省ほか教育行政の要求、高校生のリテラシーや意欲の低下など、大学教育をめぐる環境の激変はご存じの通りである。

早慶など一部の有力大学を除いて、大学が受験生を選抜する時代から、受験生が進学する大学を選択する時代になり、せっかく進学した大学でも、講義についていけないと感じた学生や、逆に第一志望の大学がどうしてもあきらめきれない学生は退学への道を選んでしまう。

大学にとっては、ひとりの学生を入学させてから卒業させるまで、すなわち入試・教育・就職支援の各局面において、学生に十分な満足感を与え、入学・在学・卒業してよかったと思える教育サービスを提供できなければ、受験生ばかりではなく在学生からも見放されてしまいかねない。

大学は、独自に展開する優秀な教育研究活動が持ち味のはずである。その実現のための学内資源である、人（教職員・学生）・資金（運営資金）・施設設備（キャンパス）をどのように戦略的に有効活用していくかが、大学の生き残りかけた命題である。最近では、受験生を含む高枚生・保護者・高校教員に対して、大学の取組をどのように伝えていくかという広報の視点も、大学存続に欠かせない重要な要素である。

### 1 キャリア開発支援

大学の改革は、まず学生の就職支援の深化を正面から捉える必要がある。

19年度外部評価結果の指摘事項を見てみると、高校生や保護者の大学選択において、その大学を卒業すれば、自分が望む職業や、働いてみたい企業への就職の道がつながっていることは重要な関心事項である。事実、最近オープンキャンパスに保護者同伴参加も多く、各種進学説明会において、「どんな企業に就職できるか」「就職率はどうか」という質問が頻繁になされる。大学はすぐに説明できる資料を用意して対応をしている。

大学は従来から、就職課や就職センター等の名称を持つ就業支援セクションが、就職試験のための講座や模試実施・採用面接対策を、主に3年生に支援してきたが、フリーター化する卒業生の増加や、新卒入社後3年以内に退職・転職する卒業生の増加に対し、1・2年次生からのキャリア教育を行う学部がある。京都産業大学キャリア教育研究開発センターの分類によると、キャリア教育には①大学生生活導入系②社会理解系③キャリア開発系④就職対策系があり、このうち①は大学生生活適応支援、スタディー・スキル、コミュニケーション能力養成、②は社会人マナー、働くことの意味、企業・業界理解、インターンシップ、③は自己理解、キャリアデザイン、④は就職活動対策、一般知識・常識の習得が目的となる。

立教大学では、社会連携によるキャリア教育を中核に位置づけて、コオプ教育・インターンシップオフィスを開設し、全学共通カリキュラムや各学部の科目を通じた学生のキャリア形成支援を行っている。

武蔵野大学も充実したキャリア教育を展開している大学の一つである。正課の中に「キャリア開発科目群」を開設し、1年次の「キャリア開発基礎Ⅰ」を皮切りに、3年次までの間に基礎、概論、実践の3分野にまたがる約10科目が体系的に用意されている。設置された科目の中には、「女性の生き方と職業」といった、元女子大学ならではの科目もある。

ゆるがない進路観を培うには、低学年時にキャリアガイダンスを導入し早期から考えさせ、単に就職試験への技術対策ではないキャリア教育を組織的に行わないと、就職実績が低下してしまう可能性がある。

朝日新聞社刊の「大学ランキング」で、毎年各大学学長からの改革評価が高い金沢工業大学も、低学年次からの啓発的キャリア教育を実施している。

これまでのキャリア教育は、あくまでも専門教育を主体としての教育がほとんどである。しかし、現在はそれに加えて、一人前の社会人となるための実学的な教養教育も新たな教育的役割として大学に課されるようになってきている。こういった変化を難しく捉えるのではなく、むしろ逆手にとってわが国最大の総合大学としての利点を生かし学部間の教員系・相互履修制度の活用等を早急に導入し日本大学の教育の「売り」にしてしまうことこそ、これからの時代に生き残れる大学の重要な条件の一つになる。

## 2 授業改革

「大学全入時代」の到来と言われ多様化する学生意識の変化に伴い、進学はしたものの学ぶ意味を見失っている学生や、大学の講義レベルについていけない学力の学生も存在する。と言った指摘が日本大学学生相談室報告書32号にのせられている。中でも国際関係学部の三島キャンパスでは、学習不適應（学力不足）や重度の学習障害と見られる学生が目立ちはじめているという報告がある。

これらの学生に対しては、受入れ時から初年次教育や、発達段階に応じた中等教育内容の補習授業を提供していくか、あるいは入学者選抜時の合否ライン設定をはっきりと示す大学側の姿勢とビジョンが必要である。また、国際関係学部などの入学時不適應は「講義が分からない」「志望変更したい」などの対策として、初年次教育は従来から行われている入学時オリエンテーションでの履修手続説明や事務窓口の役割紹介等とは別に、新入学生にフレッシュマンキャンプ等で友達づくりの機会を与え、進学先大学での新しい環境への適應を円滑に行いつつ、グループ学習等の手法で、大学での学び方を教え考えさせていく必要がある。

大学によって実施の規模・期間や、希望者・全員参加等に差はあるが、グループ間での自己紹介・他己紹介により、大学という「場」への最初の参加体験を持たせるものから、新聞の読み方・図書館の有効な利用法・レポート作成の文書作法まで、およそ大学の講義・ゼミを受けるうえで困らないような学習スタイルを、大学が教える形になっている。大学教育の「質の保証」と退学者減のために、大学で学ぶ意味を大学自身がまず学生に植え付けることが必要になっている。

また、生産工学部、商学部等の例にあるように講義の理解に必要な学力を満たしていない学生に対しては、例えば高校の数学・理科の補習授業を学外の高校教員経験者に依頼したり、卒業時の資格取得の勉強のために必要な基礎学力を教える学習センターを学内に設置するなど、学生の実情に対応した補習教育を展開する必要もある。

学生の講義・ゼミの理解や、学ぶ喜びの発見を支援するために、講義の進め方の見直し、すでに実施されている学生による講義評価アンケートの実施は極めて有効な手段である。今回の外部評価の実施にあたって、気になるのは学部によって格差はあるものの講義の学生理解度・満足度が低いことは、教育効果が見込めず「質の保証」が保てないと判断される可能性が考えられる。

大学教員の授業法の改善は、それを含む形で一般に教員の姿勢改善の意味で



ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development) であり、この場合の Faculty は「学部」ではなく、「教授団」を示し、大学教員が組織として、学生の理解度・満足度促進のために、授業法や学生指導のあり方・接し方を改善する取組である。アンケートの質問内容にも多くの疑問点はあるが、全学部自己点検・評価報告書 2006 を読む限り、一部の教員が個人的に自分の授業法を改善するだけでは、真の意味でファカルティ・ディベロップメントが進んでいると言いがたい。

大学が保証する学力像、是とする授業像に応じて調査項目、評価軸の検討を行う必要がある。

しかし、このような個々の教員の努力の成果を大学全体の教育改革につなげていくためには、大学全体や学部学科単位での組織的 F D (Faculty Development) = 大学教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みは欠かせない。この組織的 F D も単に教員対象の F D セミナーや、学生による授業評価を実施したなどの一過性の取り組みに終わらせるのではなく、継続的に成果が積みあがる仕組みが構築できているかが重要である。そのためには、大学教育開発・支援センターや大学教育研究センターなどの組織が学内に設置され機能していることが最低限必要な条件となる。

大学全体で G P A が導入され、成績評価指導が実施された結果、その効果や結果の検証が十分になされていないという報告がある。文理学部では、F D 委員会を設置し、学部の教育・研究の問題点の検証を行っている。これらの事例等を吸い上げ改善策の提案等も含めた全学部総合検証委員会の設置を行うべきである。

他方、学生生活実態調査報告書による授業についての満足層の比較から、学生は教員と話のできる機会を望んでいる。学生が気軽に大学教員の個人研究室を訪れ、教員と会話したり質問できるようにするための、研究室への在室時間保証=オフィスアワーについては、筑波大学など全学的取り決めで学生に時間を告知している大学も増えてきている。本大学ではこの点一部の学部には導入されてはいるもののこれといった実態が示されておらず大学教職員の意識改革が必要である。

授業法改善を扱う学会では、有為な授業改善の取組発表に多くの大学教員が参加・質問しており、この分野の理論や実践形成の立ち遅れと、大学教員の危機感を象徴するような光景に思える。なお、ファカルティ・ディベロップメントからさらに進み、事務職員の能力開発や学生への接し方の姿勢改善の取組として、スタッフ・ディベロップメント (Staff Development) が挙げられるが、全学部に将来ぜひ採用検討をお願いしたい。

### 3 高校生に選ばれる大学に向けて

最近の高校生の進学意識は二極化している。どうしても第一志望の大学に入学したいために、それ以外の大学に入学後在籍のまま予備校の第一志望大学受験クラスに通う、いわゆる「仮面浪人」の存在は極端な例とも言えるが、首都圏予備校ではその数は増えている。一方、大学の選び方がわからない、自分が何をしたいかわからないまま、「高校を卒業するからとりあえず大学に進む」という意識の高校生もいる。また、授業料負担の重さに家計が耐えられる見込みがなく、大学進学を断念する生徒もいる。

高校生の大学進学に対する保護者の意向の影響力は大きいですが、大学進学率の上昇に伴い、子どもの代に初めて大学教育を施す保護者層も増加してきた。その結果、保護者が理想とする子どもの大学進学先と本人の実力や志向がマッチせず、進学志望先の選定に際して戸惑う高校生も多い。

さまざまな環境の激変の中でのこれからの大学選びは、当然のことながら、受験生本人が大学に入学し学生生活を送った後に、「入ってよかった」「出てよかった」と主体的に思える大学を選ぶことが第一である。そのためには、どの点に着目すればよいのか、それは、各大学が進める大学改革の取組の過程が表面に分かりやすく示されているかである。

入学時に、その大学に入ったことの意味を大学がきちんと語り聞かせ、大学生活への移行を円滑にする仕掛けを用意している大学であるか（初年次教育）。講義やゼミをわかりやすく、学ぶ意義や喜びを学生に伝えてくれる大学であるか（ファカルティ・ディベロップメント）。就職活動スキルだけではなく、仕事観・職業観を学生に考えさせ身につけさせて暮れる大学であるか（キャリア開発）。これらをきちんと組織的に実践している大学は、たとえ受験生が第一志望で入学した大学ではなかったとしても、学生に満足感と付加価値を与える可能性が大きい大学と言える。

他大学の例ではあるが、在学生に対して実施した学生満足度調査では、受験時における同学力層間の併願受験では必ずしも第一志望にはカウントされないだろうと思われる大学で、回答在学生の高い大学満足度が示されている場合がみられた。例えば学長、各学部長の強いリーダーシップと危機感により、大学改革を学生の日に見える形で観点的に行っているような大学が、それにあたる。私立大学だけではなく国公立大学においても、大学の説明と志願者募集のための、大学教職員による高校訪問が盛んである。入試方式の変更や追加、新設改組学部学科の説明など、大学の情報は、これら高校訪問で提供される情報に加えて、大学広報や広告、その大学に進学した高校卒業生の母校訪問などの機会を介して、高枚生や保護者、高枚教員にもたらされるが、各種錯綜する大学情

報の中から、学生満足度を高めるための大学改革を地道かつ模範的に実践している大学を選ぶことが、生徒にとっては魅力的である。

ここで、大学改革について以下の2点をまとめてみた。

### ① 教養教育の再興隆

1991年に一般教育と専門教育の区分が廃止されて以来、従来専門教育課程からは「一般教育の授業時同数が多く、専門教育を十分に行えない」という声が強く出されていたが、個々の大学で教育の時間数を自由に設定できるようになった。

最初に大きな流れとして出てきたのは、第二外国語の廃止と人文・社会・自然の一般教育、いわゆる教養教育科目の削減であった。科目名称の変更が相次ぎ、今日の大学の大規模な構造改革を促した。

他の大学の例をみると、教養教育の重要性を強く認識し、その実践を続けてきた大学は国際基督教大学と言われている。教養学部だけの大学であり、人文科学、社会科学、理学、語学、教育、国際関係の六学科で構成される。学生が学科にとらわれず履修できる仕組みにはなっているが、2008年度からは学科を廃止し、教養学部約30の専攻分野を置く。志願者は、志望段階で専攻を決める必要がなく、入学後に、ゆっくり専攻を決定できるというメリットがある。この試みは全学生が志望する専攻を選択できれば、成功するものと高校側は見ている。学生のニーズを考慮した政策として学部教育の専門性と実用性を考える意味から本大学も大いに参考にすべき点がある。

### ② 大学改革の課程と問題点

一連の大学改革のうち主なものは、(1)カリキュラム改革、(2)学部・学科の再編成と増設、(3)大学院の設置と増設、(4)短期大学の大学への改組である。

#### (1) カリキュラム改革

大学設置基準により、個々の大学でのカリキュラム編成の自由度が増した分多くの大学で一般教育科目を削減し、専門教育科目の受講機会が増加した。しかし、学士課程教育のコンセプトの整理が不十分なまま、開設科目の体系化が十分になされないままにカリキュラム改革が実施されていたため、科目選択に悩む学生が増加した学部が少なくない。

本大学では、学部によっては検討委員会が設置されカリキュラムの特色化に工夫を施している。また、開設科目の名称が変更され、何を学ぶのかが分かりにくくなった。例として他大学で「哲学」が「人生の探求」に変更され、科目の内容が分かりにくくなった。科目の名称を変えても、「履修してみると、先輩

に聞いた哲学と同じようだった」という話を学生からよく聞く。教員が同じであるから、単なる看板の掛け替えに過ぎなかったことになる。また、カリキュラムが学生にとって分かりやすいものになっているかは重要な要素である。特にシラバスの説明や記述等を見る限り改善の余地はある。さらに、開かれた大学というイメージ作りを目指すため、例えば成績の評価方法基準を明確に示すなど検討を要する。

### (2) 学部・学科の再編成，増設

従来，学部・学科の再編成は審査を経て認可される手続きを踏んだが，届出制に変更された。したがって同じ分野であれば大学の裁量が大幅に増した。学部・学科の名称変更も自由である。しかし，志願者が減少したから学部・学科の看板を掛け替えるというレベルの例が少なくなく，またマーケティングリサーチも十分ではないために，再編成や名称変更の結果，評価が良い方に変化した例は少数といわれている。

近年の目立った学部の新增設は，薬学部である。資格志向が強まるなか，薬科大学の新設，既存大学における薬学部の増設が相次いだ，2006年に薬学教育の6年制への移行が始まり，増加基調にあった志願者が減少に転じている。本学部は学生満足度が高く，国家試験合格率も上昇し，日大は出来すぎと言われている全国第二位という実績がある。特に早期体験実習の一年時配置はカリキュラムの工夫があり積極的な改革の成果がでていいる。今後医療人の一員としての一般教養，コミュニケーション能力の育成が必要とされている。

もう一つは，現在発生している団塊世代の退職に伴う小学校教諭の不足である。文教大学，聖徳大学，創価大学など大学を挙げて大幅な教員育成に乗り出している。しかし，これは不足する時期が4，5年に限られているため，慎重にすべきであるが，文理学部において小学校教員養成課程を設けたり，敬愛大学などとの連携を図るべきである。

### (3) 大学院の設置と増強

中央教育審議会は2002年に「新しい時代における教養教育の在り方について」を答申した。「社会が複雑かつ急激な変化を遂げる中で，各大学には，幅広い視野から物事を捉え，高い倫理性に裏打ちされた的確な判断を下すことができる人材の育成が一層強く期待されている」ことを前提としたうえで，学士課程教育，すなわち学部での教育は教養教育に重点を置き，「専門性の向上は大学院を主体にして行うのが今後の高等教育の基本的な方向となりつつある」とした。この結果誕生したのが法科大学院をはじめとした専門職大学院である。

専門職大学院の設置をふくめ，大学院の新增設が相次いだのも，一連の大学改革の大きなうねりの特徴である。国立大学の大学院重点化が進行し，私立大学の大学院進学者の過半が国立大学大学院に進み，やむを得ず中堅私立大学に

大学院生の募集に走るということが一般化したといわれている。本大学ではその規模も大きく20の大学院研究科を置き特色ある高度な教育研究を展開している。しかしながら全学部において学生の定員を充足してない状況が存在し場合によっては選考基準を下げることによる学生の学力低下を招く危険性がある。定員枠、広報活動、学位や資格取得の在り方を検討する必要がある。

#### (4) 短期大学の大学への改組

多くの短期大学は主に女子を対象とする教育を行ってきた。しかし、女子の志願者が短期大学から大学へ移行する傾向が強まり、短期大学を大学に衣替えする勢いが強くなった。大学にする際には、多くは男女共学の道を選択している。理工、三島、湘南の3短大はいずれも4年制学部併設されておりカリキュラム、授業内容、就職保証の面でも将来において見通しは望めず残念ながら短期大学としての使命を終えているように思える。

他の例では、多くは短期大学の人的資源すなわち教員をそのまま活用して大学に改組した例がほとんどで、短期大学の教員を活用するという制約のなかでの大学の設置にはおのずから限界がある。したがって、短期大学を改組した「新設大学」の多くは、今日、志願者の急速な減少に直面している。短期大学の大学への改組は、18歳人口減少期には「大学の方が生き残りに有利」という経営判断もあるが、短期大学教員の「大学教員になりたい」という悲願も背景には存在している。

#### 4 全入時代の大学選択の視点

今日、「大学全入時代到来」といわれているが、2006年度に定員割れを起こしている私立大学は40%に上り、50%以上の定員割れ私立大学がすでに20校(1%)となっている。定員割れの大学が必ずしも水準が低いわけではないが、該当する大多数は、特色がない、立地が悪い大学である。定員割れを起こした大学のうち、翌年度に定員を満たす例はあまり多くはない。すなわち、坂道を転げ落ちるような勢いで、毎年のように欠員が増加し、ある段階で学生募集を停止し、学部を廃校せざるを得なくなる。

大学選択の際の問題点として、「教育内容の優劣」よりも「銘柄」による大学選択が行われている点が指摘されている。この点については大学側が様々な情報発信をしていく必要がある。

大学選択の判断基準上位に「受験負担の軽さ」も挙げられている。これは受験科目を減らすことによって受験生を獲得し、難易度(偏差値)も上げていくという一石二鳥の方策に見える。

しかしこのことには、入試本来が果たすべき「入学後に必要な基礎学力の保

証」という機能が働かなくなる可能性が潜んでいる。

一方センター利用の出願者は8%増加しており、一般入試の増加率5%を上回っている。

このことから「一回の試験で複数大学の合否を判定できる」といった受験生サイドに立ったシステムは受け入れられている。大学側は安易に受験科目減による志願者増を目指すことなく受験料のセット割引の拡大など受験者の立場に立った改善に取り組むことが必要である。

文科系でも4年間で500万円前後の勉学費（学納金、教科書代、研修旅行参加費等）を要する大学の選択ともなれば、相当に慎重に行う必要がある。在学中に大学が消滅の危機に直面し、不本意ながら勉学を継続できない恐れがあるからである。

今日、学生募集広報の有力な手段の一つとなっているのが各大学のウェブサイトである。そのウェブサイトの入試情報のページに詳細をアップする大学が年々少なくなっているように感じる。ある大学は「競合する大学への対策で載せていない」と釈明するが、入学試験形態別の募集人員、志願者数、合格者数、入学者数、実質倍率等が「競合対策」上の機密事項ではあり得ない。「高校側から要請があればデータはいくらでも提供している」というが、世間に開示されていないデータの信憑性は保証されない。

大学淘汰の時代の大学選択の視点として、次の4つをあげておきたい。

- ① 受験に必要な基本情報の開示
- ② 正確な就職状況、キャリア開発支援の実態の開示
- ③ 教員の資質開発（FD）への取組の開示
- ④ 決算および財務の状況の開示

## 5 まとめ

一連の大学改革は、顧客である学生を主体として企図され実施されたものは少なく、大学・短大の生き残り、さらにいえば、教職員の生き残りのために実施されたのが多い。

一般に大学・短期大学の経営状態を見極めることはむずかしい。教員の的確な情報収集とその情報にもとづいた的確な判断および指導が求められている。

その一点目は、「いかに組織的改革と連動させているか」である。どの大学でも個々の教員レベルで見た場合、目の前の学生の実情の変化への対応に頭を悩まさない教員はいない。程度の差こそあれ、日々の教育的改善には取り組んでいるはずである。

二点目は、「いかに導入教育に熱心に取り組んでいるか」である。近年、大学

に入って「こんなはずではなかった」という学生のミスマッチによる中途退学者が増えている。そこでこういったミスマッチを少しでも減らそうと、「導入教育」や「初年次教育」に熱心に取り組む大学が増えている。

例として導入教育では、①スタディー・スキル（一般的なレポート・論文の書き方や文献の探し方，コンピューターリテラシー）②スチューデント・スキル（学生に求められる一般常識や態度）③専門教育への橋渡しになるような基礎的知識・技能④自分探しやアイデンティティ形成を目的とした動機付け・社会性，の四つの習得を位置づけ，全学共通カリキュラムなどを通してさまざまな科目を立教大学では実施している。

関西大学文学部では，それまでの学科別募集を廃止し，2004年度から「学部一括募集・2年次専修分属方式」を導入した。そして1年次の導入教育科目として，「学びの扉」「知へのパスポート」「知のナビゲーター」の3つの共通専門科目を設定した。このうち，「学びの扉」は各専修において，どんな学問テーマが実際に研究され，どんな先生がいるのか，学生に対して専門教育への導入を図るリレー方式の入門講義である。「知へのパスポート」は，各専修の専門分野に関連して少人数で展開される入門演習である。そして「知のナビゲーター」は，さまざまなスタディー・スキルを学ぶセミナー形式の授業で，学生は，選んだテーマに沿って，書物や資料を広く検索・収集し，正確に読んで理解し，まとめてレジメを作成し，発表と議論を行う。

三点目は，「いかにキャリア教育を推進しているか」である。近年，キャリア教育も大学の教育改革の重要な柱の一つになっている。

今後の日本大学の生き残り戦略は，時代のニーズに合わせた教養教育の充実だけではなく，首都圏の私立大学に見られる都心回帰ラッシュの現象利用もその一つである。共立女子大学，青山学院大学，東洋大学，法政大学など多くの大学が郊外キャンパスを縮小し，都心キャンパスにより多くの学生を集める算段を講じている。これは湘南新宿ラインやつくばエクスプレスなど交通網の発達で首都圏周辺から都心に通いやすくなったこともその理由の一つである。

また，今後は大学版M&A（合併・買収）も活発になるだろうし，関西学院大学と聖和大学，慶應義塾大学と共立薬科大学，武蔵工業大学と東横学園女子短大の合併発表は記憶に新しいところだが，今後も双方がWIN・WINの関係となるような相互補完型の合併はいくつか出てくるものと思われる。07年度は関関同立（関西，関西学院，同志社，立命館で新設学部がいくつか開設されたが，今年度は首都圏の有名私大でも学部学科の新設ラッシュが相次ぐ。明治大学の国際日本学部（仮称），法政大学のグローバル教養学部（仮称，青山学院大学の総合文化政策学部，社会情報学部。立教大学でも異文化コミュニケーション学部とコミュニティ福祉学部，スポーツウエルネス学科が新設予定であ

る。MARCH（明治，青山学院，立教，中央，法政）クラスでも苛烈な受験生争奪戦が始まっている。このような状況下での進路指導はどうあるべきか。不遜を省みずに申し上げると，大学の将来にわたる運営，危機管理などに対して多くの優れた人材を保有しているにも関わらず，大学教員の一人ひとりが広報活動，入学選抜の在り方とくに，入試問題の検討など高校の進路指導の実態に即し徹底的な分析を行うなど，もっと生徒の実態や大学の置かれている立場を知る努力をすべきだと考える。他方，学生自身に自主的に訴えさせるなど，オープンキャンパスの在り方も重要であるが，教員自身も生徒の望む大学の講義要項を取り寄せて比較したり，在校生から実態を参考にする等，平日から高校教諭との情報交換を組織的に取り組む必要があると考える。





## 日本大学における学生支援について

日本私立学校振興・共済事業団 理事

石川 明

### 1 はじめに

引き続き18才人口の減少傾向に加え、大きな規制緩和の流れの中での新規参入の増加など、私立大学等を取巻く競争環境は益々厳しいものとなっている。このような中で、各大学にあっては、社会や個々の学習者の多様化するニーズに的確に対応するため、それぞれの個性、特色を一層明確にしていくことが求められており、このことは経営基盤の強化にもつながるものと考えられる。

大学については、全体として、①卓越した教育・研究拠点の形成 ②専門的な、あるいは幅広い職業人養成 ③総合的な教養教育の提供 ④地域貢献や産学官連携をはじめとする社会貢献、など様々な機能を併せ持つが、各大学によるその比重の置き方の差異が個性・特色となって表われるものであり、今後、大学は、緩やかに機能別に分化していくものと思われる。

この点を含め、競争化時代の大学にとって大切なことは、大学としての魅力を如何に増大させるかということであり、教育研究の質の向上（この点も広い意味での学生支援であるが、前回の評価で取上げているので、今回は直接触れないこととする。）と並んで、教育提供体制を含めた学生支援機能の充実・強化は、その最も重要な観点と言えよう。

### 2 学生支援全体を通じて

- ① 日本大学においては、学生支援の重要性を強く認識するとともに、学生の意向調査も踏まえて、その充実・強化を図っているほか、積極的な自己点検、評価を行うなど、学生支援のさらなる改善・充実に不断の努力を傾注していることに、まず深く敬意を表する次第である。
- ② 日本大学は長い伝統を持ち、約10万人の学生・生徒を擁する我が国屈指のいわゆる「マンモス大学」であり、キャンパスも首都圏を中心として各地に散開している。

このような条件にも拘わらず、その学生支援体制・活動については、学生相談の体制や施設・設備面での配慮など各キャンパス毎に積極的できめ細か

な対応が行われており、その姿勢は高く評価できる。

- ③ 一方、その裏返しとして、OBの意見にもあるように「学部間の連携が弱い。単科大学の集まりのようだ。」との側面も否定できないところであり、入学理由のひとつに総合大学であることを挙げている学生が17.5%もいるように、今後は総合大学としての強みをさらに生かすような方向で検討が進められることを期待したい。

例えば、医学部OBが指摘しているように、医・歯・薬学部を有しているメリットを活用した他学部との共同プロジェクトや各学部間の教育交流・連携事業などについて、具体的な検討が望まれる。

- ④ また、総合大学は、その故に全体としての特徴や個性を発揮しにくいという宿命を負っている。個人的な印象と全くの私見に基づくものではあるが、比較的学生の評価が高い「パソコン使用環境」を生かした情報教育、情報活動などにもっと力を入れるのも一案と思われるし、交換留学生や研究交流事業が積極的に行われ、スポーツにおいて学生が海外でも活躍している割には今ひとつ影が薄い「国際（水準）」あるいは「グローバル」といった視点を強化していくことも、今後考えられてよいのではないだろうか。

これらは、今や大学に付随すべき当たり前の要素になっている感もあるが、日本大学は、「国内における存在感の大きさ」ゆえに、どうしても「ドメスティック」なイメージが拭いきれない気がするのである。

- ⑤ なお、平成19年度予算において、国が各大学の取組を支援する事業として新たに開始された「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」について、日本大学からも学生の自主創造力の向上を図ることを目的とするプログラムの申請が行われた。惜しくも採用には至らなかったが、このような姿勢と意欲こそが学生支援の質的向上に不可欠なものであり、今後も継続的な努力を期待したい。

### 3 個々の学生支援体制・活動について

#### ① 学生相談体制・相談活動

- (1) 本部に学生相談センター、各学部には学生相談室を置くとともに、それぞれ相談員を配置するなど、しっかりとした体制が組み立てられており、保健室や医療機関、事務部局等との連携についてもよく考えられている。特に、例えば、法学部において、相談員の氏名や学問分野、日時や場所などを一覧

表にして掲示しているなどの丁寧な対応には感心させられた。

また、セクハラ等人権侵害について強い問題意識を持って取り組んでいること（教職員からのセクハラや差別を受けた学生が10.5%いるとのデータには十分留意すべき）や相談員の養成・研修が積極的に行われていること、教職員向けの非常に懇切で丁寧な「学生サポートガイドブック」が作られていることなどは特筆に値する。

ただ、この「ガイドブック」の内容、姿勢は、学生に対して「優し過ぎ」「行き届き過ぎ」の感もあり、むしろ学生側の「心がけ」「心構え」などを示したガイドブックを作ることが有効かつ必要なのではないかという感想を持った。

- (2) 今後は、学生からの要望にもあるように、より相談に来やすい雰囲気・体制づくりや相談時間の延長などさらに細やかな対応について検討が行われるとともに、学生の健康に関しては、特に最近、増加・複雑化傾向にあると見られるメンタルヘルスの問題への対応について、精神科医の活用なども含め、力を入れていくべきと考える。

また、事務局職員の窓口の対応について、満足感を持つ者と同じぐらい不満であるとの回答をする者がいることには留意が必要であり、単なる対応の仕方にとどまらない、専門的能力や資質の一層の向上に努めていくことが大切である。

- (3) 学生が問題を抱えてから、あるいは疑問を持ってからの対応が大事なのは言うまでもないが、これらの大学側の負担を軽減するとともに、対応の効率化を図るためには、やはり、事前の対応の充実・強化が大切と考える。

授業や様々な機会を捉えて、大学側から積極的にアドバイスを投げかけるとともに、奨学金や進路選択、施設・設備の利用方法などの重要情報や、内容に応じた情報提供窓口の案内、学生生活の心構えやアドバイスなどを丁寧に盛り込んだパンフレット等の作成と、これらを活用した入学後のオリエンテーションをしっかりと行うことがまずは肝要と考える。

## ② 入学希望者に対する支援

### (1) 入学者選抜

入学者選抜については、学生数の確保ということもあって、推薦入学やAO入試など一般入試以外の方法による入学者が私立大学全体でも大勢を占めつつあり、日本大学においてもそのような傾向が見られる。

様々な能力や可能性を持つ多様な学生を受け入れていくことは大事な視点ではあるが、当該大学の魅力や大学に対する評価が直接反映される一般入試とい

う本線を大切にしつつ、選抜方法の多様化や改善を図っていくことが望ましいと考えられる。

## (2) 学部・学科の在り方

日本大学は、特に規模の大きい総合大学ということもあり、似たような名称の学部（例えば、文理学部、理工学部、生産工学部、工学部など）や同じ名称の学科（例えば文理学部と理工学部の数学科、物理学科、生産工学部と工学部の土木工学科など）がある。大学の世界や学問分野に通暁している人はともかく、高校生や一般の父母にはその違いや特徴を理解することは困難であろう。よくよく丁寧な説明と情報提供を行うとともに、今後、名称の変更や学部・学科の再編・整備を検討する必要もあるのではないか。

## (3) 社会人学生への対応

これからの大学像と学生像を考えると、社会人学生の存在は一層大きな意味を持つ。一般の大学院はもとより専門職大学院の整備に努めるほか、科目等履修生や聴講生制度等の積極的な活用を図るべきである。このような観点に立つ時、日本大学において公開講座が数多く開催されていることは喜ばしいことであり、このさらなる充実を図ることが望まれる。

また、現在、国において、正規の学生以外にまとまった学修を行った者に対し、何らかの履修証明や認定を行うことについて検討が進められていることに鑑み、社会人の再教育・再訓練やニート、フリーター対策等を念頭に置いた様々な学習メニュー、コース等の開発・提供を行っていくことは有益であろう。

## ③ 修学支援

### (1) 履修の弾力化

学生のアンケート調査において、「入学時に卒業後の進路等を意識していなかった者」が48.5%いるとの数字にも表れているように、人生経験や社会体験が少ない大学受験時に、学問分野についての興味・関心や就きたい職業などの進路意識を明確に持つことはもともと困難であり、幅広い勉強をするに従ってそれらが変わっていくことも多い。加えて、いわゆる「モラトリアム人間」やニート、フリーターの問題等を考え合わせる時、入学後の学修については一層の弾力化、多様化が求められていると考える。

「他学部・学科に入りたかった」という学生も33.8%いるところであり、例えば、学部・学科をより大きくりにした入試や、コース制等の大幅な導入による履修の弾力化、転学部・転学科措置の拡大、また、短期大学からのより円滑で無理のない編入などについて検討する必要があるのではないか。

## (2) 教養教育等の多様化

また、日本大学においては、単位互換や相互履修について積極的な取組が行われているが、上述の観点とも関連して、教養教育の多様化、幅の拡大、選択科目の自由度の拡大は、今後の大学教育の在り方を考える際の重要な要素のひとつとなると考えられる。医師養成において、アメリカ型の「メディカルスクール」構想を支持する声が相変わらず強いことなど、特に高度の専門職業人の養成に際して、このような要請はこれからも高まってくることが予想される所であり、遠隔授業など様々な手法の活用も考慮しつつ、これらの取組がさらに進められることを期待する。

## (3) 進路・学修相談の充実

卒業後の進路とそれを念頭ににおいた学修計画は学生の最大関心事である。入学以来の不安や悩みとして53.3%の学生が「就職や将来の進路について」を挙げ、また、進路に関し、知りたい情報・知識として「自分の本当の職業適性」を挙げている学生が43.2%もいることを考えると、進路相談や学生への情報提供には一層積極的な対応が求められる。その際は、あくまで、学生側の意向や希望を踏まえつつ、進路と学修をセットにした考え方と対応が大切であり、各種の心理テストや適性検査などの活用も考えられてよいのではないかと。

## ④ 学生生活支援

### (1) 施設・設備等

御茶の水地区については、立地条件上やむを得ないものとは言え、そもそもキャンパスというイメージからもかけ離れた感があるが、その割には、自由時間の学生の居場所などはある程度確保されていると思われる。

また、それ以外の都内のキャンパスもおおむね快適な雰囲気であり、キャンパス内で学生が過ごす環境については、まずまずの対応が行われていると見受けられる。

特に、図書館について学生の評価が高いことは良いことであり、なかでも法学部や文理学部の図書館などは、新しく、機能性にも優れ、学生の利用状況も良いようであった。また、他学部の図書館の蔵書なども容易に検索、利用できるなど、各図書館間の連携も図られており、今後は、電子化等による一層の資料・蔵書の充実、開館時間の延長等についてさらなる努力、工夫を期待したい。

テーブル数が少ないなど、食堂に対する不満が多いのは気になる点ではあるが、構造上など様々な制約もあると思われるので、これらの施設については、キャンパス周辺の学生の居場所の状況等も考慮しつつ、漸次充実が図られることを望みたい。

現在、都内のほとんどのキャンパスで、全面的な、あるいは一部の施設の改修、建替えが進められており、このことは、学生の学習環境の改善の観点から、

また、日本大学の活力を示すものとして、大いに歓迎すべきことであるが、施設の対震度や有事の際の避難場所等を心配する声もあり、これらについては、今一度点検、検討の上、必要に応じて適切な対応をとるべきであろう。

なお、商学部本部棟などに見られるように、AEDが備え付けられていることは、学生等の健康管理に対するきめ細かい配慮を示すものとして好感が持てるものである。

## (2) 学生間の交流

キャンパス間や他学部との交流に不満を持つ学生が多いようであるが、本当にそれを強く望んでいるかどうかには疑問が残る。クラブ、サークル活動離れの傾向や、空き時間を1人で過ごす学生が増えていることは、むしろ、今の若者の「オタク化」や「対人関係を避ける傾向」の表われと考えられるが、一方で、ゆるやかで気楽な人間関係を望みながらそれが得られないことの反映とも思われる。この辺については、さらに詳しい分析が必要であろうが、学生の「コミュニケーション能力」や「人間関係力」の涵養のためには、差し当たり、当該学部内での交流機会の充実や、他学部情報の提供、より自由な形のサークル活動等への支援などの工夫を行うことは意義のあることと思う。

## (3) 奨学金などの経済支援

ア 学生の3分の1が経済的な問題を抱えていることから分かるように、学生に対する経済支援は重要な問題である。日本大学において、主に給付型の大学独自の奨学金制度がかなり充実していることは喜ばしいことであり、今後とも、外部からの寄付受入れの促進により、そのさらなる充実が望まれる。

イ 日本学生支援機構の奨学金は、貸与型であるが、その意義は大きいものであり、無利子、有利子を合わせれば、ほぼ希望者全員のニーズに応えられている。しかしながら、学生認知度そのものが低いことは気にかかることであり、奨学金情報の提供の充実を望む声もあることから、この点さらなる努力・工夫が必要と考える。また、学生の要望の強い無利子奨学金は、基本的には、各大学における前年の実績をベースに採択数の一定割合を各大学に配分した上で残りを各大学の希望者数に応じて再配分するという方法をとっているところであり、日本大学における希望者数の動向にもよるが、積極的な応募を継続的に行うことによる採択枠の確保と拡大に努めて欲しい。

ウ 日本大学においてTA、RA制度が積極的に導入されていることは評価できるところであり、今後は、大学における研究活動のさらなる拡大、活性化を図るとともに、特に、RAの一層の充実について期待したい。

エ 学生生活、特に経済的な側面において、アルバイトの持つ意味は大きく、日本大学でも、現在、または過去においてアルバイトの経験のある者は約8割にのぼる。アルバイトは、基本的には学生本人の自主性と自己責任に委ねられるべ

きものではあるが、その実態に鑑み、情報提供や斡旋など、大学が組織として支援できることについて検討を行うことは意味があると考ええる。

#### (4) その他

年々、女子学生が増加していることから、女子学生向きの住宅情報の提供や施設・設備面での配慮など、より細やかな対応が望まれる。

また、ボランティア活動に関心のある学生が多い点は注目に値する。これも学生の自主性に任せられるべきことではあるが、適切な情報提供などが考えられてよいかもしれない。

#### ⑤ 就職支援

(1) 日本大学においては、事務局及び教員による手厚い就職支援体制が敷かれており、また、全学レベルのユニークなイベントである「合同企業研究会・就職セミナー」や各学部独自の支援プログラム、インターネットを利用した情報提供など伝統と実績に裏付けられたその支援の姿勢と体制は高く評価できる。

(2) なかでも、資格取得や就職のための課外講座が積極的に開講されていることは、学生のニーズを踏まえた有意義な対応である。今後、ベンチャー・ビジネスや起業家精神に関する講座の開設や各学部間の相互乗入れ参加、各学部に通じた内容の講座の全学的な実施など、そのさらなる充実が望まれる。

(3) インターンシップは、学生にとっては、就職支援の意味合いも有するものであり、全学レベルでのさらなる拡充が望ましいと考えられる。

さらに、産学連携や地域連携、共同研究、受託研究などについて、ベンチャー育成や新たな就職分野の開拓といった側面からも、一層力を入れていくべきものと考ええる。

(4) また、オーバー・ドクター問題などが、いまだに深刻な状況にあることに鑑み、大学院修了者の就職については特別な配慮と重点的な支援が必要と考えられる。

(5) なお、例えば、文理学部のキャリアガイダンスにおいて、卒業生を積極的に活用したり、女子学生のためのガイダンスを設けたりしていることは大変良いことであると思う。同業種、同職務であっても男女の差によって状況が異なるものも数多く見られることから、女子学生に対する配慮などもきめ細かく行っていくことが大切であろう。

#### 5 おわりに

① 学生支援の在り方を含め、大学改革を實のあるものにしていくためには、



改革・改善案の策定とその実行もさることながら、フォローアップ体制の構築と強化が極めて重要なものとする。その意味で、日本大学が学生支援についての自己点検、評価活動にしっかりと取り組んでいることは頼もしいことであり、今後も、例えば、いわゆる目安箱の設置や電子媒体を活用した情報提供と意見・要望の吸い上げなど、学生や父母、教職員の声を常に聞きながら、学生支援活動のフォローアップに努めて頂きたいと思う。

- ② また、どんなに素晴らしい活動をしていても、大学にどれほど魅力があっても、それが外に的確に伝わっていかねば無意味である。これからの大学には、様々な手段、媒体を活用した、より効果的、効率的な情報発信と積極的な情報公開が一層強く求められるのではないだろうか。
- ③ 学生アンケート調査によれば、日本大学入学の理由として「希望した大学に入れなかった」とする者が26.3%いるが、これは受験競争がある限り、極く一部の大学を除けばどの大学でもある程度の数字は出てくるものであり、むしろ日本大学においては、「入学直後に比べ良さを認める」としている者が61.2%もいることに注目すべきである。
- 大学の価値は、特に教育面においては、基本的には、学生生活の充実感を含め、学生1人1人にどれだけの付加価値を与えられるかで決まるものと考えられる。同一の学生について、入学時と卒業時の感想を比較してみるのも興味深いことと思う。
- 日本大学が、今後とも、教育・研究の質的向上や学生支援を始めとする大学の魅力向上に全力で取り組み、名実ともに日本を代表する大学として、そして世界水準の大学として大きく発展していくことを強く期待してやまない。

## 日本大学外部評価ご報告

株式会社学究社 取締役  
森山敏久

下記のとおりご報告申し上げます。

### 1 状況

高校卒業者の75%が専門学校を含む何らかの上級学校に進む現在、大学はむしろ「出口」で評価される時代となっている。大学生が資格を求めて在学のまま専門学校に通う、いわゆるWスクールは決して珍しくない状況である。

日本経済新聞社のビジネスパーソン1万人調査によれば、「産業界・社会・経済に貢献する大学」とは、①時代のニーズに即した学部・学科がある ②実践的な授業を積極的に行っている ③企業との共同研究が盛ん ④独自の教育理念を持っている ⑤社会人の受け入れを積極的に行っている ⑥教養や社会人としての常識の教育に熱心（以下略）となっている。

「出口」を考えたとき、上記の調査は無視できない。実際に産学連携、他大との単位互換、複数大学共同による大学院大学設立など大学の動きは積極的に活発だ。行政側も規制を緩和して大学の自主的改革を促している。

### 2 感想

学部等単位の評価結果を通読して概ね良好との感想を抱いたが、一方で前項の内容と照らし合わせて、当大学が今、最も力を入れている点は何かが判然としなかった。むしろ学部によって研究・教育内容に違いが大きいため一律にはいかないだろうが「戦略」があるのかと気になった。

当大学の強みは「規模」にある。総合大学の中でもとりわけ学部の数が多く学生数も多い。大学内の学部間提携を進めることにより他大では難しい、学際研究も他学部単位互換も容易かつ、きめ細かなものとなるだろう。例えば、文理学部の学生が簿記を取得し、商学部の学生が英語教師の資格を取るなど充分に考えられる。

強みが弱みになることもある。規模が大きすぎて全体性、統一性に欠ける懸念はないか。

### 3 ご提案

リーダーシップを発揮しやすい組織を構築してはどうか。

一般に、上意下達のラインと、成果向上のために脇から横断的に関与するスタッフとに役割は分けられるが、当大学の本部はどのような機能を持っているのか。あるいは、激変する環境の中でどのような機能をめざすのか。

#### ① 意思決定

理事会、常務会、本部部長会などの会議体は整えられているか。学部・附属校の会議も全体のヒエラルキーに含まれているか。学園全体の意思決定が明確か。

各会議体に順位があり、議長選任・審議内容が明確に定められているか。最高意思決定機関が定められていて実際に機能しているか。予算規模に応じて決裁すべき会議が定められているか。大学職員の誰もが職位に応じて提案できる会議体や正規ルートがあるか。会議体の数は適正か。数が多すぎて順位が明確でないということはないか。

学部の名称変更や再編・新設などは大変戦略的な事柄だが、どこで誰の責任で検討され、どう実行されるのか。

#### ② 実行と責任

会議で決裁されたことは誰の責任で実行され、成果は誰の評価になるのか決められているか。実行に当たり、大学は実行責任者に十分な援助・便宜を図ることが合わせて決裁されるか。また所期の成果が上がらなかったときに結果責任は誰が取るのか、その都度確認されているか。

経営機能である理事会の強化と、本部機能の強化は必須ではないか。理事会とそのスタッフである本部には強い権限が与えられて、大胆で戦略的な施策を取れるようにしてはどうか。理事長と理事会とは責任を持って大学経営を行うために各学部に対する、例えば学部長の罷免など一定の権限を持つ一方で、全体方針を決め、責任を持って実行する。有体に言って、本部職員が朝から夕方まで「ふー、ふー」言いながら働いているイメージがよい。

権限が与えられて、思い切った仕事をする。できれば評価されるし、できなければ業務を外れるという明快な組織は大学組織には合わないのかもしれないが、時代の激変の中で速やかに対応し、短時間で成果を上げようとするれば必然に近い組織である。

### ③ 評価

無論，カウンターパワーは必要で，理事会の成果を監査する機能を設けなければならない。理事長と総長とを分業に出来るのであれば，総長の下に監査委員会（外部委員を加えた組織）を組織して，理事会の業績評価を行ってはどうか。

監査委員会では学部ごとの評価もしてはどうか。評価項目は，教育・研究・経営など大項目のみがよく，細かな評価は時間と費用がかかるので避けたい。

## 4 思いつくままに

- ① 全学部統一入試はできないか。
- ② 教養学部新設はできないか。教養学部では2年間の教養課程の中で進級する専門学部を決める仕組みにする。
- ③ 「理念」をもっと出せないか。日本大学卒業ならば安心，といわれる人間教育は出来ないか。18歳になれば大人なのだから，学力を付けることと同様に，社会人として恥ずかしくない常識を身に付けることも大切だ。
- ④ 学部所在の地域との交流は意識的に行われているか。幼稚園や保育園でのボランティア，小学生・中学生への特別授業，大学周辺の清掃，地元商店からの物品購入など。
- ⑤ 上記②. ③. ④を総合して，附属高校での教育に統一テーマを打ち出せないか。
- ⑥ ビジネスマナー研修を早い段階で行う。就職活動は3年生から始まるのでそれ以前に行いたい。
- ⑦ 入学願書の全学部統一フォーム化。例えば貼付する写真サイズは全学部申し合わせて統一してあるか。

## 5 おわりに

貴大学をよく知らない外部者ゆえに，的外れな部分が多々あるのではないかと恐れつつレポートを記しました。

見知る限りで申せば、大変な知的・人的・物的財産をお持ちの「超」大組織と感じており、それゆえに可能性が大きく、またリーダーシップが必要と考えます。

## 平成19年度日本大学外部評価についてのご報告

株式会社ビックカメラ 代表取締役社長  
宮 嶋 宏 幸

### <課題と思われる項目>

#### 1 施設に関連する主な項目

- ① 校舎・建物など、施設についての老朽化に関する懸念が散見される。
  - ・耐震補強の必要性を感じている方がいる。
  - ・災害時の避難場所告知強化が必要。
  - ・校舎のバリアフリー化（障害者対策）。
  - ・図書館のユニバーサルデザイン化促進を求める声がある。
- ② キャンパスが点在していることによる、大学としての一体感の欠如に関する項目。
  - ・単科大学の様相が見受けられるようで、横の連携がないと感じる方が複数いる。
  - ・データを収録したカード（IDカード）で全学部の施設を自由に利用できるようにしてはどうか（1，2年の教養課程は希望があれば学部を問わずどこでも履修できるなど）と言う提案。
  - ・通常貴大学に限らず、学部間の相互乗り入れは活発ではないのではないかと推測しますが、図書館や食堂などの施設については利用できる方が利便性向上に大きく寄与すると考える。
  - ・IDカード化には経費も必要ですが、利用履歴を蓄積し、学生の就学状況の確認なども行えるとすれば、検討の余地があると考えられる。
- ③ 学生同士の交流の場が少ない。（学外の喫茶店などの利用者が多い）
  - ・空き時間を過ごす場所（図書館70％，ホール・食堂20％台，周辺の店30％台）。
  - ・学生とOB・OGとの忌憚ない意見交換の場の提供が望まれています（世間話など）。
  - ・分煙化されているが、灰皿設置場所以外に吸殻が散乱しているという指摘。大学に限らず、どこの組織でも起こっている問題であり、当社でも社員教

育の一部として考えている。

- ④ 食堂のロケーションに対する不満。(地下=圧迫感), 内容(品数が少ない)
  - ・近年のキャンパスでは, 明るく開放感があり, 近隣の方も利用できるような形もあるようだ。大学施設の市民への開放の一手段として, 施設の移設やリニューアルを検討する価値はあるかと考える。

## 2 制度や体制に関連する主な項目

- ① 購買部組織のみで生協組織がないため, 学内で安心・安全な商品を安価に購入することができない。
- ② 講義内容の向上を求める声が複数ある。
  - ・専任教授不足や学力向上要求が, 学生側にある。  
最近の学生気質としては, 自ら積極的に知識を吸収すると言うより, 自分が興味を持ったものに対して反応するようなどころがあるのではないかと感じる。  
そのため, 講義にしても「判りやすい」「面白い」などの要素が求められているのではないかと。
  - ・定員制科目=人気が高い=受講できないことが多い。  
人気のある講義に申し込み, 結果が出るころには(受講できなかった時)第二希望の講義も締め切っているというような事例があるようだ。  
複数同時申し込みができるのかどうかは不明だが, 人気のある講義や講師の方がどのような手法をとっているのか, 講義内容を実際に確認されるような, 細かな気づき行為をとられるとより良い方向に向かうのではないかと。
- ③ 試験期間になると登校人数が増える(普段登校していない学生が多い懸念)。  
上記と同様, 学生が興味を持つような講義内容を増やすために, 具体的に人気のある講義や講師の内容を調査して, 他の講師の方に情報公開してみるの, 如何か。
- ④ 大学資料, 学部資料など資料が多くわかりにくい。集約するなどの工夫が必要。
- ⑤ 心の病の学生増加=カウンセラー増員とピアサポートの導入を求める意見。

- ⑥ 進路指導のキャリアアドバイザーを置いていない。
  - ・入社3，4年目社員の話聞く会を設けたほうがよい（法学部意見）。
  
- ⑦ 少子高齢化→魅力ある大学作りの必要性を感じている方がいる中で，教育理念や，新ロゴマークに期待する向きと，具体性に欠けると懸念する向きがあるが，新ロゴマークについては，露出機会を増やすことと，変更した意味（意義）を広報する事が重要だと考える（〇〇が変わるきっかけとなっている，など）。
  
- ⑧ 就職活動に関するWebの活用を求める声がある。
  - ・学科単位の情報提供ではなく，募集企業のニーズに合わせて理系学部にも事務系紹介などができるようなキャリアセンター的なものがあるのが望ましい。

### 3 総合

卒業生の方の現地調査を交えた評価内容からは次のような課題が認められる。

- ① 校舎・建物などの施設についての老朽化。
  
- ② 学部ごとに点在するキャンパスによる，横の連携欠如。
  - 特に学生が頻繁に利用する図書館に関する相互利用のハードルがあるようだ。
  
- ③ 学生同士，学生と講師陣などのコミュニケーションの場が少ない。
  
- ④ 講義内容について，学生がより興味を持つものを提供できる時代の先取り感覚。
  
- ⑤ 就職活動支援に関しては学部ごとに対応の差があるようなので，学部ごとの学生さんがどのような進路を取るのかを踏まえた上で，主な業界，業種の難易度にあわせたような，決め細やかな対応を一層心がけられると良いと思う。
  
- ⑥ インターネットを活用した学校案内の充実を求める声が散見されている。
  - 当社でもいえることだが，パソコンのみならず携帯電話を媒体とした情報提供に注力する必要が増大していると考ええる。



⑦ 学力低下というキーワードも散見される。一般企業でも無気力や事なかれ主義に近い新卒者が見受けられるが、世代の気質と言うことでなく、行動を含めた教育を充実させることが重要であると考ええる。

企業においては社員教育となるが、大学ではセミナーやカウンセリングに自ら参加するような手法（強制ではなく）がよいかと考える。

⑧ 医学部の意見の中にアカハラを懸念する記述があるが、セクハラ、パワハラと同様、急速に意識が高まっている現状を的確に認識し、対処方法を修正するよう教職員教育を行うことがよいと考える。

⑨ 総じて学部特性を生かした就職支援については、評価されている方が多いようだが、専門外の企業に就職を希望する学生向けの就職支援策が求められているように感じる。

明確な意思を持って入学してきていない学生の場合、在学中にやりたいことが変革し、卒業後の進路が想定外ということが今後多発することも予想した、学部間の情報共有なり、相互乗り入れなりを考えることが望まれまると考える。

## 日本大学平成19年度大学単位外部評価

読売新聞東京本社 専務取締役 論説委員長  
朝倉敏夫

### 1 総論的印象

初めて資料的、具体的に接した日本大学の巨大さに圧倒されつつ、それなりのスケールメリットもあること、そのスケールメリットを活かすための様々な工夫、努力もなされていることを知った。以下の点は、すでに企画検討委員会等の場で議論の対象になっていることかもしれないが、外部者として諸資料を読んだ印象としての改革・改善点を挙げておく。

### 2 優秀な学生の確保

少子化、大学全入時代を迎え、すでに少なからぬ大学が定員割れ現象を生じている流れにあって、とりわけ日大にとっては、今後、そのスケールメリットを維持するための学生数の確保が重大な課題であろう。その一方途として、少数のエリート集団育成コースを設けることも考えられよう。それを大いにPRすることにより、日大イメージの改善に資する可能性もあるのではないか。

#### ① 飛び入学

諸外国では、飛び入学は（飛び進級も）ごくありふれた制度である。日本でも一部で始まっているが、まだまだ“極例外”的な微現象にすぎない。「全学自己点検・評価報告書2006」によると、文理学部だけが実施している。これを全学的な制度として導入すべきである。

- (1) 飛び入学に応じる高校生、入学し得る学生は、基本的に、能力・素質・自負心・向学心の優れた人材であろう。そうした高校生が志すような制度の整備は、日本の高等教育全体という観点からも必要である。
- (2) ただし、そうした学生の能力を伸ばすためには、入学後のアフターケア体制を綿密に整えることも大切だ。たとえば、そうした学生個々人の学生カルテ的なものも作成し、資料にいう留学生への個別指導・サービスと同様、あるいは、それ以上の、ウォッチ・ケアが可能な態勢が要るだろう。

#### ② 成績優良者の授業料免除

- (1) 成績優良者の授業料免除は、入学試験成績の段階から設けている大学がある。これも優秀な学生を確保する強い誘引の一つになるだろう。
- (2) 入学後の成績優良者への授業料を免除する制度のある大学も珍しくはない。勉学意欲へのインセンティブになりえよう
- (3) これらは、ともに、諸企業の寄付による「冠付き栄誉賞」としての授業料免除群と併設することも考えられる。

### ③ 女子専用寮の創設

「平成20年度進学ガイド」によると、男子専用の「武蔵俊英寮」がある。女子専用寮をこそ設置すべきである。

- (1) 生産工学部の外部評価に、「大変だったのは……女子学生に対して配慮しているアパートの情報がとても少なかったので苦労した」とある。遠隔地から娘を送り出す親にとっての最大の心配の一つは、住生活の安全・安心である。女子寮の有無は、大学選択の際の有力な誘引になりえる。
- (2) 入寮資格者は、入学時に際して、入寮希望者のうち入学試験成績順ということにすれば、優秀な女子学生を確保する一方途となりえよう。

## 3 支援制度の運用

大学全体として、さまざまな奨学金制度があるようだ。しかし、学部別外部評価には、「奨学金があることをさえ知らない学生も」という指摘がある。これは、学部の独自性に委ねるといって話ではなく大学当局の怠慢と言えよう。奨学金に限らず、「大学全体や学部独自の学生生活を支援するさまざまな制度があるが、それが学生に周知されているか」というと、必ずしもそうではないのではないか」という指摘もある。同質の課題である。

### ① “官僚化”の回避

- (1) 生産工学部の外部評価に、「資料が多すぎる。すべてを読む学生がいるでしょうか」とある。大学組織・事務局が、資料を作れば仕事が済んだとするような“官僚化”している懸念はないか。他にも「今後はさまざまな支援内容の「告知方法」を学部のみならず大学全体で考えていく必要があるように感じる」等々の同様指摘が複数ある。今頃、こんな指摘が多数あるようでは、やはり、巨大組織体として怠慢な部分があるということだろう。
- (2) 特に「現在の学生は少子化した親に育てられた少子化した子供として…手厚い様々なサービスを当然として受けて成長しており、おしなべて受け身…あらゆるチャネルを駆使した繰り返しの取り組みが必要」との指摘は、今後の改善策を考える上で、本質的な課題であろう。

### ② 学生サービス・支援の標準化

- (1) 改善策の第一歩は、大学全体に共通する学生サービス告知方法の作成だろう。
- (2) ただし、繰り返すが、標準マニュアルを作成したらそれで終わりというような“官僚的”感覚に陥らぬよう、絶えず、神経質なくらいに、自省・点検しなくてはならない。

#### 4 事務窓口の改善

概して、学生数の多い学部ほど、事務窓口の満足度は低いようだ。医学部、歯学部などでの事務局対応への満足度の高さと対照的である。ある程度、必然的な現象と言えるかもしれないが、大人数の学部がそれを言い訳にしてはなるまい。これも学部任せではなく、大学本部当局の強い指導力が必要である。学生の満足度を事務窓口職員の給与査定に反映させるくらいのシステムを考えてもよい。

#### 5 図書館の運営

図書館サービスの充実は、大学イメージ形成のうえで、重要なポイントの一つである。だが、学部による違いが大きすぎる印象である。

##### ① 平日閉館時間の延長

たとえば経済学部の閉館は午後10時なのに対し、薬学部は午後7時という。学部の位置・周辺環境等、一律にはやりにくい場合もあろうかとは想像されるが、各学部のヤル気も影響しているということはないのだろうか。

##### ② 休日開館の可能性

日曜・休日にも利用できるようにする方向を目指すべきである。他大学には、そうした実例もある。医学部は平成20年度を目標に検討中とのことであるが、全学部の努力目標とすべきだろう。

#### 6 寄付講座の開拓

大学にとっての少子化・定員割れという時代環境は、企業にとっても労働力不足・人集め苦勞時代の到来である。したがって、企業側も将来の人材“青田刈り”，イメージ戦略へ向けて、寄附講座への取り組みを強めつつある。先に、成績優良者の学費免除に関連して「冠付き栄誉賞」も考慮すべきと述べたが、一般講座についても積極的に導入すべきだ。そうした一面に関する限りでは、むしろ良好な時代環境になってきたとさえ言える。

#### 7 理事，評議員の構成

諸資料を見ていて、ちょっと気になったのは、理事，評議員の選考基準がひどく閉鎖的であるような印象を受けたことだ。あいにく、他大学の実情についてはよく知らないし、外部の者がとやかくいうべき問題ではないのかもしれないが、閉鎖的な人的構成世界では、とかく“自己分析”がぬるま湯的傾向になる危険がありはしないか、という気がした。

## Ⅱ 外部評価結果（学部等単位）



評価した学部等	法学部
評価者氏名	柴田 秀一
<p>評価結果（評価の記述は、①学生からの聞き取りに基づくもの（20人程度）、②私自身の評価の二つに分けて行った）</p>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p>① 学生からの聞き取りによる良い点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○本校舎が都心近くにあるところが便利である。</li> <li>○図書館の施設がきれいであり利用しやすい。</li> <li>○各種資格試験対策講座があるところ</li> <li>○学費が他大学に比べて安い</li> <li>○ゼミの多様性。たくさんの選択肢がある。</li> <li>○食堂の価格が安い</li> <li>○就職指導の相談等が充実している。</li> <li>○新聞学科の2年生は三崎町に来てから専門教科の授業が楽しくて仕方がないと言っていた。</li> </ul> <p>② 私自身が考えること</p> <p>学生の考える利点は、おおむね予想通りであり私も賛成する。また、特待生制度や、奨学金制度が充実している点は良い。就職ガイダンスをオール日大で東京フォーラムで開いている点などは評価出来、セクハラ対策のしおりを配るなど今日の問題にも対処している。（実態がきちんと把握されている必要があるが）</p> <p>大宮校舎を廃止することにより、都心に校舎が集中することも、良い点だと思う。だが、在学中から、キャンパスと呼べる緑を配した敷地が法学部にないことを残念に思っていた。</p> <p>以下は提案だが、</p> <p>東京都内にある日本大学校舎を一箇所に集め、一大キャンパス・学生街を作るのはどうか。</p> <p>神奈川・千葉など都以外の近県施設は距離の点からその統合は難しいと思われるが、都内にある法学部・経済学部・理工学部・文理学部・商学部・芸術学部・医学部・歯学部・通信教育部を、理工学部・歯学部ある神田駿河台周辺、もしくは、日本大学発祥の地、法学部の神田三崎町に集め、キャンパスを作る。東京都内再開発が進むなか、神田、特に三崎町周辺は、周りには高層ビルが増えてはいるが、まだ、雑然とした佇まいが残っており、それが良いという人もいますが、再開発をし、緑を配したキャンパスを作ることは、都心近くで便利で通学しやすいというだけではない、大学のイメージというものが築きやすい。</p>	

明治大学の「リバティータワー」が良い例である。学生の親が良く見に来るそうである。少子高齢化を迎え、大学生だけではなく、社会人・退職者等に講座を設けることが必要となってくる事などを考えると、まさに開学120周年を迎える時を機に、ビルの乱立する中に、木々・植物を配するキャンパスを持つことによって、都心の環境整備にもなり、ランドマークともなる。

7万人以上の学生を擁する「メガ大学」が学部により個々に分かれている良い部分もあるが、これからの大学のありようを考えると、安穩としてはいられないのではないか。慶應大学と共立薬科大学の合併に象徴されるように、分散するよりも、法文芸術理工医歯薬学部もある総合大学として総合力で乗り切るのが、賢い方法ではないか。

## 改善や強化が必要な点

### ① 学生からの聞き取りによる改善点

- 施設・・・一部の新しい校舎・図書館以外は、老朽化が進んでいる。耐震性が心配である。机・椅子が不安定な教室があり、授業に集中できにくい。また、試験の期間は突如混雑して大変である。  
クラブ・同好会等の所属者以外の学生が集えたり、喋ったりする場所が少ない。本館一階の学生ホールくらいしかない。図書館以外に勉強・自習する場所がない。生協がないので出費がかさむ。
- 食堂・・・混雑が激しい。メニューが少ない。他業者の競合にしてはどうか。地下にあるより、地上階で外を見ながら食事をしたほうが、リフレッシュできる。
- 授業・・・シラバスと時間割、履修登録を一体化したほうが良い。  
語学の授業を増やしてほしい。語学は必修科目なのに抽選登録制なのはおかしい。4年生まで単位を持ち越してしまう学生もいる。似たような科目のゼミが多く選択の幅が広がらない。他学部交換単位のPRをもっとすべきである。
- 就職指導・・・就職そのものだけでなく、それに関連する不安等も取り除いてほしい。一年次から就職のサポートをしてほしい。学生数に対して指導室が小さいのでもっと大きくしてほしい。
- クラスを設置してほしい。クラブ、同好会に属していない学生は、学生間のよりどころがないので、一年次だけでなく、クラスがあると集まったりレクリエーションを企画したり出来、学生間の結びつきも生まれる。

### ② 私自身の考えかた

- 学生の集う場所の工夫。



学生時代から感じていたことではあるが、やはり、学生が集まれる場所が少ないこと。私の時は、喫茶店で話をしたり勉強したりしていた。大学の評価用資料によると法学部で、空き時間を何処で過ごすかは、図書館70.9%、学生ホール27.8%、学生食堂22.4%、周辺の店30.4%。学生ホールより店で過ごすほうが多い。本館一階の学生ホールも改善の余地ありで、ただ広く仕切りなく椅子・机を配せばよいのではなく、パーティションで仕切った自習スペースや、20人くらいは集まれるスペースなどが、配されていると良いのではないかと思う。卒業式の後には学部に戻ってきて卒業の集いをこの場所で行うが、柱が多く見通しが悪く音響も通らないので、本館の大講堂か、新しく出来る10号館にそうした、簡単なホールを設けることも一つだと思う。いずれにしてもキャンパスが欲しいというのが根本的な提案である。

#### ○学部交換単位の必要性

近年、経済犯罪や報道の倫理が問われることが多く起きている。

それに対応した学科を設けることを提案し他学部生も受講できるようにすべきと考える。独禁法・談合・企業買収と防衛策発動・株価操作・インサイダー取引等の今日的経済事案を講義する科目あるいはゼミを、経済学部との交換単位にすること。また、検事、弁護士等を目指す人たちのみならず、マスコミを目指す人達も法知識がなかなか仕事に生かせない。報道と名誉毀損との関係等の今日的問題も、新聞・放送の取材、記事化、放送化の過程を知っていなくては理解できない。法学部と芸術学部の放送学科に、特にこうした単位が交換できる科目を設置し（放送・新聞・雑誌などの報道倫理、新聞雑誌の記事化過程・放送の番組化過程）できれば必修とすることが望ましい。又、前述の経済事案をジャーナリズムを目指す人達には是非聴講して欲しい。経済と法に秀でている記者が少ないのが現状である。それから、学生が言っているように、交換単位のPRも必要である。

このほか、ボランティア活動の単位を設ける事や、国の内外の大学との交換単位を認めること。更にAO入試・飛び入学を実施されたい。

#### ○公開講座の常設

年に3回～4回公開講座を設けるべきである。

内容は今日的な諸問題について、法学部教員が法律研究家の立場からの解説、他分野からの解説や研究成果の披露。日本大学のOBで各界活躍している人達を講師に招き、継続的に行い、学生も一般の人にも聞けるようにすること。広告を打つことで、大学の社会貢献が図れる。

#### ○就職指導

「進路指導を行うキャリア・アドバイザーを置いていない」と資料にあつ

たが、大仰なアドバイザーより、入社3～4年の卒業生達に毎年話しを聞く会を設けたほうが効果はあると思う。1年次から参加できるOB会社員・弁護士・検事・マスコミをはじめ各業界のOBが現役学生と車座になって話すという、「就職」を知る会を開く。OBは話が上手なほうがよいが、就職指導課が追跡調査をしていると思うので、就職指導の段階で入社試験に合格したら、こうした会に来てもらうよう約束していき、常に何人かのOBが協力してくれる体制にあることが望ましい。校友会との上手な協力も必要だ。

また、他大学が実施している繰上げ卒業も実施すべきである。実際の卒業は翌年の3月でも、単位が足りていれば4年次の9月実質卒業で、就職した会社の仕事に従事できる制度で、3年次終了時点でほぼ卒業単位が取れる制度がないと出来ない。

以上が評価結果である。

#### これからの学生支援に望むこと

- 学生からの要望にこういう事があった。「大学の事務窓口の職員の対応が親切とは言えない状態である。できれば、事務手続をせずに済ませたい」「事務室には、日大OBが多いのに私達にはわりあい横柄に接している。私達が後輩ということもあるのだろうが、先輩ならば、もう少し優しい接し方もあるのではないか」これは、何人かの学生から聞かれたことばである。学生の礼儀知らずもあるかもしれない。が、学生が礼儀を尽くしても、態度が冷たい事務員がいたことを私も学生時代に経験している。
- クラスを1年次だけでなくそのほかの年次にも設定して欲しいというのは、OBからも聴かれたことばである。クラブ・同好会に属さない学生達のよりどころとなるものが欲しいようだ。

このように、今後の学生支援については、なにか暖かみのある、学生と大学が結びつきを深める工夫が必要である。大学は学生の事を見捨てていないのだという強い意思である。

学生は大学の宝ではないか。学生の質が高まらなくては、大学は運営していけない。学生の側から自ら研鑽していこうと思わせる施設、職員、学科目、授業、研究室、が必要である。その根本は、学生に対する「暖かさ」であると思はる。

評価した学部等	法学部
評価者氏名	小堀 球美子
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p><b>（学習支援に関して）</b></p> <p>相互履修制度は、分散型キャンパスを持つ本学の特色を踏まえたもので、幅広く学べる点で評価できる。</p> <p>法職過程をもうけている点は、一年次から目的意識を持って学べる点で評価できる。</p> <p>外国語教育で、TOEICコースを設けている点は、私が学生の時はなかった課程で、国際化社会で生き延びていく一助となり評価できる。</p> <p>司法科研究室では、個別席も確保されており。学ぶ環境を整える意味で評価できる。</p> <p>法律学科二部の定員を増やしたことは、働く学生のニーズに適い評価できる。</p> <p>ゼミナールの2・3年次履修は見送られたが、少人数制演習科目を取り入れた点は、一人一人に目の行き届く方法であり評価できる。</p> <p><b>（主体的活動支援に関して）</b></p> <p>公認サークルへの助成金の交付は、学生が本来的なサークル活動に専念できるよう支援するもので評価できる。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p><b>（学習支援に関して）</b></p> <p>図書館の利用は、学びたい学生のニーズにあわせ、日曜日の利用も検討されるべきである。</p> <p><b>（生活支援に関して）</b></p> <p>カウンセリングサービスは、それ自体評価できるが、周囲の目を気にしないで済むように、学外でもなされるとよい。</p> <p>法学部では校舎増強が実施されるが、それに伴い、学食・学生の情報交換の場（談話室など）も強化されるべきである。</p> <p><b>（学生支援に関して）</b></p> <p>大宮校舎が三崎町校舎に統合されることは、4年間一体で学べる点で評価できるが、マンモス化するので、一人一人の学生に目が行き届くように留意すべきである。</p>	

### これからの学生支援に望むこと

法学部は本学発祥の歴史を持つのであるから、法曹養成に力を入れてもらいたい。学生の頃から、法曹の実際について知識理解を深めるために、法曹三者と接する機会をより増やしてもらいたい。

司法科研究室の体制が、私が学生だった頃と変化がない。歴史を重んじることも大切だが、旧司法試験も終了することもあり、体制を見直す時機ではないか。

本学受験者数が減少傾向にあるが、優位な人材確保のために、附属高校などへPR活動を行ってはどうか。

### その他

今回、評価を検討してみて、マンモス大学である本学が、その特性を活かすことができていると感じた。法学部一部5学科を実施している点も、本学であるからこそ実現できている。今後は、他学部、他学科相互の交流を深め、相互行き来できる環境を整備することが望まれる。

評価した学部等	文理学部（経済学部・商学部）
評価者氏名	柳原礼子
<b>評価結果</b>	
よい（効果的である）と思われる点	
<p><b>文理学部</b></p> <p>最新の図書館・コンピューター設備が充実している。地下の書庫までを学生に開放している点がよい。図書館は開館したばかりであり、その内容の充実が期待される。中庭とグラウンドがあるので、開放感がある。学生が戸外でくつろげるスペースがある。カウンセリング室が地域の住民にも開放されている。</p> <p><b>経済学部</b></p> <p>上記同様、地下の書庫までを学生に開放している点がよい。図書館の開館時間が3学部の中でもっとも長い。平日は閉館が10時と学生・院生の利用しやすい時間帯となっている。大学院生にひとり一つずつ机を備えている。できればもう少しスペースが広いことが望ましい。机にパソコンに対応した設備が設けられている教室がある。</p> <p><b>商学部</b></p> <p>中庭があるため、開放感があり、視覚的に広く見える。大学院生専用のロッカーを設けている。図書館の書庫については上記2学部と同じ。就職率が98%と就職状況がよい。</p> <p>3学部とも新入生について、基礎学力や大学生活についての指導を行っている。学生自身も不安を感じており、必要なケアといえる。</p>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p>大学院生には経済学部では専用の机があり、商学部ではロッカーがある等設備まちまち。全日大の大学院生に一律に専用の机とロッカーを設けるなどの設備の充実が必要。</p> <p>経済学部では、その立地状況・構造上、万が一の場合の避難に不安を覚える。災害時の第一次避難場所はどこなのか。学生に避難経路・避難場所の周知徹底をするべき。</p> <p>全学部の耐震化を進めてほしい。</p> <p>障害者が学べるように、校舎のバリアフリー化を進めてほしい。</p> <p>文理学部の資料館は開館したばかりであり、その利用法はこれからの課題であろうが、スペースが狭すぎる。学芸員過程が学部内にあるのだから、学芸員にな</p>	

るための実習のほとんどを資料館でまかなえるようになるのが望ましい。その展示物も日大が所蔵しているものを第一に、学内・学外に向けてアピールできる充実した内容にしてほしい。展示の方法に一考を。

「授業料に見合った授業内容」については、学生の満足度が全学部を通じて低い。また、『望まれる大学づくり』のなかでも「学力的にレベルの高い大学」が全学部でほとんどをトップを占めている。学生がいかに現状の授業内容や日大の学力レベルに不満を持っているかが現れている。これについては専任の教員の数を増やすなどの対策が必要。日大はとにかく学生の数が他の大学に比べても多いのだから、その多い学生数に見合う数の専任教員を揃えるべきである。現状の教員数では、1・2年の教養過程のうちはいいかもかもしれないが、3・4年の専門課程では学生が満足するような指導はできない。

商学部では、就職率が良い反面、大学院に進学する学生がほとんどいない。学部の性格上、卒業後の実社会に目を向ける学生がほとんどなのはやむをえないのだろうが、学部としての今後を考えると心配される一面でもある。それとこれは学部の今までの方針なのであろうが、ゼミも卒業論文も選択性になっている。選択する学生は約半分なのだそうだ。この選択性を取っていることも大学院に進む学生が少ない一因になってはいないか。

また、ゼミや卒論を必修にせずに、選択性にすることが良いことなのか今一度の論議が必要。

商学部では、持ち込み可の試験に、必要な教科書を購入せずに、図書室の資料をそのまま持ち込む学生がいるとのこと。本人も恥ずかしいとは思わないし、教員も咎めないとのこと。これを認めたままでよいのかどうかを学部で考えてほしい。

大学としての規模ばかり大きくて、内容も中途半端なら、学力レベルも中途半端。それが今の日大の現状だろう。この中途半端をどうするかが、今後の大きな課題である。そして、もうひとつの大きな課題は、各学部が地域にバラバラに点在している点である。お互いが別々の単科大学の様になっていて、研究などで横の連携が取れていない。シンポジウムでも意見が出たように、各学部を一箇所に集め、統合するための長期で遠大な計画の検討が必要。

#### これからの学生支援に望むこと

日大の総合大学であり、各学部が全国に散らばっている。そのためか、[他学部の教員・学生の交流]「他学部の授業との互換性」・「他学部の催し等の情報入手」について学生の不満度が高い。各学部間の連携・交流について改善が必要。

互いの学部の子行き来を容易にするために、たとえば、本部で全学生の子データの管理をおこなってはどうか。そして、そのデータの子入った個人カードを学生に所持させる。カードさえあれば、提示するだけで、各学部・各学科はもちろん図書館などの設備にも自由に出入りできるようにする。この学生の子データの管理さえできれば、どこの学部でどの単位を取ろうとも、その把握は容易になり、「他学部の子授業との互換性」も増すはずである。学部間の子学生の子交流も盛んになるし、学部間の子情報交換も容易になると思う。

同様に、たとえば1・2年の子教養課程は、学生が希望するならば、居住する地域に一番近い学部で受けられるようにすることもできる。専門課程だけそれぞれの学部で受ければよい。そうすれば、学生はもちろん、親の負担も軽減するではないか。

現在、学部子購買部はあるが、これをもっと広げた形で学生生協を設けることを検討してはどうか。自分が日大に入学して学生生協がないことにびっくりした覚えがある。友人がいた明治大学や東洋大学には学生生協があり、何かと学生の子利便をはかっていた。日大ほどの規模がありながら今もってないのは不思議なくらいである。学生の子生活をバックアップする意味からも検討してほしい。

学生の子アンケートを見ると、入学以来の子不安や悩みの中で、「家計・学費・借金等の子経済上の子問題」がほとんどの学部で上位を占めている。その反面、奨学金については、「奨学金に関する情報を容易に入手することができない」・「注意していないので、わからない」が上位を占めている。これは、奨学金があることさえ知らない学生が多いということではないだろうか。私自身、恥ずかしながら在学中はあることを知らなかった。調査報告書にもある通り、奨学金についての情報伝達に関してはまだまだ問題があり、その方法にも課題を残している。入学時にはもちろん説明があるのだろうが、進学時などでも機会をとらえて学生に知らせる工夫が必要。その奨学金も貸与ではなく、給付を増やしてほしい。

## その他

経済学部とそれに隣接する法学部の子校舎を見ると、その外観・色調に統一性が全くない。日大の子シンボルマークが決まったように、建造物にも日大固有の特色を持たせるといのはどうだろう。どこに建てられてもどこにあっても人目で日大関係のものだと分かるシンボル性があってもよいのでないか。

上記の子校舎同様、各学部の子図書館の開館時間もまちまちで、統一されていない。日大は総合大学であり、各学部が全国に散らばっているせい子、学部の子独自性が強く、相互の子連携・統一が取られていない。上記の子校舎や図書館の開館時間がそ

の良い例だ。3学部を見学したが、同じ大学とは思えず、別々の大学を見て歩いたようだった。各学部の垣根を取り去り、風通しをよくすることが求められる。本部を含め、各学部の相互の連携がうまくいかなければ、いざ改革の方向が決まっても、足並みを揃えることができないし、日大全体としての向上は望めない。

卒業生を外部評価者に参加させることもよい取り組みであろうが、今現在の問題点や改善点を必要としているならば、在校生の声に耳を傾けるべきではないか。大学を出て何年も経っている我々よりも今、大学にいる学生のほうがより大学の在りかたについて、切実な生の声を聴かせてくれると思う。学部長あるいは総長と学生が交流できる場をつくり、トップが学生と意見交換をする機会を設けてはどうか。

今回、各学部でわずかではあったが、数人かの職員の方々に会い、お話を伺う機会を得ることができた。個々の方々が、それぞれ現状に危機感を持ち、問題意識を持っておられた。それは外部の我々より、よりいっそう現場に即したものだし、今を見据えている。彼らの意見が、学部長や理事会に届くことはあるのだろうか。上記の学生同様、今、大学で働いている職員の意見や思いを吸い上げ、活かせる大学組織であってほしいと思う。

今回の外部評価は大学のための外部評価なのか、それとも学生のための外部評価なのか。今ひとつ評価の目的が曖昧。あるべき大学としての問題点を洗い出したいのか、それとも日大の足りない点を挙げてほしいのかよくわからない。大学としては良くなったとしても、学生が集まるとは限らない。次回の外部評価は課題点をより絞りこんでいってほしい。

外部評価を出すまでの準備期間が短すぎる。約2ヶ月半の間で、用意された資料を読み、希望する学部の見学や学生とのインタビューなどで評価しろというのはいささか乱暴ではないか。せめて、半年くらいの準備期間を持って、学部全部を見学できる機会を設けるなどの配慮がほしい。

大学を卒業してから四半世紀が経った。今回このようなかたちで、思いがけず母校と再び交流を持つことができた。学生の頃には、訪れることのなかった他の学部を訪問し、職員の方のお話を伺うこともでき、嬉しい限りである。外部評価の一員にお選びいただいたことを感謝したい。



評価した学部等	文理学部
評価者氏名	伊藤敏彦
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p><b>【ハードウェア面】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・近年のキャンパス設備の更改・増設により、目覚しい学習環境（ハードウェア面）の充実が図られている。これは同学部の卒業生からすれば当然であるが、現在在学中の学生の意識を「日本大学学生生活実態調査報告書（以下 生活実態報告書）」に見ても、大学全体で設備面充実の満足度が上位を占めている中でも、同学部のハード的な学習環境に対する満足度は高い割合を示している事からも、学外へのPRにおいて有効であると思われる。</li> <li>・社会のIT化を捉え、コンピュータ科目を基礎教育科目に取り入れるだけでなく、学内のコンピュータ利用環境を整備・学生の利用を容易にしている。これは「生活実態報告書」でも高く評価されている事からも、学外へ強く訴求できるのではないかと思われる。</li> </ul> <p><b>【ソフトウェア面】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職支援の情報提供として、「具体的な就職活動の再現」の記事を作成・情報共有している点においては、実際の学部の先輩の行動が容易にイメージできる事点においては有効であると思われる。</li> <li>・大学全体の取組として行われている、「日本大学コミュニケーションセミナー」、「日本大学キャリアセミナー」等は、今社会において求められる「周りを巻込んで仕事を進めてゆく人材」、「リーダーシップを発揮する人材」を育成する点において、学生の卒業後を見据えた非常に良い取り組みであると考え。</li> </ul> <p>※概して、学習環境や就職支援等における改善は進んでいると思われる。</p>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p><b>【文理学部に求められているもの】</b></p> <p>1 学部紹介の冊子『日本大学 文理学部』の冒頭に記載されている通り『「好き」を極める』を實踐できる場の提供は、まさに今文理学部に求められている事であると考え。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・確かに、学生は『入学以来の不安や悩み』として「勉学上のこと（57.8%）」、「就職や将来の進路について（56.6%）」を上げている。自らを振り返っても大学時代は社会人を目前として特に「就職・進路」に悩むのは当然だと思われる。</li> <li>・一方で、『望まれる大学づくり』としては「魅力的な授業の多い大学（47.9%）」、</li> </ul>	

「学力的にレベルの高い大学 (33.6%)」を求めており、「就職に有利な大学 (9.9%)」は1割に満たない。ここから見れば、学生は大学に対して「魅力ある授業」の提供を要望している。

- ・つまり、「就職の支援」の提供は必須であるが、大学は第一として「魅力的な授業」=『「好き」を極める』実践の場を提供することこそ学生の求めている事であることであると考ええる。

2 学生は文理学部入学後「人間性が豊になった」と認識しているが、一方で『勉学意欲』は入学時から低い意識が、入学後更に意欲を失う傾向にあり、『人間性』と『勉学』でバランスの取れた向上のための施策が必要と考える。

- ・学生の文理学部入学理由は「希望した大学に入れなかった (32.9%)」とネガティブな理由がトップであるが、同時に「日大に来るべきではなかった (いいえ：85.2%)」、「他大学への再受験を考えた (いいえ：78.2%)」と入学を完全に後ろ向きに捉えてはいない。
- ・しかし、「入学後「さあ遊べる」と思った (はい：41.1%)」と遊ぶことに積極的で、「多くの授業に出て好成绩をとる (いいえ：42.3%)」と『勉学意欲』は高くない。
- ・入学後、「入学直後に比べ良さを認める (67.4%)」と文理学部の良さを認識し、併せて「人間性が豊になった (64.8%)」との点を評価している。学生生活が充実しているものと考えられる。
- ・一方、『勉学意欲』は「入学後、勉学意欲がもてる (いいえ：52.1%)」、「着々と勉学の成果を上げている (いいえ：70.2%)」と入学時に比べ悪化している。特に「基礎学力の不足を痛感する (75.3%)」とそもそも勉学における成果を期待するだけの基礎学力が不足していると思われる。
- ・つまり、「人間性の豊かさ」と同時に「勉学の成果の向上」をバランスよく実現するため、大学の範疇ではないかもしれないが『基礎学力の強化』に向け検討すべきであると考ええる。

3 教職員と接する機会を積極的に作るべきであると考ええる。

- ・前項で指摘のとおり、『学習意欲』の低下の要因として「良い教職員に出会えた (いいえ：57.1%)」が一因であると考ええる。
- ・しかし、私自身の在学中を考えると文理学部に良い教職員がいないとは考え難い。
- ・ここで注目されるのが、「教員と話のできる機会 (13.2%)」の項目において不満足度が高いことである。ゼミや研究室に所属すると教職員との密度高い議論の機会を得られるが、そうでない限りこのような機会は少ないと思われる。ここ

に『勉学意欲』向上の一つのカギがあるのではないかと考える。

4 「子供等も日大で学んで欲しい」と学生が思えるような大学になるよう、社会と特に卒業生との連携を強めて、そこからのフィードバックにより学生と教職員の“気づき”につなげる。

- ・「生活実態報告書」における「子供等も日大で学んで欲しい（いいえ：81.1%）」との結果には大きなショックを受けた。
- ・学生は、『学生生活』には満足してはいるものの、『勉学意欲の向上』や『日大は才能を伸ばしてくれる』等の面では大学に満足していないのがその一因かもしれない。
- ・しかしながら、これについては大学だけにその責任を押し付ける事はあたらないと考える。そもそも『勉学意欲の向上』や『才能を伸ばす』事は、教職員と学生が両輪となって進む事で初めて成果が出るものと考え。
- ・現在は教職員側が躍起となり大学を変えようと取組んでいるものの、受け手である学生は受身であり、この流れを自ら活かす動きが出ていない事もその一因であると考え。
- ・また、卒業生の奮起も必要であると考え。文理学部の卒業生が社会で活躍し、その卒業生のそれまでの行動がライブで学生や教職員にフィードバックされるような仕組みが整備されれば、学生は将来の自分へイメージを投影する事が可能になるし、教職員はこれまでの取組みの成果を収める事が容易になると考える。
- ・確かに、学部案内や就職指導資料には卒業生の就職体験談が記載されている。その内容はメジャー企業に就職した学生の紹介が中心で、就職後の卒業生の実際の体験が語られる事はない様に思われる。就職後の社会は泥臭いものであり、その中で自分がどのように感じ・行動し・現在に至っているかを共有することが重要ではないかと考える。
- ・結果、学生の奮起につながり、卒業後社会で活躍する数が増えれば、更に正のスパイラルとして働き、最終的には学生が「子供等も日大で学んで欲しい」と感じるように変わると考える。

#### これからの学生支援に望むこと

「日本大学コミュニケーションセミナー」、「日本大学キャリアセミナー」の取組みについては非常に有効であると考え。しかし、これを実際に受講しているのは一握りの学生である事が非常に残念であると思う。卒業後、社会で活動するためには「周囲を巻き込んで仕事を進める」「リーダーシップを発揮する」事が必要

不可欠である。通常大学としては、ゼミや研究室における教職員と学生を交えた議論等を通じ、これら能力を習得することを意図していると認識している。しかしながら、ゼミや研究室でいきなり実践する事ができない学生が多いのではないだろうか？この状況を考えると、基礎教育科目としてこれを取り込み、入学した早期から学習を行うべきであると考え。また、これらの能力はサークル活動を通じても習得は可能だと思われることから、学生へのサークル活動の奨励もこの能力育成の一助になると考える。

## その他

社会が猛烈なスピードで変化している中、それに対応して大学も変化しようとしている事。その変化に学内外の両面から検討を加える姿勢は非常に健全で、正しいと思われる。繰り返しになるが、この流れが教職員だけでなく学生、更に卒業生にまで伝播し、互いに影響しあいながら変化する機会を仕組みとして取入れて行くべきだと考える。社会（卒業生）と繋がり続け、お互いに良い影響を与え続けられる関係を構築する事は重要であると考え。

社会人になり、学生時代同様『基礎学力の不足』もさることながら、新しい事柄を常に勉強していかなければならない点を再認識した。大学は4年だが、社会人は40年程度やるのだから新しい知識を補充する事は当然である。しかし、社会システムが高度化する中、習得しなければならない知識も難解になっており、これを支援する機能を是非とも整えてもらえると卒業生としてもありがたいと考える。

評価した学部等	経済学部
評価者氏名	小松 秀 寿
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>経済学部においてゼミが2年次より必須となったことで、少人数の中で友人とのリレーションを保ちながら勉学できるチャンスを誰しも得ることができるという点は評価できる。</p> <p>環境保全を考慮した空調調整ならびにそれに対応する教職員の服装に対し、事前了承文を掲示し環境問題への取り組みを学生諸氏に知らしめ行動している。</p> <p>学部内は、B1の食堂およびその周辺から1F読書コーナー、パソコンコーナー、カフェテリアと机・椅子が十分に用意されており、比較的いつでも自由に勉強や会話ができる環境が整っている。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>館内は完全分煙が徹底されているだけに、5階オープンスペースの灰皿設置場所以外での吸殻の散乱は残念であった。禁煙・喫煙の表示があることにより避けられるのでは。</p> <p>クラス間での出席学生数のバラつきが散見。これらは、単位認定基準の違いによる差であることが推察され、最低限の出席日数の設定など、単位認定条件の画一化（バラつきの是正）が必要であると思われる。</p> <p>一見するとスポーツ新聞と見間違いそうな日大新聞に、OB情報や企業情報などの記事を増やし、就職のための情報を身近で得やすくしてはどうか。</p> <p>図書館のユニバーサルデザイン化。（車椅子の生徒、OB、大学関係者閲覧が自由にかつスムーズに実現できるように）</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>公開講座に関して、今回の調査で初めて知ることとなった（他のOB諸氏に問い合わせても知っている者は皆無であった）が、社会的にも幅の広いジャンルの講義が用意されており在學生にとっても有益であると思う。よって、より参加の機会を得やすくするため、在學生の受講料をさらに下げ、その分を一般に付加すべきと考える。</p> <p>入学時・就職活動時に学生に配布する資料をできるだけ少なく、かつ的確な</p>	

情報のみを集約するよう努力すべきである。

## その他

授業風景において、高齢の教職員がマイクを片手に座りながらぼそぼそとかつ淡々と話しており、一方生徒の方は、教壇からうしろの席で伏して寝ていたり、携帯を操作していたりとそれぞれみなバラバラの仕事(?)をしているのを目にした。ろくに生徒の方を見るでもなく、与えられた職務をこなすだけの授業は極力廃し、魅力的な講義にしていく必要があると感じる。そのためにも、定年制を採っていながら専任教授の41%が61歳以上という比重を下げ、全体の若返りを図っていくことが、これからの少子化を迎えるにあたって魅力的な日大をアピールする上で必要ではなからうか。

マンモス大学から、真に社会で活躍するための人間形成に相応しい大学というイメージを社会的に定着させることが、日本大学の存続を左右させる大きな要因となり、われわれ卒業生も責任の一端を担い行動していく必要性を感じる。と、同時に学校も来るべき少子化の波に対応するため、全体のスリム化・効率化を図り伝統の継承を切に希望するものである。

評価した学部等	経済学部
評価者氏名	角田 あかね
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>数年前まで選択科目であったゼミが必修化されたことは、より論理的・専門的な知識・思考を育成していく点から、良いことであると思う。</p> <p>学生が自由にパソコンを使えるようになった点も、こういったスキルが社会でも求められていることからみても良いことであると思う。</p> <p>派遣交換留学や語学研修等、海外の大学でのプログラムが以前にも増して充実していると思う。今後もより多くの学生がこういった経験ができるよう拡充してもらいたい。</p> <p>経済学科（一部）および産業経営学科で導入されているプログラム制は、より専門的な学習・研究をしていく上で有益であると思う。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>プログラム制について、専門的な研究に有益であると思うが、その反面、新入生等が授業を選択していく上で、若干その仕組みがわかりにくいのではないかと思った。</p> <p>もう少しわかりやすい選択例を挙げ、学生の理解度を上げていく必要があるのではないか。</p> <p>相互履修制度は以前からあり、多くの学生が活用しているが、その活用について掲示等だけではなく、配布物等でよりきちんとアナウンスする必要があるように感じた。</p> <p>大学全体や学部独自の学生生活を支援するさまざまな制度があるが、それが学生に周知されているかという点、必ずしもそうではないのではないか。</p> <p>学生数が非常に多いので周知の方法が限られてしまうのは致し方ないことだが、多くの支援の為にシステムが周知されていないのは非常にもったいないというか、残念な気がしてならない。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>少子化が進み、大学間の生存競争が激しくなっていく中で、学習環境の整備や学生生活を経済的、心理的など多角的にサポートしていくことが必要となっていくだろう。</p>	

その中から、「日本大学でしかできない」独自性のある支援の方法を打ち出していくべきではないかと思う。

そして、その支援をどんな学生でも利用できるような広報のあり方などを考えていく必要があるように感じた。

## その他

大学の資料の他に学部の資料（学部要覧やゼミナールガイドなど）が何冊もあり、どれがどの資料なのかがわからなくなってしまうことが何度かあった。

これだけ多くの資料があると、学生たちはあまり目を通さないのではないかと思った。

関連した内容の資料は1冊に集約するなどして、よりわかりやすくすべきではないかと思った。



評価した学部等	商学部
評価者氏名	打田素子
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p><b>*活発なゼミ活動</b></p> <p>2年生から参加する3年間のゼミ活動は、学習意欲向上のみならず、自己啓発、また担当教授や先輩方などとの人間関係を構築する上で非常に有効である。他学部（特に同じくゼミ活動が盛んな経済学部）などとのゼミ交流が活発に行われることを期待する。</p> <p><b>*課外講座の充実</b></p> <p>資格は社会に出て即戦力となるものが多く就職活動にも有利である。また講座費も外部の学校に比べてかなりリーズナブルであるため、積極的に受講して欲しい。ゼミ活動（自分の好きな分野を勉強すること）と資格取得は自由な時間の多い学生時代にこそ、お薦めしたい。</p> <p><b>*就職支援</b></p> <p>NU就職ナビ、インターシップ・プログラム、セミナーなど就職支援に力を入れることを評価したい。特に自主的に就職活動を行っていない（もしくは、何をすれば良いかわからない）学生にとって学校からの働きかけは必要不可欠であると思う。支援内容は充実しており、就職担当者の方々もきめ細かなフォローをしていらっしゃるようなので、今後は様々な支援内容の「告知方法」を学部のみならず大学全体で考えていく必要があるように感じる。</p> <p><b>*多様な受講科目</b></p> <p>商学部ならではの専門科目はもちろん、特殊講義など幅広い科目が用意されている。特にベンチャー創業実践講座（大和証券グループ）のような講義は普段、アルバイト以外は社会と接する機会の少ない学生にとって興味深く、良い勉強になるので今後も積極的にこのような寄附講座を増やして欲しい。</p>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p><b>*定員制科目</b></p> <p>定員制科目の割合が高いと感じた。実際に学生にヒアリングしたところ、定員制の科目は人気があるものが多く受講できない場合が多々あるということだった。特に改善を望むのは結果の通知が遅すぎ、定数から外れてしまい他の講義を取る時には既にその講義は2・3時間既に進んでいる、ということである。少なくとも定員から外れてしまった学生が他の講義を選んだ時に始めから受講</p>	

してもらえよう改善頂きたい。

#### **\*履修方法**

冊子を拝見する限り、履修の方法（マークシート）は若干わかりにくく、手間ひまがかかるように感じる。抜本的なシステムの再構築や莫大な予算が必要なのかもしれないが、可能ならば今後、インターネットなど、オンライン上で履修できるような方法も視野に入れて欲しい。

#### **\*自主学習設備**

情報科学センターは学生にとって非常に重要な場所であると考えているが、パソコンの台数に比べプリンターが少ない気がする。また現状は学生がプリント・アウトする紙を持ち込んでいるが、例えば年間 XX 枚までは無料、もしくはゼミ活動に必要なレジュメをプリントする際は担当教授の承認の後、学部側で負担する、など考慮の余地はある。また、図書館に3つあるグループ学習ルームは机・椅子・ホワイト・ボードのみ設置されている。全部屋に必要なが、パソコン・プリンターのある機能的な部屋があってもいいように感じた。

### **これからの学生支援に望むこと**

#### **\*語学力の強化**

「英語は英文学部に任せておけばよい」という時代は過ぎたことを実感する。語学力（得に英語）は社会に出て役立つだけでなく、就職活動（転職活動）の選択肢を広げる意味においても今後ますます必要不可欠だと考える。かといって学生にはプライベートの英会話学校は非常に割高である。「読む」だけでなく、「聞く」「話す」「書く」という”英語J”（商学部講義要項P48）のような講義の増加が望まれる。

#### **\*人間力を高めるような講義**

大学を卒業すると今まで以上に自己責任を問われることが多々ある。そのような場面に対応するためにもが学生のうちから「自分で考え・解決する力」を身につけて欲しい。ゼミ活動の積極的なサポートや「考えや意見を人に伝達する能力を養う」文章表現A”（商学部講義要項P23）など、人間力を高める環境づくりを期待したい。

#### **\*学生⇄OB/OGの交流**

日本大学は数多くのOB/OGを輩出していることが最大の強み。現状においても就職関係などでOB/OGネットワークを活用していると思うが、世間話(?)のような(学生時代にしておくべきこと)「社会人になって実感すること」など)学生とOB/OGが気軽に交流できるような場を大学側に提供してもらえれば学生にとって有意義な気がする。OB/OGに卒業してからそのよ

うな協力を仰ぐのは難しいかもしれないので、在学中から（卒業後も積極的に）協力してくれそうな学生を見つけておくのが理想的である。

## その他

### \* 評価報告書

かなり事細かなデータが掲載されているが、その結果をふまえ、大学側がどのようなアクションを起こしているかがわかりにくかった。アンケート&調査内容をもっと簡潔に集約した方がデータをより効率的に活用できるように感じる。

### \* 清潔なキャンパス

久しぶりに商学部のキャンパスを訪問したが、清掃が隅々まで行き届いていることに感心した。キャンパス内の廊下・トイレ・中庭・図書館どこも綺麗だった。これは学部関係者の方々、学生一人一人のモラルがきちんとしているためであると考え。小さなことかもしれないが、非常に大切なことなので高く評価したい。

### \* 図書館の充実

商学部の図書館は学部内だけでなく他学部・他大学からの資料貸し出し依頼が多く活発に活用されている。また書籍や資料を貸し出したり学習の場を提供するだけでなく1日1本、娯楽用のDVDを貸し出していると伺い、勉強だけでなく憩いの場を設けていることに学生に対する心遣いを感じた。

評価した学部等	商学部
評価者氏名	福島 一 嘉
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p>学校の評価は、在校生，OB，教職員，これらの家族，学校のある地域社会及びその他の社会からの，長い時間をかけて形成された校風，社会貢献などに対する総合的評価と考えます。組織の永続的な発展・繁栄には絶え間なき自己変革が必要であり，今回の取り組みは非常に好ましいものと考えております。ぜひ，継続的な取り組みをお願いいたします。</p> <p>学生にとって入学できたから通う学校ではなく，ぜひ通いたい学校（又は子供を通わせたい学校）として更なる飛躍をしていただきたく以下私なりに感じていること，感じましたことを述べさせていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>新校舎の基本理念</b> 「滞留時間の長いキャンパス」にすることを新校舎の基本理念とされております。校舎は単なる入れ物ではなく，学生生活の基礎となるもので，校舎の雰囲気などは校風の形成に大きな影響を与えるものと思われます。ぜひ，誇れる教育環境の整備をOBとしてお願いいたします。</li> <li>・ <b>ゼミナールが2年次から履修可能</b> ゼミナールは2年次から履修可能であり，教授の個別指導に基づき研究を行うことにより大学教育の真髄を他校に比べ早い段階から学生は享受することができます。当学部の特に優れた点と考えます。</li> <li>・ <b>学部要覧は昔に比べ格段の進歩</b> 私の在学中（約25年前）に比べ，内容が充実し，わかり易くなっております。学生のニーズを吸い上げ継続的な更なる発展を期待します。</li> <li>・ <b>入学試験の多様化</b> 一般入試に加え，推薦入学の制度を設けており，多様な意欲ある人材を受け入れるための制度が構築されており，評価できると考えます。</li> <li>・ <b>コース別の履修</b> 本人が希望する専門知識吸収のために，なにを受講すべきかコース別履修により明らかになっており，学生指導の面から評価できると考えます。</li> </ul>	

## 改善や強化が必要な点

### ・OBとの連携強化

卒業生が多く人的資源に恵まれているのが日本大学の大きな特徴です。しかしながら、他大学に比べ活用しきれていないのではないのでしょうか。商学部も毎年秋に卒業生をキャンパスに招くなどして努力されているところですが、他大学の活動状況を仄聞するところでは、同窓会に現役が出席し（大学での活動内容を披露し、アルバイトになっている大学もあるようですが、）交流を深め、就職活動、就職後の人的ネットワークの構築などで活用しているようです。学部の評価には卒業後の学部との関わり方なども含まれるものと思われまます。すぐに効果が現れるものではありませんが、長期的な視点で継続的な在校生と同窓会交流の支援、同窓会など卒業生支援を強化されてはいかがでしょうか。

交流の事例としては砦倶楽部と職業会計人を目指す講座を履修している学生との勉強会の開催などが考えられるのではないのでしょうか。

また、OBと在校生の接触の場を設けることにより、大学に対する帰属意識の高まりも期待できると思います。さらに在校生がOBから良い影響をうければ、卒業してからの学校への貢献も一層期待できると考えられます。

### ・付属校への広報活動強化（入れる学部から入りたい学部へ）

入試への対策として、オープンキャンパス、学校説明会の開催、推薦指定校への訪問などをされており、一定の成果を挙げていると思います。

ところで、付属校からの入学生は一定割合を占めています。日本大学の中から学びたい分野を選択して入学してくる学生と考えられます。一般試験入学に比べ一般的には目的意識が強く、モチベーションも高いと考えられますので、学部活性化のために、付属校生徒を学部へ招き直接語りかけたり、雰囲気を感じさせ、ぜひ商学部で学びたいとの強い意識を持った学生の入学を促進し、学部の活性化を図ってはいかがでしょうか。

### ・授業の満足度が低い

学生生活実態調査では授業への満足度は体育系を除き押しなべて低い評価となっております。調査内容では具体的な原因を把握することはできませんが、学生に満足度の高い教育を行うことによって学部が活性化するよう、原因の分析、対策の策定、実行及び検証の組織的な取り組みの強化が必要と考えます。

## これからの学生支援に望むこと

### ・資格取得支援の強化

資格取得について講座を設け、資格取得講座の案内を作成し広く学生に受験の機会を与えていることは評価できると考えます。しかしながら、資格取得講座の案内には、おそらく学生が最も欲しい情報である合格実績、合格率などの情報が記載されておりません。資格取得の支援は資格が取得できたかどうかの結論が問題であり、学生に必要な情報の提供と、合格者増加の取り組みの強化が必要と考えます。

### ・事務窓口の整備

学生生活実態調査では、事務窓口の対応の満足度は各学部中最低水準になっております。調査では低評価の原因がわかりませんが、学生への対応は学校として基本事項であり、原因を調査のうえ適切な対応が必要と考えます。

### ・愛校精神醸成のための運動部など試合観戦の斡旋

日本大学は多くの運動部に歴史と伝統があり、素晴らしい実績を残しています。学生生活実態調査では多くの学生が日大スポーツを観戦したいとの回答をしています。しかしながら、本大学は他大学にくらべスポーツ観戦による愛校心、一体感の醸成といった観点では取り組みが弱いと考えられます。素晴らしい資源があるにもかかわらず宝の持ち腐れになっていると考えられます。試合観戦の斡旋を大学が積極的に行うなどの取り組みをされてはいかがでしょうか。

## その他

### ・資格の説明資料が相違していると思われます

「資格取得講座案内2006」のP14の税理士試験の受験科目ですが、所得税法と法人税法は「いずれか1科目しか選択できません」となっていますが、選択必修科目であり2科目受験も可能と思われます。確認をお願いします。

### ・保護者への広報活動（満足度向上）強化

「ふんすい」、「桜縁」、「日大新聞」など学生向けに様々な資料を配布され、適切に情報の伝達をされています。

学生の保護者に対してはどうなっていますでしょうか。少子化しており、子供以上に保護者は学校に関心を持っている存在です。大学の評価は学生、研究者だけではなく様々な関係者によって総合的になされるものです。もし保護者への広報活動がほとんどなされていないようでしたら、費用がかかりますが強

化を検討されてはいかがでしょうか。

#### ・学部間連携が弱い

総合大学でありながら、単科大学のようであり学部間の連携が弱いように思います。総合大学であることの強みを発揮できるよう学生の他学部との交流をより一層支援されてはいかがでしょうか。

例えば、商学部には金融論の講座がありますが、地理的に近い文理学部の確率の講座と連携して金融工学の入門講座を合同で行うことや、学生の学部間移動（転部）の制度を充実させ学生のニーズに対応するなどが考えられるのではないのでしょうか。

#### ・学生への情報伝達

現在の学生は少子化した親に育てられた少子化した子供として教育を受けています。中学高校（塾）と手厚い様々なサービスを当然として受けて成長してきており、おしなべて受身であるようです。したがって、学生への働きかけ（情報伝達）は、あらゆるチャンネルを駆使した繰り返しの取り組みが必要と考えられます。

#### ・会計専門職大学院

会計学科がありますが会計専門職大学院が設置されていません。会計学科がある特色を発揮できていないのではないのでしょうか。他校の法化大学院の事例ですが、必ずしも全員が司法試験に合格するわけではありませんので、合格できなかった者についても高度の専門知識を有しており、企業としても有益な人材であるとして、採用を検討しないかとの申し出を受けたこともあります。職業会計人の育成だけでなく、企業内の専門家育成の場としても考えられるのではないのでしょうか。個人的には近い将来、大学を卒業して就職をするのではなく、文系についても修士取得者が企業へ就職していく割合が相当程度高くなるのではないかと考えています。

体制整備など難しい問題もあるかと思いますが、中長期的に教育環境の整備の観点から検討に値するのではないのでしょうか。

#### ・配布資料の様式など

配布されている学生向け資料の大きさが違うこと、学校のカラーを使用していないなど統一感がみられません。効果ある資料の配布を研究すべきと考えます。

#### ・建学の精神などの周知活動

日本大学は学祖山田顕義が1889年に創立以来、長い伝統と歴史を有しております。しかしながら、他の著名な私立大学に比べ、建学の精神、教育理念、伝統などに対するOB及び学生の理解度は低いのが実態であると思われます。日本大学で指導を受けた誇りをより一層もって社会で活躍できるよう、建学の

精神や歴史，強みなどを積極的に伝える場，例えば毎学年の年初に学生に説明する授業時間を設けるなどされてはいかがでしょうか。



評価した学部等	芸術学部
評価者氏名	井上啓子
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>学生の評価アンケートの中での授業内容に関する評価が高いと思います。  「新しい知識・考え方・発想を学べた」という学生が81.3%を越している点で、学生の満足度が伺えます。  また、教員の熱意を感じたという学生が多く、教員と生徒との間の良好な関係を示しているように思います。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>授業内容を真摯にうけとめている学生が多い一方で、授業に対して更なる工夫を求めている学生が多いと思います。  特に芸術学部の場合は、興味を持ちやすい授業が多いだけに学生の更なる好奇心をあおる授業への工夫が必要だと思われます。  「日芸ではこんな授業があるらしい」と話題にのぼるような授業は何なのか…クリエイティブな学部だけに、刺激がある授業内容を開発し、アピールしていくことが必要です。  基礎となる知識をおさえながらも、学生の好奇心、向上心をいかに刺激するかが重要であり、話題性のある授業を提供していくことで優秀な生徒も集まってくると思います。</p>	
<p><b>これからの学生に望むこと</b></p> <p>多メディアが進む中、放送や映画などの世界で生きていくには選択肢が大きく広がっています。  しかし今、忘れてはいけないのは、「一番重要なことは、「価値のあるソフト」「普遍的なソフト」を生み出していくことだ」ということをきちんと認識することです。  こういう時代だからこそ、目先の流行におどらされることなく、人々の心に残る、価値のあるものを生み出していくために、一番大切なものは何かということをしつかりと見極めていきってほしいと思います。  大学はそのための準備期間。多くのことを見聞きし、自分の「核」となるものを見つけていって欲しいと思います。</p>	

## その他

仕事柄、卒業生と仕事をする人が多いのですが最近特に「夢」を語る新人が少なくなってきたように思います。

卒業生で活躍している人を大学に招き、彼らが何を考えどのように仕事に夢を持っているのかを学生に勉強させる機会がもっと増えても言いように思います。

今の若者に一番必要なのは「夢」を持つこと。頑張ればどんな未来でも拓いていくことができるのだという人生のビジョンを感じさせてあげれば夢もひろがっていくような気がします。また、インターンシップの制度は充実しているようですが、なかなか浸透していないようにも思います。

学生のうちになるべく多くの会社の現状にふれ、自分に何が一番合っているのかを考える機会を持つのはとても大切なことだと思います。インターンシップ制度を各企業に浸透させ、また学生達にもその大切さをアピールする工夫がもっと必要なのではないかと思います。

評価した学部等	芸術学部
評価者氏名	草壁伸雄
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>少子高齢化社会が進み、大学全入時代、入学志願者数の減少という現実に対し、大学として学生にとって魅力的な大学づくりが急務である。</p> <p>そのような状況の中で「日本大学の将来像」(ユニバーサルアイデンティティ)の検討は、重要な課題である。</p> <p>この度、教育理念を「自主創造」と定め、日本大学の象徴として新ロゴマーク、そしてキャッチフレーズが決まったことは、大きな前進である。</p> <p>後は、その中身である。</p> <p>目指すべき将来像を明確にし、どのように改革を進めていくのかを内外に伝達し、確実に実行していかなければ他大学との競争に勝ち残れない。</p> <p>新ロゴマークは、「このような魅力的な大学を目指します。」という約束の旗印として全学部あげて積極的に使用すべきだ。</p> <p>改革が上手く行かないと新ロゴマークは、No と読めると揶揄されます。</p> <p>新理念の制定が、改革のスタートです。</p> <p>影ながら応援します。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>芸術学部の学生は、教員との関係には満足しているものの、授業内容、施設、機器備品の貸与、図書館等について他学部と比較し不満足度が高い。</p> <p>学生の意見を参考に早急に改善をはかる必要がある。</p> <p>魅力的な大学になるために学生の意見を積極的に活かすための学生の評価システムの充実をはかる必要がある。</p> <p>現役学生およびその親は、最大の広告塔である。</p> <p>魅力ある大学づくり、よい評判づくりのために積極的に現役学生の意見を吸収し、改善に結び付ける努力が必要。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>学生、その親にとって、やはり卒業後の進路（就職）が一番の心配事である。私の卒業時（S 5 1 年度、美術学科デザイン）、希望通りにデザイナーとして就職できたのは、卒業生の半分もいなかったように記憶している。</p>	

卒業生の良い就職先が入学希望者にとっても、その親にとっても魅力的である。

大学として就職指導を早い時期から積極的に進めて欲しい。  
希望する職種に1人でも多く就職できるように大学として最大な努力を払うよう希望する。

## その他

- ・日本大学の特徴のひとつは、総合大学であること。

そのメリットを十分に活かすべきである。

キャンパスの諸施設の相互利用，高大連携事業，教員・学生の交流等のリンケージを進めることは総合大学だからできることである。

もっともっと積極的な推進を望む。

- ・芸術系大学のキャンパスが、都心部から離れて郊外に移転する傾向にある中、江古田にキャンパスがあるのは強み。

江古田キャンパスを是非学生のために有効に活用して欲しい。

所沢のキャンパスは、周りの環境を含め魅力的ではない。

- ・今回、外部評価をするために受け取った資料をならべてみますと、資料の視覚イメージに一貫性がなく、見事にバラバラである。

全体を通して、日大らしさ、さらに芸術学部らしさを演出するビジュアルの一貫性（トーン&マナー）をきちんと設計する必要がある。

日大のブランド戦略，マーケティング戦略をきちんとしないと勝ち残れない。

- ・100万人の卒業生の有効活用をもっと積極的に。

評価した学部等	国際関係学部
評価者氏名	高野 誠・杉山 恵美子
<p><b>評価結果</b>（以下の点について気づいた点，お感じになられた点を記述願います）</p> <p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p><b>学習支援について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ WebCT や ALCNetAcademy 2 により，自分の好きな時間に学習を行える。</li> <li>・ 留学制度は，留学アドバイザーが対応してくれたり，各地域・期間からの選択が可能である。また，ティーチングインターシップや短期海外研修により，海外へ行く機会がある。</li> <li>・ 図書館，情報処理自習室は，学生が利用しやすい時間に開かれている。</li> </ul> <p><b>生活支援について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生向け学部 HP が整えられており，学生が情報を容易に取得できる。</li> </ul> <p><b>主体的活動支援について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ サテライト講座，Language Training Center 講座，公務員講座等の講座が準備されていて，スキルアップをすることができる。</li> </ul> <p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コンピューターの利用環境が整っている。</li> </ul>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p><b>生活支援について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スポーツを楽しむ場所が少ない。</li> <li>・ 学生食堂のテーブル数が少なく，営業時間が短い。</li> <li>・ 購買部の品数が少なく，営業時間が短い。</li> <li>・ 学生相談室に常駐のカウンセラーがいないので，常駐あるいはカウンセラーを多く来ていただくようにしたほうが良い。</li> </ul> <p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校舎が老朽化しており，耐震対策，バリアフリー対策がなされていない。</li> <li>・ 駐輪場が狭い。</li> <li>・ 外灯を増やしたほうが良い。</li> <li>・ 外国人留学生や招聘教員との交流機会を増やしたほうが良い。</li> <li>・ 学生が何か困ったこと，疑問に思ったこと，どこに行けばいいかわからないというような時に，授業，奨学金，課外活動アルバイト等，学生生活に関わるほとんどの相談や手続きを一つの窓口になれば利用しやすいように思う。</li> </ul>	

### これからの学生支援に望むこと

- 大学をより良くするためには、学生と教職員が情報交換を定期的に行い、学生が現在望んでいること、不満に思っていることを議論し、協力して行動することが必要だと思います。また、一部の学生との協議でなく、他の学生の意見を取り入れられるよう、授業に対するアンケートを定期的にとったり、提案・苦情の受付をメールや投書等により受け付けられるようにし、回答を出すようにするなど学生の意見を聞き、解決していくような方法を検討してほしいと思います。
- 心の病気を持つ学生が増えている中、カウンセラーを増員するということは、必要なことだと思います。また、カウンセラーによるケアをしても、心のサポート中心となってしまうので、友達の間で授業の相談や色々な話を聞いてあげられるピアサポート制度についても検討してほしいと思います。
- 現在 Language Training Center や語学教育センター、情報処理自習室等勉強ができる施設が増えている中、そのような施設を十分に活用して、学力向上、資格取得、就職に役立つ講座を開設していただきたいと思います。
- 一部地域に偏らない様々な国から積極的に多くの留学生を受け入れて、三島キャンパス内でも学生間の交流があれば学生の視野が広がるきっかけとなると思います。

### その他

- 現在施設や学部の教員が講座等を開き地域住民に活用してもらっているが、学生との交流もボランティア活動等を通じて交流を行っていくような機会を増やせば、地域によりいっそう貢献できるのではないかと思います。
- 学生生活実態調査報告書の望まれる大学づくりの項目によれば、国際関係学部という学部であるため、外国への留学機会が多い国際的大学が望まれているので、多くの学生が留学できるよう努力していただきたいと思います。また、国際関係学部という名にあるべく、各国との国際交流が行え、将来国際的な社会人を養成できるような大学になっていただきたいと思います。
- 今回の評価活動は、期間的にもう少し時間が必要でした。卒業生の年代も、各年代別に頼んだ方が良かったような気がします。
- せっかく多くのサポート体制があるにもかかわらず、その利用・活用状況が充分でなかったり周知されていなかったりするので、内外に対し様々な媒体を利用して積極的に広報・周知活動を続けていくことが重要だと思います。

評価した学部等	理工学部
評価者氏名	鈴木 義 弘
<b>評価結果</b>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p><b>1 学生生活実態調査結果の経年変化から読み取れるもの</b></p> <p>① 授業態度として出席をとる授業は、仕方なくを含めて出席率ややる気が多少見受けられるが、出席を取らない授業は、出席率も意欲も低下していると考え、情けない話であるが、大学も高校生の延長線との意識が強いのか、多少出欠の義務化を必修科目には導入すべきと考える。</p> <p>② 私の学生時代と余り変化がないのかと思うが教員の教え方や会話の出来る機会に対する学生の満足度が低い結果が出ている。研究室を持つ先生は、その研究室を訪ねていけば、質問表なり口頭でディスカッションをすることで疑問点の解消になるが、その他の先生は、接点が少ないがために不満が募るものとする。確かにITを活用すれば、疑問点の解消には近道であるが、ニュアンスが伝わらない。過去にも黒板に向かって只書くだけで、説明も良く分からずじまい。授業を理解しようとする主体は学生であるが、教員の教え方を学生からアンケートを取ったり、第三者から授業を評価し改善する仕組みを確立しないと解消されないと考える。</p> <p>③ 他学部の授業との単位互換の機会や学部内の他学科の授業の受講機会に対する満足度が低い。総合大学を標榜している日大でありながら、垣根が高すぎ、情報が共有化されていない。</p> <p>他大学では、提携する大学同士で単位を共有化している。早急に学部内の受講機会や他学部の単位取得の仕組みを早急に確立すべき。</p> <p>④ 授業内容等に見合う授業料に対する不満も過去6割7割を超えている。解消策として他大学では、最低卒業単位は設定するが、科目の単位毎に授業料を設定し、成績が良ければ授業料を減免する制度を取り入れ、浮いた授業料で更に科目を取得させる制度を取り入れ、学生の意欲の向上と受講機会の拡大に努めている大学があり、学生に受益と負担を自覚させるような制度を確立すること。</p> <p>⑤ 総じて他学部との交流や情報の共有化に不満を抱いている学生が多く見られる。総合大学でありながら、各学部が独立した大学のように運営されているため、この様な不満が出るものとする。総合大学との強みとは、何かを考え直し、制度の再構築をするべきである。例えば、自分が卒業した学部以外で、社会人として何か問題が発生した場合、解決する術が大学にあったとしてもその方法が分からないのが現状ではないか。大体の学生が、卒業研究</p>	

のゼミに所属した位の人脈しか作り得ないで卒業して言っているのが現状ではないか。

- ⑥ 学外で学校種別の勉学の理由の問いに対して語学学校や各種資格取得学校に通っている学生が3割近く存在する。これは、学内で受け皿になりうる制度やカリキュラムが存在しないから、学外にそれを求めているので、解消するカリキュラムを制度化すること大切で、それこそ総合大学の力を発揮すべきである。

#### その他

- 1 各学部の統廃合が必要，2015年には大学全入時代が到来する。そのために，長い歴史や足跡が有るのは十分理解できるが，似かよった内容の学部や学科並びに科目を精査して統廃合をすることによって魅力の光度を上げること。
- 2 短期大学の意義が時代と共に変化していれば，学部に吸収すべきである。
- 3 日大出身の教授ばかりでなく優秀な人材を日本人とは限らず学外から招致し，教員の活性化を図る。
- 4 産学連携を積極的に推進し，只特許の申請件数だけを評価することなく，実用化の件数に力を注ぐべきである。



評価した学部等	理工学部
評価者氏名	高橋 和 希
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ キャンパス内がきれいで（昔と比べて）交通の便がよい（船橋校舎）</li> <li>・ 船橋校舎には、授業空き時間に学生が集まれる場所がある（ファラデー等）</li> <li>・ 担任制をとっていること</li> <li>・ 授業評価があること</li> <li>・ AO入試対象者に入学前指導があること（この結果が良く分からないが、良いことだと思う）</li> <li>・ 補習制度があること（とはいえ、単位にならないので補習に参加しない学生も多いとも先生方から伺っているが）</li> <li>・ 学科案内パンフレットがきれいで見やすい ただし、やはり、パンフレットだけでは、全てを紹介しきれない分イメージ先行による、選択は避けられないと感じる（どちらにしても、興味のある学科のページしか見ないと思うが）</li> <li>・ 通信講義があること（昔は無かったので、あれば受けてみたかった）</li> <li>・ 学科によって就活支援活動は異なると思うが、社会交通工学科で行った、同窓会組織が中心となって行う就活セミナーは良いと思う。</li> </ul>	
<p>改善や強化が必要な点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学内案内がわかりにくい（学内サイン表示） <ul style="list-style-type: none"> <li>※ 新入生などのキャンパスに慣れていない学生や、入学希望者などの外部者が来訪した場合、学内案内標識が、船橋日大駅側の門の近くにあるのみなので、わかりにくいと思う</li> <li>※ 駿河台校舎はよりわかりにくい</li> <li>※ とはいえ、他大学と比べると、一般的なのかもしれない。あまりにも表示が無さ過ぎてわからない大学もあるため</li> </ul> </li> <li>・ 学生の就職活動に関して、学科担当制というのはいいい点でも有るが、他大学でも行っているように、WEBサイトで、本年度担当者連絡先を一覧が有ると良い。また、学部不問の採用企業情報を学生が入手するためにも、学科担当以外に、そういう学生専門のキャリアセンターのような窓口（文系のような）があってもよいのかもしれない。今の学生は、多様化しているのと、企業側も、理系・文系の枠を取るところも出てきているため（全学科の担当の</li> </ul>	

先生を回って企業紹介を行うのも非効率と考える), よりよい学生への情報提供場というのは必要ではないか。

- 上記に続いてだが, 例えば所属学科の業種・職種は学科の担当先生に任せ, それ以外を希望する学生は, 就職課の利用を促し, 就職課が基本的にフォロー(学科担当の先生とも連携が必要になるが)。近年は, 学生就職活動もWEB利用が大多数で, 大学利用は減少傾向のようだが, 実際問題, 大学のみで求人を出している企業もいる。就職課(キャリアセンター)利用率の高い大学は, 大学側で努力しているし, よりよい学生支援を行っているところもある。もはや, 工学系も, 今までのようではいけないのではないだろうか。
- 学科毎の就活支援活動がいかような物かはわからないが, 持ち回りで変わる担当の先生による対応の差異, 学科による対応の差異は, あまり生じないようにしたほうが良いと思う(聞くところによれば, 建築学科は担当教員が1名と伺う。1名では, お忙しい先生であればあるほど, 企業側がアプローチしにくい。1名の理由はわからないが, 研究室の担当教員がそれぞれの裏担当なのか?と考えると)。特に, 今の時代, 研究室の指導教員制はやめたほうが良いと思う(表向き学科や学部であっても, 実際は, 研究室単位で行っているのもあるのでは?教授コネしかないようでは, 新規企業受け入れが遠のき, 学生支援にも役立たない)。
- 高校で, 未履修だった物理や数学分野の教育方法, 一般教養の先生方との連携や, ミーティングがもっと必要なのではないかと(昔より, 色々な面で, 学力差がかなりあるような印象を受けている。パソコンの操作レベルもだいぶ異なるようなので, 授業の進め方, 習熟度クラスの分けなども必要なのか?)
- 駿河台校舎は, 立地条件上, 学生達が集える場所があまり無いが, 船橋校舎までとは言わずとも, もう少し, 共有スペースがあると良い。
- 応用化学の学生は, 明治大学に囲まれているのが昔から気になっているが, 色々不便があるのではないだろうか。また, 疎外感を感じないのだろうか?というのが個人的に気になる(そして, 場所もわかりにくい)
- 建物の構造上仕方が無いのかもしれないが, やはり, 男女トイレは, 全校舎に各階に設置してあるほうが良いと思う
- 建物の構造上仕方が無いと思うが, 足に怪我をしている学生も利用しやすいように, 階段のみという構造もなるべく改善(ユニバーサルデザイン)できると良いと思う。

### これからの学生支援に望むこと

- 物理離れが著しいと先生方から伺う。前述したが、今の学生達が育った環境において、おそらく生活の中で考える場が無い、遊びの中での経験から得る知恵や知識が（最近では公園で、シーソーもみかけない状況にある中、遊びから重さの釣り合いなどを経験できない）少ないと思う。その中で、モチベーションを下げずに学ばせるかというのが重要かと思う。
- ちゃっかりしている部分、要領だけで今まで過ごしてきたことも多いだろうし、そういう世の中も見えてきているので、要領さえ良ければ全てOKという発想の子も多いのでは？

実際、要領をよくするには知恵も必要であり、社会に出てから苦労しないための「何か」をもっと身をもって教えなければいけないのかもしれない（聞く耳を持たない学生も多いだろうが）

アメリカ並みに、単位取得を厳しくする、試験は考えを問うものを必ず各教科に入れる、論文試験も取り入れてみるなどコピーペーストでは出来ない、「何か」を続けてみてはどうだろう。全ての教科に取り入れれば、「あの講義は単位が取りやすいから受講する」「あの講義は、単位が取りにくいから受講しない」という選択がなくなるのでは？全て厳しくするのも手ではないだろうか。

- 学生の心の悩み対応において、実際に相談室があれども、利用する率がいかなのか？相談を受けたほうがよいと思う学生の危険信号キャッチや、促し方の方法について、各学科教員への講習等を行うと、より効果が高いかと思う。最悪事態の未然防止。
- 大学にも託児施設、保育施設設置も今後望まれるのではないだろうか。少子化対策にもなるかもしれないし、学生支援にも役立つと思う。潜在的に、子育て中の女性で、大学で再度勉強したいと思っている人達は居るはずである。その層を取り込むのも一つの手立てだろうし、育児休暇中に、ちょっと1講座だけ受けたいという方もいるだろう。また、在学中に妊娠してしまった場合、休学か退学かという選択ではなく、預ける場所があれば、大学に通学も出来る（休学も期間が決まっているし、実際に難しいと思う）。育児休暇を利用して、キャリアアップ、スキルアップが出来たら、望んでいる女性にはうれしい制度だと思う。さらに、公開講座受講率UPにもつながるのではないだろうか。

## その他

- 学生とは関係ないが、求人票の書式について融通をきかせて欲しい（日大本部就職課への要望）
- 工学離れが言われているため、せめて、付属校のみでも良いので、日大の工学3学部が協力し、学部・学科アピール、世間に知られていない学科の魅力などを積極的に行うべき。

例えば、人気の建築学科も、イメージ先行型（メディア登場の安藤忠雄氏、黒川記章氏など）で、推測するのはデザインという思い込みがあるのではないか。

不人気学科の場合、何をやる学科なのかわからない（例えば、土木など）という現状が有ると思う。

せっかく付属校があるので、付属校の先生・生徒にアンケートを取り、実際に、知られていない部分、誤解されている部分の検証を行ったうえで、学部・学科アピールを行えばよいと思う（既に対応されているかもしれないが）。

また、近隣小学校などへの出前実験や、夏休み自由研究（親子参加型）などの手伝いも、裕子かと思う。小学生時代から理系離れは始まると思うので、楽しさや、日大のアピール（印象付け）にも有効かと思う

理科分野が生活と結びついている（力学などは、腕でも表現できるし、公園の遊具にもあふれている、ドアの開閉も力学の原理にもなる）ということ、感覚的に身につける機会が失っているような気がする。そのようなことも体験させてあげることも必要かと思う。

評価した学部等	生産工学部
評価者氏名	三宅修平
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プレースメントテストを導入し、そのデータを基に基礎数学の補習、英語のクラス分けをしていること。</li> <li>・ クラス担任制を導入し、履修相談等の指導を行っていること。</li> <li>・ インターンシップを必修化するなど、キャリア教育を強力に推進していること。</li> <li>・ 1, 2年生へのアカデミックアドバイザー、スタディー・サポート講座を導入し、新入生、勉学の取り組み方に不慣れな学生をサポートしていること。</li> <li>・ 日本大学のスケールメリットを生かした、就職ナビの導入は非常に効果的と思われる。更なる活用の促進と内容の充実が期待される。 このような試みを他の学生サービス・学生支援分野に拡大していくことが望まれる。</li> <li>・ 桜泉祭へ教員も積極的に参画しているようで、学生との共同作業を通じて、学生の満足度、学生のコミュニケーション能力の向上に繋がるとと思われる。</li> </ul>	
<p>改善や強化が必要な点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入学前教育・プレースメントテストを踏まえて、英語・数学のみならず、入学後の学生レベルに応じた、基礎教育の充実が望まれる。</li> <li>・ 短大・専門学校からの編入制度・受け入れ体制の充実が望まれる。</li> <li>・ 授業評価アンケート項目は簡素で良い。アンケート回収を当該教科担当教員が行っている。学生から忌憚のない意見・評価を引き出すためには、アンケート収集は学生に委ねるなど、何等かの工夫が必要である。また、アンケートは全授業科目において実施すべきである。</li> <li>・ 図書館の老朽化が顕著である。改善が望まれる。</li> <li>・ 学生食堂が昼休みに学生が溢れることもあり、座席数を確保するなど、改善が必要である。また、学生の健康管理のためにも、栄養バランスの良いメニューなど、工夫が望まれる。</li> <li>・ 在学生に対する女子学生の割合が12%と工学系学部としては、比較的多いとのことだが、女子学生の満足度向上のためにも、清潔なトイレ、暖房便座、ウォッシュレット等の設置が望まれる。</li> </ul>	

## これからの学生支援に望むこと

学生サービス・支援を行なう大学組織は縦割りで、それなりのメニューを用意できていると思われる。

しかしながら、全学部学生に十分周知徹底されていないように思われる。困った時にどのような部署で、どのような学生サービス・支援を、どのような形で受けられるのかなどを十分広報していく必要があると思われる。

このような情報は大学本部・学部ホームページ等を十分活用し、内外に対して発信していくべきであろう。日本大学の学生サービス・支援の標準化を図ることが必要になる。この結果、学生にとっては学生サービス・支援を享受する機会が増える。これは、大学満足度向上に繋がるものと思われる。

一方外部からは均質で高いレベルの学生サービス・支援を行っている大学との評価を受けることにつながり、学生確保・入試戦略上も良い効果を生むものと思われる。

個別学生の特性を記載した学生カルテ開発・導入の検討をお願いしたい。企業などで行われているワンツーワンマーケティングの大学版である。これにより、学生の特性に応じた個別指導・サービスが可能になると思われる。また大学全体としても、学部ごとの学生の志向など全体的な傾向をタイムリー把握することができるようになる。

当然のことながら、センシティブな情報を扱うことになるので、アクセス権限、運用規定を十分に検討する必要がある。

## その他

約6,000人の学生数を擁する学部の学生に対して、きめ細かい学生支援を行うことは非常に困難が伴う。

今回、学部の担当、委員長、事務局の方々からヒアリングした結果、教育、学生生活、就職等いずれの学生支援においても、真摯に取り組んでおられる様子を伺うことができた。

日本大学は、8万人以上の学生を擁するマンモス大学であり、この度のヒアリングで日本大学全体の学生支援の評価を行うことはできなかった。しかしながら、今回、訪問・ヒアリングをする機会を得た生産工学部については、これらの取り組みに概ね好感を持った。石井学部長の指揮下で全教員・事務職員が一丸となって教育サービスを提供していけば、自ずと大学の評価に繋がっていくものと思う。

生産工学部以外の学部についても、生産工学部同様の実態であって欲しいも

のである。

評価した学部等	生産工学部
評価者氏名	沖倉優代
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>日本大学(生産工学部)でどんなことが学べ、社会に出てどのようなことが出来るのかわかりやすかったです。</p> <p>高校生で進路を決めるとき、初めから目標のある学生はまだ少ないと思うので、進路を決めかねている学生にはよいのではないのでしょうか。</p> <p>学部案内も写真が多く、見やすかったです。もっと増やしてもよいかもしれません。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>特にありませんが、あえて言うなら資料が多すぎる でしょうか。全てを読む学生がいるのでしょうか。学部のHPに載せるとか資料を減らさないと資源の無駄になってしまう気がします。</p> <p>高校生が進路を決めるとき、どんな授業を行っているかというのは大きな関心ごとだと思います。また、「大学生」という未知の世界に憧れや不安をもっている時期でもあると思います。まず「不安」な要素を抽出して解消し、また、「未来は希望に満ちているのだ」というアプローチをしたらよいのではないのでしょうか。</p> <p>学生時代に感じたことですが、校内に豊かな緑があるのに座って緑を眺める椅子が少ないなと思いました。自然から受ける恩恵を少しでも感じてもらってゆとりのある人間になっていただきたいです。</p> <p>世の中資格ありきになっていますが、「資格を取るため」だけではない支援を希望します。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>少子化がすすみ、極め細やかな支援が必要かと思います。学生の意見を聴く機会を設け、良い意見は取り込んでいくような柔軟性が必要だと思います。</p> <p>建築工学科出身なので、建築工学科のHPをのぞいてみました。この学部に入った学生にはいいのかもしれません。HPを見るのは日大の学生だけではありません。OB、OG、この大学・学部を希望する学生が見ている可能性があります。全てを網羅しろとはいいいませんが、総合案内冊子にあるような内容</p>	



をわかりやすく（図解しながら）載せるのもいいと思います。

現代は携帯やネットで何でも検索できる時代です。悩んだら冊子ではなくネットで というのも便利だと思います。

一人暮らしをするときに大変だったのは、住むアパートです。女子学生に対して配慮しているアパートの情報がとても少なかったので苦労しました。不動産業者と連絡を密にするとか、組むなどして女子学生が学生生活を有意義に送れるような支援をしていただけたらいいと思います。

## その他

私は6年間（修士を含めて）親元を離れて下宿生活をしました。最初の1年間は一人で生活(炊事等の家事)をしながらの勉強はとても大変でした。同じように一人暮らしをしている友人と支えあったものです。

今のように学生に対してサポートがしっかりできているのはいいことだと思います。また、学生のみならず先生方にもマニュアルのようなものが配布されていることに驚きました。

新聞等で「サービス満点の大学ベスト10」などの記事を読むと、ここまで必要かな？という疑問がわきますが、今の時代しかたのないことなのでしょうね。

評価した学部等	工学部
評価者氏名	角田啓子
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 新入生オリエンテーションに使用される資料が、履修内容から大学生活に渡り丁寧に作成されている。入学から卒業までの全体感が理解でき、新入生の不安を和らげてくれると思います。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「平成19年度 学部要覧」第5章では、保護者が離れて暮らす子供に伝えたいことを代わりに伝えてくれています。</li> <li>・「平成19年度 履修の手引き」は、履修単位チェック表があり、自己管理がしやすいようにできていると思います。</li> <li>・また、他の科の履修内容も分かり、新たな学問への興味も湧くと思います。</li> </ul> </li> <li>2 環境保全を全面に出した情報「ロハスな工学部の手引き」や心静緑感広場、風車、太陽光発電装置の運用、そして履修科目の内容とも一貫性があり、工学部の卒業生が、社会活動で環境に貢献できる意識付けができると思います。</li> <li>3 国際工学コースができ、将来世界で活躍できる卒業生が増えることを期待します。明確にPEの資格取得という目標ができ、勉強に集中できると思います。</li> <li>4 新教室のパソコン自習室は、ネットワークの整備、使用時間の自由度があり、学習意欲を向上させる良い環境であると思います。</li> </ol>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「平成19年度 学部要覧」P. 138、緊急時連絡用の電話番号やアクセス先は、緊急時に、迷わず探せて、直ぐに使えるように学部要覧の最終ページに記述するとか、外して自分の部屋に掲示できるように工夫されると良いと思います。</li> <li>2 入学時に「学生カード」が提出され、大学として連絡先の情報が入手できます。しかし、その後の変更、特に家族と同居していない学生の下宿、アパートの変更情報はメンテナンスができているのでしょうか。 <p>緊急時や災害時の安全確認網のシステムが学生の方からよく見えません。大学と学生の双方向のシステムが見える緊急連絡網を紹介してほしいです。</p> <p>学生は学生同士の交流はあっても、市民としての社会との関わりが弱いと思います。被災時の情報が収集できることは、親元を離れ生活している学生だけでなく、保護者にも安心を提供すると思います。</p> </li> </ol>	

## これからの学生支援に望むこと

1 カウンセリングサービスは、私たちの時代にはなかったと思います。友人、家族にいろいろな相談ができることが理想であると思いますが、核家族、単身家族が増えている現在は、このような専門家のサポートが大きな助けとなると思います。

学生のうちから、人権、勉強、将来に渡るいろいろな悩みについて専門家の支援を受けることが、心身ともに健やかに過ごすために非常に役立つという経験は貴重です。社会に出て、思い通りに行かないことは多くあります。しかし、自分一人だけで悩まず、専門家からのサポートを受け、楽になることができるということを知っていてほしいと思います。このことは、将来一緒に仕事を行う仲間達を大切に思う気持ちに繋がります。

2 大学を出て、仕事の成功には多くの仲間の協力が必要であることを痛感します。知識だけでは仕事の成功はあり得ません。人間関係が希薄であると言われる今の学生には、一つのことをグループで作り上げるプロジェクト型の活動を取り入れた学習を体験させてください。アンケートでも、将来自分の能力でやっていけるか不安であるとの割合が大きいです。仕事は人と人とが協力してやるんだということを体験すれば、自信にも繋がると思います。

## その他

1 工学部は環境ISOに登録されています。大学から配布された資料類は、年度が替わったり、卒業で使用しなくなった資料を回収・処理するルールを作ってはいかがでしょうか。

2 2年ほど前の学部祭に出かけました。クレープ、焼きそば等の売店ばかりが多く並び、学習発表、研究発表の棟は訪問者も少なく残念に思いました。飲食店ばかりが悪いというのではなく、売店の企画力、経営力、環境配慮の競争をテーマにしても良いと思います。魅力があり学生自身の参加が増加すること、訪問者にも感激がある大学祭として見直す点があります。

評価した学部等	工学部
評価者氏名	八重田 淳
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 インキュベーションセンターを実際に見たことはないが、「ものづくり教育」「機械工学実習」「起業家」「実践的な現場の見学」等のキーワードから推察されるように、学問と実践を結ぶ取り組みとして、非常に興味深い教育だと思う。</li> <li>2 国際工学における J A B E E 認定プログラムによる教育は、英語を「使える」エンジニアの養成として優れている。プロフェッショナルエンジニア（P E）はクオリティの高い資格であり、2006年 F E 試験合格者のうち、機械工学科学部生を2名輩出していることから、その教育成果が現れているものと思われる。これに関連し、T O E I C / T O E F L の点数を上げるための「課外英会話講座」やネイティブスピーカー等の存在は、25年前自分が学部生であった頃とは違い、格段の進化を感じる。</li> <li>3 成績指標として使われる G P A は国際的に通用するので、これが導入されていることを知って非常に満足している。</li> <li>4 高大連携教育は、日本大学の特色を最大限に生かせる取り組みの一つであると感じた。The earlier, the better であり、若い「知の力」を早期に開発し、大学教育・大学院教育につなげる取り組みは評価される。</li> </ol>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 上記の項目「3」の G P A に対応することであるが、成績評価基準（A = 4, B = 3, C = 2 など）も同様に国際対応しているのか？現在の成績評価基準内容を質的に把握していないため一概に言えないが、例えばアメリカのある大学では、A = 90 ~ 100 点, B = 80 ~ 89 点, C = 70 ~ 79 点である。同じ A, B, C の評価でも、本学の成績評価が国際対応していることが望ましい。</li> <li>2 大学院教育の一環として存在する T A や R A の仕事内容の「実際」に関する評価はどの程度であろうか。T A や R A は、将来的にも教育・研究業績に直接的に反映するシステムになっているかどうか。学部授業の事務的作業の比重、負担についてはどうか。T A の「教える技術」、R A の「研究する技術」の教育にどの程度体系的に取り組んでいるのかが気になる。</li> </ol>	

## これからの学生支援に望むこと

- 1 深刻な学力低下を抱えながら入学する可能性のある未来の学生支援で最も必要なことは、「やる気」教育かもしれない。知的刺激に胸がワクワクするような高等教育を大学1年の一番最初の授業から、あるいはその前から何度も体験させて欲しい。学ぶことの素晴らしさと感動そのものを創造する場を提供する形の「支援」を学生は求めている。しかし、自分の知的欲求を継続させることができない学生は決して少なくない。キャリアデザインという出口に向けた教育も大切だが、本来の「学ぶ喜び」に「火をつける」教育支援体制は、教室の中だけでは不十分である。学生同士の縦横のつながりを最初の1年目から卒業に至るまで包括的に支援する体制とは何か？担任制度には有効と思われるが、その内容や取り組みが担任の個人レベルで完結しないようにして欲しい。社会人学生との交流、院生との交流も「やる気」を高める要因になるかもしれない。
- 2 卒業は大切だが、アカデミックの厳しさを教えることも大切である。厳しいアカデミックアドバイザーは、最初は学生から煙たがられるかもしれないが、長期的には学生から感謝される存在となる。学生にとって真の先生は一人である。先生の「熱きメッセージ」を伝えることも大切な「支援」ではないか。
- 3 本学の福利厚生施設、学習環境、食堂、寮、自然との融合、デザインなどは対外的にもレベルが高いため、キャンパスライフを満喫できるような、さらなる充実に期待する。結局のところ、学生から「大学に行くのが楽しくて仕方ない」「もっともっと学びたい」という声が多ければ多いほど、学生のみならず、教授も職員もやる気になるはずだ。欧米の大学によく見られる「歴史に残るような建築物」「美しいキャンパス」で学べるという喜びは学生の向上意欲を駆り立てると思う（私自身がアメリカの大学院留学中に特に感じたことです）。

## その他

工学部広報誌は質が高いと思います。楽しく拝見しております。そのほか、同窓会案内、ホームカミングデイの案内、在学中の部活動（水泳部）からのお誘いなどもあり、嬉しいです。これだけ規模が大きいにも関わらず卒業生をとっても大事にしてくれる稀有な大学だと感じており、100万人のうちの一として誇りに思います。

日大卒業生にはどこに行っても必ず遭遇できるし、現在私の勤務する大学に

も院生として来る日大生の存在を知るたびに嬉しく思う次第です。

「徳の教育」は日大で教わったように思っています。本当にどうもありがとうございました。

評価した学部等	医学部
評価者氏名	村上純子
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p>《学習支援》</p> <p>1年生において、高等学校で物理・生物を選択しなかった学生を対象に、基礎物理学・基礎生物学を設け、理科非選択科目の学力向上を図る取組みは、とくに理数系科目の学力低下が懸念される現状にあって、大変効果的な方略である。</p> <p>3年次（18年度から）・4年次（19年度から）でPBLチュートリアル方式を導入し、従来の座学中心の学習から、問題解決型の学習方法に移行したことは、学生に「自ら学ぶ」という姿勢を育てる上で非常に有効と考える。この姿勢を身に付けることは、医師という、生涯に渡って自己学習を続けてゆくことが必須である職業に就く学生にとって、一生の宝になるであろう。</p> <p>また、そのためのSGL教室が整備されている。SGL教室は、学内LAN接続可能であり、電子ホワイトボード、シャーカステン、診察様ベッド等設備も充実している。（この教室は時間外学習にも活用されている。）</p> <p>PBLチュートリアルは、ハード面・ソフト面ともに充実していると感じた。</p> <p>5年次のB. S. L. (Bed Side Learning) において実施されている診療参加型実習（クリニカルクラークシップ）についても、医師とともに診療チームの一員として患者診療に関わるという体験を通じて、医師として必要な知識に留まらず、態度や技能を修得する上で非常に有効な方略である。態度教育・技能教育の必要性は年々大きくなっており、社会のニーズである「良き臨床医」を育成するために必須の部分である。</p> <p>6年次に実施されている自由選択学習については、自らが興味を持つ分野を積極的に学習したいという、モチベーションの高い学生にとっては、かけがえない充実した時間であることが、学生へのインタビューを通じて実感できた。このような取組みが実施されている医学部は多くはないので、今後もさらに内容を充実させていただきたい。</p> <p>法医学の授業において、法学部の協力で模擬裁判を体験する授業が実施された。この取組みは、日本大学が総合大学であるメリットを生かしたもので、学生にとって非常に印象深いものとなっている。</p> <p>《生活支援》</p> <p>経済的支援としての奨学金制度であるが、奨学金給付対象学生は、全体の約</p>	

11%に及んでいる。しかし、6年間で3千万円を越える学費を考えると、とくに保証人が死亡した場合や生活に困窮した場合には、金額の面において奨学金は十分ではない。そのような状況にあって、医学部同窓会が保証人になり、在学中の借入れ金の利子を負担する就学奨学金制度は、非常に有用である。

医師になるための学習は、質量ともに膨大なものであり、医学生が抱える学習に対する精神的ストレスおよび不安は、計り知れないものがある。医学部では、1学年120名の学生に対し、1年生は5名、2年以降4名の担任・副担任が配置されている。そのため、かなりきめ細やかな対応が可能となっており、何か問題が生じれば、その芽が小さいうちに保護者に連絡がとられており、結果的に不登校の学生が殆どいないとのことである。学業半ばで退学する学生が増加している昨今の大学事情にあって、これは賞賛に値すると思われる。

#### 《その他》

医学部は歯学部と並んで、「事務窓口の対応」への満足度が高い。学生数が多い学部と違い、少数の学生に事務職員もきめ細やかに接することで、距離感が近いのであろう。教員だけでなく事務職員も力を合わせて、学生の学習・生活環境をよりよいものにしていこうと努力していることがうかがえる。

年1回行われている「教職員学生懇談会」は、双方が忌憚なく、前向きに意見を交換する大変意義深い懇談会だと思う。この会で学生から同じ問題がくり返し提案されていることもあるが、多くの問題は、関係各部署が具体的な対応を提案し、改善を図ろうとしている点を評価したい。

#### 《全体を通して》

入学に際しては、「希望の大学に入れなかったから」日大医学部に入学したという、必ずしも本意でない入学だった学生が28.5%を占めていたにもかかわらず、入学後には、「今の学部、日大に入ってよかった」と考える学生が約80%、「学部に誇りを持っている」「将来に希望がもてる」学生の比率は全学部でトップと、入学後の満足度が非常に高いことが分かる。すばらしいことである。

### 改善や強化が必要な点

#### 《施設・設備》

図書館は、平日22時まで開館しているが、学生の満足度は低い。とくに休日の開館を望む声が多いようである。実際、学生の中には、日曜日にも登校してグループ学習に励む者が少なくなかった。資料によれば、平成20年度を目標に検討中とのことである。開館時間を増やすことは人件費の増額につながる事なので、困難な点もあることだろうが、試験期間限定等の条件付きで早



急に実施してはどうか。

医学部は施設への満足度が非常に低い。教室および設備、学生食堂（ただし、18年度学生生活実態調査以降に業者が変更された）、アメニティー、キャンパス全体の配置・雰囲気など、どれをとっても全学で最下位を争う数値である。これは一つには、医学部の学費が非常に高額であるために、それに見合ったものではないと考える学生が多いためと思われる。しかし、学費の問題は別にしても、医学部全体の建物・設備の経年劣化は明らかで、根本的な解決は容易ではない。現在の医療経済状況では、いくら病院が経営改善の努力を行っても、大きく黒字経営になることは望めない。医療経済構造上、不可能なのである。

建物・設備は時間を経るにしたがって更に老朽化してゆくのであるから、中長期的、抜本的な対策を、可及的速やかに講じなくてはならないであろう。

#### 《健康支援》

医学部学生への感染症対策は非常に重要である。学生本人が感染症に罹患することを予防すると同時に、学生が患者に対して感染源になることがあってはならないからである。

現在、新入生に任意で抗体検査を実施し、結果を受けて、ワクチンを任意接種するようにしているようであるが、費用は自己負担なのであるか。法的には「任意接種」の形をとらざるを得ないが、費用は学部負担で行っていただきたいと思う。費用負担者を確認できなかったのを念のため記載した。

#### 《その他》

医学部は、歯学部、松戸歯学部と並んで、「教職員からのセクハラ経験」「教職員から不公正な扱いを受けた」とする比率が高い。これは、学生数が少ないことで、教職員と学生の距離が近いことが裏目に出ている現象と思われる。また、実習においては、教員によるパワハラ（パワーハラスメント）も問題になる。非常にデリケートな問題ではあるが、今後、対応が必要な項目と考える。

これからの学生支援に望むこと



これからも学生支援を充実して継続するために

全体を通じて、日本大学医学部の医学教育カリキュラムは、非常に先進的であり、学習者と社会のニーズ（良き臨床医の育成、これは日本大学医学部の基幹目標でもある）に応える内容である。しかしながら、この先進的なカリキュラムを支えているのは、現状では、「教職員の熱意」という、unmeasurableなものである。

教育と研究という、大学人として必須の2本の柱とは別に、医学部教員は、「診療」という巨大な柱を構築しなくてはならない。実際には、この「診療」だけでも疲弊し消耗し、医療機関から医師がいなくなってゆくという「立ち去り型サボタージュ」が問題となっている現在にあって、他大学医学部・医科大学と比較して、決して多くはない教員数で、「教育」「研究」「診療」に従事し、なおかつ、多大な時間とエネルギーを必要とする先進的教育カリキュラムを推進している医学部教員には頭が下がるとしか言い様がない。

学生支援を充実させるには、何よりも、機関（＝医学部）の基盤が安定し、そこに働く教職員の労働環境が充実していることが必要不可欠である。そうであれば、学生支援に関わる人材の質と量が確保できるからである。

医学教育推進室関係者の話では、卒後8～10年以降の人材の流動性が非常に大きく、このことが今後の日大医学部の在り方に多大な影響を及ぼすことが懸念されるとのことであった。この中堅層ともいえる世代は、診療においても、教育においても、非常に重要な機能を果たす世代である。

この世代が流出してしまうのは、人間としての身体的・精神的健康を阻害するような勤務の実態と共に、診療や教育にいくらエネルギーを費やしても、それが十分に医学部内のポジション決定に反映されていないという不満があるように思われる。実際、学生へのインタビューの中に、教育的手腕と熱意が高く評価されている教員が、学内では処遇されず、場合によっては他大学で処遇されて去ってゆくことを疑問視する声があったことを指摘しておきたい。

その任に当たる人の、個人的善意やボランティア精神に頼るようなシステムが、継続して発展することは難しい。したがって、日大医学部の「これからの学生支援に望むこと」→「これからも学生支援を充実して継続するために」は、まず、医学部の経済基盤を安定させることと、教職員の多様な能力を合理的に評価し処遇することが重要であり、その結果、充実した学生支援体制が安定して機能することが保証されると考える。

## その他

とくにこの数年、少子化の影響を受け、日本大学の受験者が漸減（学部によっては激減かもしれないが）傾向にある中で、医学部の受験者が大きく伸びていることは特筆に値する。やはり、医療に対する社会的ニーズが大きいということではないだろうか。

少子高齢化は厳然たる事実である。この傾向は、今後変わることはない。少子化の影響で、多くの私立大学が定員を満たすことができなくなっている現状にあって、新興勢力ながら近年拡大主義をとり続け、「医療系総合大学」と

でも称すべき実績を築いた「国際医療福祉大学」という大学がある（別途資料添付）。

高齢化の継続は、すなわち医療・介護に対するニーズの増大である。添付資料は、国際医療福祉大学の新聞広告であるが、このような学系構築は、日本大学こそが真っ先に取り組むべきだったのではあるまいか。

歴史ある医学部があり、薬学部、歯学部があり、理工学部に健康科学に関連する学科を有し、文理学部には保健体育関係の学科があり、医療経済や医療訴訟に関わる文系学部（法学部、経済学部）もある。日本大学が取り組めば、国際医療福祉大学どころではない、真に総合的な医療福祉の総合学系を構築することが可能である。

また、日本大学の附属高校・グループ高校の複数の関係者の話では、とくに女子学生に医療福祉系への進学希望者が多いにもかかわらず、日本大学本体に受け皿が少ないとのことである。確かに、看護を志しても、医学部附属の看護専門学校はあるものの、看護学部はない。現在、全国に140余校の看護大学がある。多くの医学部附属看護専門学校は、すでに4年生看護学部になった。そんな中で、日本大学は、どうしてこんなに動きが遅いのであろうか？（筆者は、現在、私立看護大学で教鞭をとっている。）

日本大学は、お茶の水・水道橋地区という、好立地を有している。この事は、何者にも代え難い、大きな財産である。旧主婦の友会館や駿河台日本大学病院、歯学部病院などを基幹として、医療福祉の総合学系を整備し、さらに日本大学独自のスポーツ・健康科学分野を加えることによって、慶応大学、早稲田大学などが逆立ちしても及びもつかない、「新しい形」を造りあげることができる。慶応大学はこの度薬学部を手に入れたが、歯学部はない。早稲田大学には、スポーツ・健康科学分野は充実しているが、医学部も歯学部も薬学部もない。こんなに何もかも揃っているのは、日本大学だけなのである。

いくら頑張っても、法学部、経済学部等の文系学部で最盛期の受験者を確保することは困難である。少子化という厳然たる事実は、日本大学の努力では変えられない。

これまで、日本大学は、各学部の独自性が大切にされ、総合大学といっても、むしろ単科大学の集まりのような形態をとってきた。総合大学であるメリットは、さほど大きくはなかったと思う。

これから先、日本大学としての総合プランの重要性はますます大きくなる。優れたマスタープランは、日本大学の新たな局面を切り開くであろう。一医学部卒業生としては、「日本大学」の中で「医学部」が占めるべき位置、果たすべき役割を、「日本大学」と「医学部」が双方向で明確にしながら、魅力のある“総

合大学”として発展し続けていただきたいと切に願う。

評価した学部等	医学部
評価者氏名	鈴木健彦
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>医師とは、「医師は、医療及び保健指導を掌ることによって公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする」と医師法で定められているが、職業人としての「医師」の専門性は幅が広く、それを「よき臨床医を育てる」というコンセプトのもと、非常に効果的・効率的に学習できるカリキュラムが構築されていると思われる。また、単に知識を詰め込むというのではなく、学生のうちから「問題解決の思考プロセス」を育てるカリキュラムや将来の医業の選択を見据えたカリキュラムが導入されており、特に「PMP-CC (Patient Management Problem core curriculum)」という日本において先進的な取り組みや、6年次の自由選択コースなどを導入していることは評価できる。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>医学部だけではなく医療界全体において、「リスクコミュニケーション」の概念等の導入が希薄であり、患者の接し方というごく限られた場面のみならず、医療事故・訴訟問題等のあらゆる場面において必要であるため、「コミュニケーション学」の早期導入が望まれる。また、医学部は「よき臨床医の育成」が主目的ではあるが、一方で「よき（常識ある）社会人の育成」も大学の責務と思われる。社会人教育についても実施すべきである。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>学生時代は、よき臨床医となるための教育等を行うことが主目的ではあるが、学生を卒業し「よき臨床医」として社会に出た後、そのときに遭遇する様々な問題については学生時代に受けた教育とは無関係なものが多い（たとえば病院経営等）。そのようなアフターフォローについても、検討を行うべきではないか。</p>	
<p><b>その他</b></p> <p>医学部は、「学生を医師国家試験に合格させる」ではなく、「国民のためになるよき臨床医を育てる」ことが重要である（そうでなくては、医学部は単なる</p>	

「予備校」に成り下がってしまう)。学生にはこの違いがわからないとは思いますが、この主旨を踏まえて、今後も医学教育を進めてほしい。それから、日本大学全般としてだが、医療工学、医療経済学、医療教育学、医療生物資源など他の学部と医学部の共同プロジェクトの実施、医学部卒業生の活用（スポーツドクター等）など、せつかく医学部（歯学部・薬学部も含め）があるにもかかわらずそれが生かされていない。地理的にも総合キャンパスではないというデメリットはあると思うが、そのような活動を「日本大学」として考えていくべきではないか。

評価した学部等	歯学部
評価者氏名	安達京子
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>教科ごとの授業に関するアンケートの実施は効果的であると思われる。 その結果を教員へフィードバックすることにより教員自身の評価が行われると同時に、学生によるその時の講義の感想が直ぐにわかるのは教員にとってよい刺激になるのではないか。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>現カリキュラムでは講義と実習の順番が逆になっているケースが見られた。実際学生からは、未受講の範囲の実習ではその内容が理解しづらいとの声が聞かれた。実習以前にその該当範囲の講義を行うのが適当である。 また、現大学院生からは、統合型の教科目編成になったが、教科の系統がよく解らなかつたため、学習しづらかつたとの感想を聞いた。 カリキュラムの見直しが必要なのではないか。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 三号館地下1階の軽食コーナーのメニューと席数の拡大</li> <li>・ 学生が自由に使えるスペースの確保</li> </ul> <p>以上の2点を望む。</p> <p>以前から歯学部校舎には学生の居場所が少ないと感じていた。現在の学生はどのように思っているのだろうか。</p>	
<p><b>その他</b></p> <p>本年度の本校卒の研修医数名に聞いたところ次のような感想を得ることができた。</p> <p>第5・6学年の臨床実習では初診からの治療の流れがよくわからず、一回の治療の内容もあまり理解できなかつた。卒後、研修医になってから学生の時にもっと臨床を見学しておきたかつたと感じた。 これらのことから現在の登院システムの見直しが必要ではないかと感じた。</p>	

評価した学部等	歯学部
評価者氏名	草間 薫
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伝統があり、「医学の一分野としての歯学」とのコンセプトを貫いていることは大いに評価できる。</li> <li>・ 大都会の中心部に位置し、全国の歯科大の中でも高い水準を保ち続けていることも大いに評価できる。</li> <li>・ クラブへの高い加入率は緊密な縦の関係の構築につながっていると考えられ、学園祭などへの参加も多く、帰属意識の高さ、大学・学部を誇りに思う学生が多いことは大いに評価できる。</li> <li>・ 施設、設備について新たな土地、建物を確保し、学生生活の環境整備に努力していることは評価できる。</li> <li>・ 体育施設・設備が少ないにもかかわらず、全日本歯科学生総合体育大会で総合優勝するなど運動面でも秀でていることは大いに評価できる。</li> <li>・ 6年生まで進級した学生はほぼ卒業し、国家試験の合格率も高水準であることは高く評価できる。</li> <li>・ ラオス国立大学と協定を結び、国際交流を学生教育に活かしていることは評価できる。</li> <li>・ 各研究室にグループで学生を配置させ、実際に実験などを行うチュートリアル教育の実施は教員との直接的なやりとりができることや将来へ向けての興味をかきたてる上でも教育的効果は高いと思われる。</li> </ul>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入学に際し、「浪人するか迷った」、「より高水準大学に行きたかった」あるいは「他大学への再受験を考えた」などの学生も多く、不本意入学あるいは自分探しをしている学生がかなり含まれていると考えられる。これらの学生に対していかに対応するかが問題点ではある。</li> <li>・ 対人関係での悩み、不安をかかえている学生が多く、精神面でのサポートをいかにするかが問題点である。</li> <li>・ 体育施設・設備は道場とコート程度で少ない点は問題である。</li> <li>・ 喫茶・軽食については、地下にあること、スペースが狭いこと、品数が少ないことなど問題がある。</li> <li>・ 部室のスペースが十分に取れていないのは問題である。</li> </ul>	



- ・ 図書館の開館時間が短いのではないか。

## これからの学生支援に望むこと

### <つながりある教育体制>

6年一貫教育において第2学年から専門科目が本格的に行われている現在、初年度教育の重要性がさらに深まっている。入試科目の理科が1科目であることから物理、生物、化学の教育の位置づけはきわめて重要である。将来学ぶ専門科目につながり、興味を持てるような内容として充実させる必要がある。また、専門科目においても、つながりが分かりやすいように統合型講義を多く設ける努力が必要と思われる。

### <学生相談体制の充実>

全学的に行われている学生相談研修会ならびにインテーカー取得制度により、学生相談体制の充実化は容易に図れるものと考えられる。今後も悩みを抱える学生数の増加が考えられ、精神的に問題を抱える学生も増えると思われる。学生が相談しやすい環境づくりやカウンセラー、精神科医との連携をさらに強化することが必要と考えられる。

### <クラブ活動支援のさらなる強化>

クラブに所属する学生の割合は多く、緊密な縦の関係の構築などクラブ活動を通じた学生に対する教育効果は大きい。大学を誇りに思うという学生が多いという結果もこれに起因することが考えられ、クラブ活動支援のさらなる強化が学部発展に寄与することは明らかである。その意味からも体育施設、部室のスペース、そして憩いの場の確保などをさらに図る必要があると考えられる。

## その他

大学全入時代を向え、学力低下の波が歯学部にも押し寄せていることは事実である。同時に自己中心的な、あるいは自己愛の強い学生も増える傾向にある。親についても同様である。このような状況下、6年間で国家試験に合格するような学生を育てていくということが歯学部の大きなひとつの使命である。特に受験生の親は国家試験合格率に対して敏感であり、その高低を入試の応募や入学の選択の判断基準としている傾向にある。歯科医師数の削減がとりざたされ、歯科医師国家試験合格率の抑制が行われている現実からみて、現在の水準を維持あるいは向上させる必要がある。一度、合格率が落ち込むと回復させるのがいかに困難かは他の歯科大学の例をみれば明白である。その意味からもきめ細かい学生支援を行い続けることは必須である。そのためには、変わりゆく現代

学生の特徴を捉えつつ、適切に対処できる教職員の充実が必要である。教育・研究・臨床に関する各種の研修会、各種委員会等々での議論を踏まえ、それらをフィードバックさせながら、学部教育、臨床研修医制度、歯科病院そして大学院歯学研究科等、日本大学歯学部全体の質をさらに高めることが、真面目に物事に取り組む、自身の大学を誇りに思う常識人をまたさらに培うものと考ええる。

評価した学部等	松戸歯学部
評価者氏名	小川久美子
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p><b>学習支援に関して</b></p> <p>シラバスを通して感じたのは、1年生から6年生までに基礎勉強から順次専門的（臨床に添った）勉強へしっかり積み重ねながら学習させている内容で、とても良いと思った。</p> <p>特に、5・6年次は臨床実習の中で『メディコデンタル（医学的歯学）』を目標にして、その中で技術面と人格面の両方を重要視した内容となっており、歯科医師として最も大切な教育をしっかりと身に付けることができる点は素晴らしいと感じた。</p> <p>また、1年生からコミュニケーション教育が充実していて、院内見学や研究・課題発表なども組み込まれているし、一般の歯科病院・医院への訪問も行われている。これらは将来歯科医師となる心構えや意識を再認識できる非常に良い（効果的な）カリキュラムだと思った。</p> <p><b>授業について</b></p> <p>教員の教え方、対応、会話などは【A】（とても満足している）のランクにあるので学生達は良好な師弟関係を感じていると思われる。このことは何より学習意欲や学習能力を高めていける最大の支援である。</p> <p>学生生活支援に関して：</p> <p>報告書から見ても、事務窓口の対応・サービスは【A】の1位に入っているし、購買部の品数・サービス、伝達事項の掲示も同様【A】である。これらは快適な学生生活には欠かせない要素だと思うので、今後もその点の充実を期待する。</p>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p>セキュリティ一面では少し不安がある。各種施設や設備は専門業者に委託し、定期的な点検を行っているということだが、学校・病院という関係上不特定多数の人が出入りし簡単に外部からの不審者も侵入できるため、今以上に警備やガードマンの数を増やすなどの対策を望む。また、入り口でのチェックも同様で現在も行っているが、さらに強化した形をとる必要があると考える。</p> <p>交通手段（通学）にも問題がありそうだ。松戸駅から徒歩圏内に大学がないため、日大病院行の市バスかタクシーの利用となる。特に朝は非常に混んでい</p>	

るし、時間の間隔も長く、不規則という不満は出ている。タクシーも乗り合いで朝は学生も利用するが、雨の日は台数も少なく時間がかかってしまうそう。学生も患者さんも駅と日大病院の往復だけなのだから、直通のバスやスクールバスを用意することはできないだろうか。自家用車が禁止されているなら何か交通手段の改善が必要であるし、授業や実習で、また部活でも帰りが遅くなることが多いのだから安全面も含めて考えるべきだと思う。

日本大学学生生活実態調査報告書から見ると【D】(とても不満である)が学食のメニュー・値段である。営業時間も同様なので改善してほしい。学内に食堂ではなく、気軽に出入り出来るオープンスペースやホールなどがあれば、気分転換にもなるしキャンパスのムードも明るくなるように思う。

その他コンビニエンスストアが学内にはもちろん、近くにもないのでそのような店舗ができれば非常に便利だし利用度は高くなるので、学生生活支援として考えてはどうだろうか。

#### これからの学生支援に望むこと

日本大学の良さである母校愛や先輩、後輩との絆は卒業後も長く深くかかわっていくものだと思うから、同窓生や卒業生との接点を持つ行事などがもっと行われてほしい。

松戸歯学部は同窓会主催の卒後研修会など企画し実施してはいるが、学生達にも広く知ってもらい、参加してもらいたい。多くの世代が関心あるテーマで講演して、その感想やディスカッションを終了後に行うというようなこともおもしろいと思う。

また、学生の臨床見学として、大学病院だけではなく先輩の病院・診療所に行かせ課外授業の一つとしたり、先輩達が入会している種々のスタディーグループの集まりに参加したりすることも将来の役に立つかもしれない。先輩として、後輩達がこれからの社会へはばたいていく手助けや情報を提供するという役割が学生支援であるような気がする。

#### その他

今回、初めて外部評価者という立場から、母校を真剣に見直して考えてみた。最初はこのようなレポートも苦痛になるのではと思っていたが、次第に興味深くなり日大報告書を読んで自分の学生時代と比較したり、他の学部との差を感じたりといろいろ貴重な体験をさせていただいた。

私には現在、松戸歯学部の二年生に在籍している娘がいるので行事のたびに

大学へ行くし、娘からは学内の情報も入ってくるので比較的今回のテーマはレポートしやすかった。卒業後大学とのかかわりが少ない方には、書類上（資料）からだけの考察になったと思うので、今後はこの外部評価者の選出には現在も何かかかわりのある人がよいのではと思った。

5月18日に外部評価者が一堂に集ったわけだが、評価後にもう一度意見交換や懇親会などで再会すると、多分前回の時とは違った親近感や日大卒業生同士の絆をより強く感じられたかもしれないと少し残念だった。

評価した学部等	松戸歯学部
評価者氏名	中村 茂
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>松戸歯学部は1学部1学科と言う事もあり教職員と学生の間でコミュニケーションが充実している。</p> <p>部活に所属している人が多く体育会系ないみでは社会に出てからの教育が充実していると思われる。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>部活に所属するというのは非常に良いところでもあるが逆にそれを授業や成績に絡めるといのは良くないと思われる。</p> <p>部活に入ってなかったり、途中で止めたりした者は教員からいじめにあったという話も今回良く聞いた。又教員の出世が、臨床や研究の実績ではなく人間関係からきているという噂が学生の間でひろまっているらしくこれは教育上においても問題ではと感じた。（教員の出世論 67を増やすために科を増やして意味がわからないとか、松戸歯学部の評価が世間から見ると低くなっているとも聞きました）</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>少しでも多くの学生が社会に出て立派に勤められるような環境を作っていたきたいと思います。特に歯科会は孤立しやすく一般社会からおざかった感覚を持った人が多い。さらに大学の小さな松戸の中に孤立しているため社会に出て大変な思いをする人が多い。小さい学部のためコミュニケーションがとれ仲間意識が強いのは学生生活も楽しくよい事でもあるがもう少し広い世界を学生が見れる機会があればより良いと思います。そして松戸の中に留まらず松戸歯学部から世界でも通用するような歯科医師がより多く現れれば大変喜ばしい。</p>	

評価した学部等	生物資源科学部
評価者氏名	松崎和夫
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・施設・設備について <p>教室，研究室は質的に十分な施設を有している。設備についても必要十分な設備を有しており，教育・研究に十分な環境にある。</p> <p>グラウンドは400mトラックのある十分なグラウンドであり，体育館も柔剣道場，トレーニングルームのある十分な面積を確保している。</p> </li> <li>・キャンパスについて <p>広大なキャンパスに余裕のある空間があり，樹木も含め大学のキャンパスらしい雰囲気がある。世田谷（三軒茶屋）キャンパスとは格段の違いである。</p> </li> <li>・農場・演習林について <p>本学部は八雲（北海道），水上（群馬），下田（静岡），富士（静岡）に実習場を保有しており，十分な実習環境を有しているが，併せてキャンパスに隣接して農場・牧場・演習林を有している。教室や研究室で学んだことが隣接したフィールドですぐさま実験・実習することができることは極めて重要である。本学部がこのことを重要視して世田谷（三軒茶屋）キャンパスから湘南キャンパスに移転したことが理解できた。</p> </li> <li>・フィールド実習について <p>本学部が保有する実習場を利用して実施する学部横断的実習科目「フィールド実習」は，学科を越えて土や海や動物に触れることは重要であり，更に実際にフィールドで起きていることを体感することは有効な手段である。</p> </li> </ul>	
<b>これからの学生支援に望むこと</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生食堂について <p>学生が昼食をとる手段として，学生食堂2箇所，学生ホールにモスバーガー，コンビニ（弁当及びパン販売），ドトールコーヒー（パン販売），購買部（弁当及びパン販売）があるが，昼休み学生食堂に長蛇の列ができていた。学外に飲食店がないこともあるが，学生はキャンパス内で調達する以外に方法がない。これ以上学生食堂を増やせない大学の事情も理解できるが，限られた時間内に昼食をとれるシステムを構築することが望ましい。</p> </li> </ul>	

## その他

### ・大学とのネットワークについて

卒業生が自身の仕事に関連し相談にのってもらいたい事象が起きることがある。こんな場合、卒業した研究室を大学（教員）が相談にのっていただけるようなシステムがあるとありがたい。同様に卒業生とのネットワークも校友の多い本大学には有効な手段ではないか。

良い先生とめぐりあうという観点から、教育者は非常に重要である。親身になってくれる教員を、幅広い人材から教員を採用するほうがよい。



評価した学部等	生物資源科学部
評価者氏名	柳澤成江
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p>① 学生生活実態調査において、生物資源科学部で満足度が高いのは、科目登録時の選択の自由性、他学部の授業との単位互換性、学部内他学科の授業受講、学生の研究活動の自由さ、授業料に見合った授業内容、教室内の設備・研究施設・体育施設、サークル活動の自由さ、キャンパスの配置・雰囲気であり、日大に入って良かったと思う学生がとても多い。今後もこの満足度を維持していただきたい。</p> <p>② 演習林、農場など、大学の野外施設が充実しているところが良い。</p> <p>③ 科学英語の講座があるのはとても良い。学生のうちから専門分野を英語で学び、英論文を書く訓練ができれば良い。</p> <p>④ 就職支援としてTOEICテスト、パソコン講座、キャリアイングリッシュ講座があるのはとても良い。</p> <p>⑤ 私は国家公務員なので、公務員就職に関する資料が充実していると感じた。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>① 学生生活実態調査において生物資源科学部で不満度が高いのは、授業情報の知らせ方、事務伝達事項の掲示である。携帯電話への送信やメルマガ配信など、電子情報による提供を検討するべきだと思う。</p> <p>② 私は附属高校の卒業生だが、当時は志望学部の情報がほとんどなかった。今は学部の施設・設備を利用した講義・実験を行い、大学教育に対する理解を深めているということだが、せっきくの附属なのだから、低学年のうちから大学見学や体験授業などがあっても良いし、附属高校の生徒がもっと自由に大学施設（図書館など）を利用できたら良いと思う。</p> <p>③ 基礎学力の不足を痛感する学生が多いことから、特に基礎科学の補講があると良い。</p> <p>④ 担任との関わりをもっと緊密にするべき。</p> <p>⑤ できれば専門性が活かせる就職先が良いが、全く異業種を希望する学生もいるため、他学部の協力を得ながら就職支援ができると良い。これも総合大学だからこそできること。</p> <p>⑥ ボランティア活動を希望する学生の支援など。</p> <p>⑦ キャンパス内のバリアフリー化、外国人留学生用の案内表示の充実など。</p>	

- ⑧ 災害発生時の備蓄，避難訓練，また，毒物・劇物の取り扱いや関係法規の周知。
- ⑨ 診療所の設置。
- ⑩ 個人情報流出防止の厳格化。
- ⑪ 学生の喫煙防止対策を強化するべき。

#### これからの学生支援に望むこと

- ① 若い世代の食の乱れが指摘されている。学生食堂で食育を行ってはどうか。
- ② 食品会社のモラル低下が指摘されている。食の安全・安心は社会生活を維持する上で最も大切であること，またそれに携わることの誇らしさという意識の植え付け。
- ③ 実用（専門）外国語教育の充実，国際貢献への足がかり，外国人留学生との交流など，ワールドワイドな人材育成が必要。
- ④ コミュニケーション能力，交渉力など社会人としての適合能力育成が必要。
- ⑤ 社会人学生の受け入れを検討してはどうか。
- ⑥ 父母にも大学に関心を持ってもらえるよう公開授業，キャンパス案内があると良い。
- ⑦ 関連する学科同士の交流や施設の相互利用を積極的に進めたら良い。
- ⑧ 学部，学科ごとに卒業生のネットワークづくりができれば良い。

#### その他

- ① 施設，キャンパスが立派になっていてびっくりした。今も環境はとても良いが，昔より学部内に緑地が少なくなった。造園，ビオトープ，ふれあい牧場などを学生自らがづくり，体験するなど，農学部らしいキャンパスにして欲しい。
- ② 日本大学の長所は何といってもあらゆる学問を網羅する総合性とスケールメリットである。また，学業の偏差値だけに囚われない豊かな人間性を持つ学生が多く，「ストレスに強い柔軟性」を持つ卒業生が多い。  
日大生の良いところは，エリート意識を持たず，他人を蹴落としたり見下すこともなく，また反対に，自分を卑下することもないところ。他人を理解し，受け入れることができ，降りかかる苦難にも柔軟に対応することができる。それが日大人の良いところだと思う。今後も大学の「学力レベル向上」にばかり気を取られず，豊かな人間性を持つ日大人を育てて欲しい。在学中は気が付かなくても，卒業してから「日大が好きになった」という人

は結構いる。

評価した学部等	薬学部
評価者氏名	西村伸大
<b>評価結果</b>	
よい（効果的である）と思われる点	
<p><b>学習支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・薬学教育科目だけでなく、一般教養科目及び外国語科目等、社会人として的人格形成と薬剤師養成に必要な科目がバランスよく配置されている。</li> <li>・薬剤師実務を習得するための病院・薬局実習等において、特に6年制のカリキュラムで「早期体験実習」が1年次に配置され、更に実践実務に即した「実務事前実習」が学内で実施可能な点。</li> <li>・薬剤師国家試験に対応し、秋期に行っている学外講師による能力別基礎学力強化講座は、講義の効率や学生の理解度向上といった面からも有効であると思われる。</li> <li>・薬学教育科目の基礎となる生物学及び化学について、入学決定者にテキストを配布して自習／復習を促し、さらに入学後には基礎生物学、基礎化学を必修科目とする等、基礎学力水準の向上からも有効と考えられる。</li> <li>・医療倫理に関する科目の設置や専任教員を迎えてのコミュニケーション能力を高める教育は今後の薬剤師養成には重要であると思われる。</li> </ul> <p><b>生活支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後増加する可能性がある精神的不安を抱えた学生への対応として、学生相談室に専門家が配置されており、さらに相談室環境への配慮がなされている。</li> </ul> <p><b>就職活動支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・低学年からのガイダンスや公務員試験対策、また数多くの学内外における企業／OG・OB講演会およびセミナーの開催。</li> <li>・就職指導課主催の学内で行われる業界セミナー等は、学生も参加しやすく、無駄なく多くの企業の実情を把握する上で有効であると考えられる。</li> </ul>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<p><b>学習支援について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・GPA制度については、まだ良く理解していない学生がいるようなので、単位取得の方法も含め、その意義等について今一度詳細な説明が必要と思われる。</li> <li>・薬学部の学生は、真面目で研究肌の学生が多いようであるが、今後臨床の現場へ進出して行くには、特にコミュニケーション能力が重要と考えられるた</li> </ul>	

め、実践薬学部門のユニットだけでなく、学内実習にも取り入れていく必要がある。

- ・医療人の一員として、広く社会一般の常識・教養も身につけ、積極的に人との関わりを持てるよう、ボランティア活動・社会活動等への参加を推奨していくのも一案と考える。
- ・薬学教育において、苦手とされる検査学の知識を更に深め、臨床現場に対応できるようにする必要がある。
- ・図書館に薬学あるいは医学関連のDVD等を見計らいアンケートによる推薦意見を元に、取り揃えた方が良いのではないかとと思われる。

#### 環境に関して

- ・交通の便があまり良くなく、周りに学習施設も多くない環境で、自習室や図書館で勉強する学生が多いようであるため、食堂等も含め、各施設の使用時間をできる限り長く、効率的に使用できるように設定してあげて頂きたい。
- ・食堂については、やはり収容学生の数からするとスペースが足りないようであり、券売機に長蛇の列ができるとのこと。券売機、配膳場所、弁当販売の位置等を可能な限り工夫し、多くの学生が憩える場所にしてあげて頂きたい。

#### 就職活動支援に関して

- ・製薬系企業、病院等だけでなく、一般企業への就職希望者も今後増える可能性があるため、そのような学生に対しても早めの支援が必要と思われる。
- ・OB/OGへのメール等を利用したネットワークの強化（他学部も含む）により、就職先の拡充、在学生とのコミュニケーションの機会を増やす等、日本大学の充実したコネクションを最大限利用すべきである。

#### これからの学生支援に望むこと

- ・今後、薬剤師が医療業界の牽引者となり、臨床現場でもチーム医療の一員として活躍していくための充実した医学知識はもちろん、社会人として重要な人との関わり方を学べるカリキュラム構築への取組を望む。  
(インターンシップの充実、サービス業等の企業人による講演・実習 etc.)
- ・学生同士、教職員、他学年、OB/OG、他学部との交流を深めるため、オープンキャンパスや学園祭等への積極的参加、OB/OGへの周知などを徹底し、各学生の情報収集・連携強化の支援を期待する。
- ・特に医学部との連携を強化し、最新医療情報の提供を拡充すべきである。

## その他

- 実習室や研究施設等が新しく充実しており，学生，研究者の育成施設としても高レベルであり，「学術フロンティア推進事業」にも採択される等，他大学へのアピール度は高いものと思われる。更なる成果の集積と人材の確保により，研究施設としての日本大学薬学部にも期待する。
- 薬草園は日本有数の規模を有するため，臨時的人員増加等により，更に一般公開の頻度を増やし，高校生以下の学生等に対する体験学習，企業とのハーブの共同研究等により，社会貢献的取組および特色ある大学の宣伝要素として，もっとアピールすべきであると思われる。
- 他大学に先駆けて取り組まれた卒後生涯教育は，今後更にその必要性が増すものと考えられるため，学内外の興味あるテーマの収集とメール等による効率的な受講者への連絡等により，更に充実したものとなることを期待する。

評価した学部等	薬学部
評価者氏名	村山 琮 明
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>学生自身の満足度が高い。この点は、選ばれた学生ではあると思うが、視察時に、学生自身が積極的に述べていた。平成18年度の「学生生活の実態と変遷報告書」（以下報告書）においても、充実度が37.2%と高まる傾向にあり、「今の学部で良かった」も87.3%と全学一であった。</p> <p>「入学時および入学後も勉学へのモチベーションを保っている」学生が比較的高率であり、「比較的真面目な勉学態度の学生」の比率が最も高いのも薬学部で、先生方や事務の方のご指導が行き届いていると思われる。また、このことは、「勉学態度の向上率」が平成3年度の49.0%から平成6年度に64.8%と上昇し、以後ゆるやかな上昇を保って、平成18年度では74.6%と全学一であることから、うかがわれる。</p> <p>「空き時間を過ごす場所」が一番多いのが学生ホールで、その時に過ごす友達の数が4人以上が47.2%と、他学部に比べ10%以上多いのも特徴である。視察時も、部活にはおそらく半数以上が入っており、食堂や、ホールなどで一緒に過ごしている様子であった。学生同士のコミュニケーションが良いと言うことは、学部生活で最も大事なことであり、学生生活を有効にかつ活動的に最後まで修了することにも繋がる。</p> <p>「夕食は外食が多い」が全学で最低の12.7%であり、通学時間がかかっても、自宅から通っている学生が多いので、比較的健全な生活が保たれているのではと思われる。視察時の保健室や学生相談室の利用状況、学生相談室報告書（第32号）からも、大きな問題はないと考えられた。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>施設面では、女子ロッカーの部屋のスペースが狭いことが学生の話から出ていた。来年度改善の説明を受けた。</p> <p>図書館の開館時間の延長を望む声が聞かれた。確かに19:00までだと実習等で遅くなると寄れない時間だと思われる。評価者の大学もアルバイトではあるが、21:00まで対応しており、前勤め先大学では、日曜日も開館していた。他学部では一部対応している学部もあり、改善を求めたい。</p> <p>コミュニケーションを取る場所として、食堂の開放を望んでいる声も聞かれたが、新しくできたばかりの8号館の自習室やロビーの有効利用が望まれる。</p>	

## これからの学生支援に望むこと

6年制が始まり、全学年でその体制になったときの対応は、すでにお考えではあるし、施設面でも充実が認められるが、教員対学生の数の比は明らかに前の体制より、学生に不利である。人と人のコミュニケーションが成り立ってこそ、勉学であることを思うと、一抹の不安を感じた。本大学だけではなく、他大学の薬学部でも抱えている問題ではある。

学部が独立して、さらに独自の施設になったことから、逆に、総合大学の良さをあまり感じられなくなったのではと考える。せめて、医歯薬の3学部の交流が活発になればと思う。これは、視察時、学生からの要望でもあった。学術的な交流がむずかしければ、スポーツ大会などの学生同士の交流から始められてはどうだろうか。

## その他

就職案内用の書類等の整理がきちんとされており、事務長等のお話しにあった「学部になってから、学生の顔が見える」状態だと感じている。報告書の「奨学金情報」も容易に入手できるが40.6%であり、他学部と比べ、ダントツに高い。大学全体で「申請する必要がある」が47.5%であることを考慮すると、必要な人は容易に情報を得ていることがわかる。評価者の経験からも、事務の方々に本当に良く面倒をみてもらったという感謝の念があり、その良き伝統が続いているのであろう。現在の学生からも、対応をきちんとしてもらっているとの一言があった。

国家試験合格率が前年比で16.43%も上昇しており、全国で第2位という成績には感心した。あまりにも急な上がり方だったので、その理由をうかがったところ、学部長から、昨年だけのことではなく、その前何年もの種々の対策をされてきた結果とのお話しをうかがい、先生方のご指導に安心感を持った。やはり私立学校は国家試験の合格率にどうしても目が行き、敏感になる。そればかりが、学校の評価や学生の生活に直接結びつく訳ではないが、良いことにこしたことはない。報告書の「今後学部が評価されるかどうか」は65.5%、「学部出身者は社会に有利」も72.5%と全学でトップであり、将来への希望、期待も持てる学部と学生から評価されていると感じた。

評価者の学生時代は学部としても独立していなくて、図書館もごく小さい場所であり、ロッカーも無かったし、現在の全国的にみても充実した研究センターなど羨ましく思うが、学生時代の充実感は大きく、現時点での学生にもその点が受け継がれているのが、最後に嬉しく思った次第である。



評価した学部等	通信教育部
評価者氏名	岡本恵里
<b>評価結果</b>	
よい（効果的である）と思われる点	
<p>&lt;生活実態報告書&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「学内で空き時間ができた場合、主にどこで時間を過ごしますか」において、他学部と比較して<u>図書館や学生ホール</u>を利用している学生の割合が多く、学生生活において空き時間の行き場が確保できていることはよい。「図書館」に関する設問は全体的に満足度も高く、学習環境が整えられていることを示すものと思われる。</li> <li>「あなたの学生生活は充実していますか」において、他学部と比較して20.2%と<u>最も高く</u>、大学の学生支援に対する高い評価の現われでもあると思われる。</li> <li>「日本大学に入って良かった」、「日本大学の良さを認める」、「良い影響を受ける教職員に出会えた」と感じている学生が他学部より多い、86.0%、73.7%、58.8%もいたことは、<u>日頃の教職員の学生支援の取り組みの積極性が評価</u>されていてよい。</li> </ul> <p>&lt;平成19年度入学案内&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>入学後の<u>学習方法や学生生活に関する情報</u>がわかりやすく示されており、イメージ化しやすい。</li> </ul> <p>&lt;メディア授業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>様々な状況におかれている人々にとって、学問を学ぶ機会を得る（確保する）ためには個々多くの課題を抱えているが、<u>メディア授業による学習も</u>選択できるようになったことは、学生支援としてとても重要な取り組みといえる。</li> </ul> <p>&lt;通信制大学院&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「<u>修士課程・博士課程</u>」が開設されており、卒業生は入学金全額免除という特権も与えられ、学部生がさらに学習をすすめていく門戸が開かれていることは重要である。生涯教育の重要性とニーズが高まる今日、他大学に先駆けてこうしたシステムを構築したことは高く評価したい。</li> </ul> <p>&lt;学生相談センター&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本大学では、<u>学生相談センター</u>を独立した組織として従来より設置しており、インターカー<u>研修体制</u>も充実していることから、学生支援に積極的に取り組んでいる大学と思う。臨床心理士資格を有するカウンセラーが月～土の10:00～17:00まで相談にあたっているが、通信教育部の学生は就業していたり、夜間の授業も組まれているため、1週間に1度くらい夜間</li> </ul>	

21:00頃までの相談時間延長も検討いただきたい。

- ・ 学生相談センター発行の教職員向けの「学生サポートガイドブック」は具体例が示されていてわかりやすい。学生が陥りやすい状態がわかり、対応の基本や精神的問題の基礎知識が記述されていて、学生支援の経験が少ない教職員にとって貴重なガイドになると思われる。

## 改善や強化が必要な点

### <生活時実態報告書>

- ・ 昼間スクーリングの学生を母集団として調査されているが、回収率が28.8%と最も低い。通信教育という学習形態の特殊性が回収率を低くしている要因と思われるが、こうした学生と大学との接点をどう濃いものにしていくかが課題となる。
- ・ 「学内で空き時間ができた場合、主にどこで時間を過ごしますか」において、他学部と比較して学生食堂・喫茶を利用している学生が少なく、学校周辺の喫茶店に行く学生が他学部と比較して多いことから、学生生活の「飲食」へのサポートの充実が望まれる。しかし「学生食堂のメニュー・値段、営業時間」の満足度は高いため、利用率の低さの原因を究明する必要がある。
- ・ 「開講されている科目の種類」に対する満足度が低い。他学部と比べ通信教育部は、学生の背景やレディネスが異なる学生が対象となるためニーズの幅も広いことが予測できるが、通信教育という門戸の開かれた教育システムゆえに、今後学生のニーズを的確に把握し、教育科目の充実を図る必要がある。
- ・ 「コンピュータの利用環境について」の満足度が低く、今後大学に居る空き時間等にレポート作成や自己学習のための検索、「ポータルサイトNUC-Learning」がすぐ利用できるような環境整備が望まれる。
- ・ 「学部情報の学生向けホームページ」の満足度がやや低く、通信制の学習形態をとる学部が故、大学と学生の接点ともなるHPの充実が望まれる。
- ・ 「大学は学生の個人情報について細心の注意を払っている」は、他学部に比べ守られていると認識する者の割合は高いが、30.7%の学生がいいえと回答している点は、今後更なる実態調査を進め、改善点を明確にする必要がある。

### <平成19年度入学要項>

- ・ 2色刷りで工夫はされているが、紙の厚さが薄く裏面の文字が透けて見えたり、文字間が狭いため、全体的に見にくい印象を受ける。

### <平成19年度教材要綱>

- ・ 通信教育であるため、学習者が教材を活用しながらどう学ぶかにかかっている

るが、どの科目を選択するかを決める際の情報が少ないように感じる。「スクーリングの手引き」には学習目標が明記されているが、教材要綱は学習のポイントや留意点として示されていてわかりにくい印象を持った。教材要綱は、欄を作って項目毎に区切るなどの見やすさの工夫が望まれる。

#### これからの学生支援に望むこと

##### <生活時実態報告書>

- ・「入学以来の不安、悩み、トラブル」の中に、勉学や就職・将来の進路に関する項目は高いことは予測したが、経済的問題や健康上のことに関する問題に対しは、個々問題の内容や質が異なるため、大学側がどのような支援体制を整えるかに期待したい。

##### <学習センター>

- ・全国に配置されており、受講者にとっては利用しやすい学習環境が整えられている。今後はこうした学習センターにおける利用状況の実態や、学生のニーズを調査し、学生支援に活用したい。

##### <就職支援体制の改革及びその充実>

- ・将来に対する不安の中でも最も割合が高かった項目が、「就職できるか不安（35.1%）」であり、卒業後の就職に関して「未定」と回答した者が15.8%も居たことから、学生が最も望んでいる「職業適性」に関する知識、情報への支援を中心とする支援体制の改革、充実が求められていると思われる。

##### <その他>

- ・通信教育部は他学部と異なる特性をもっているが、総合大学という特性をもっと生かした学生支援に期待したい。

#### その他

- ・少子化、18歳人口の減少等に伴い、大学入学者の獲得は他大学との競争となるが、通信教育部入学者も減少しているという。通信教育部は、他大学（短大、専門学校）卒業後、さらに仕事に就きながら学ぶことが可能であるが、大学院ではなく学部教育として多くの人々が日本大学で学びたいと感じることが出来るような魅力ある大学・学部作りとそのPRが必要になると感じた。
- ・現在私自身も大学教育に携わっており、日本大学が取り組まれている様々な支援体制、またその評価システムに関して多くの学びを得た。これらを今後

の教育活動に活用していきたい。

評価した学部等	通信教育部（理工学部，ほか全般）
評価者氏名	田中重光
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>通信教育部はインターネットを利用したメディア授業をおこなうなど，学内でも最も先端的な教育に精力的に取り組んでいる。</p> <p>今後，本格的な高齢社会を迎えるにあたって，益々，通信教育部への期待と多様な充実が必要になると考えられる。</p> <p>また，公報活動においても，多学部と比較して，社会人の方が学んでいることもあって，その充実ぶりは優れていて，学生の分析資料も高く評価できる。</p> <p>理工学部の社会交通工学科（旧・交通土木工学科）では大学院修士課程で学んだものとして，J A B E E の認定を受けたことは高く評価できる。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>学部全体に言えることであるが，学部毎に一般教養を抱えていることが不思議でならない。専門教科はしかたないが，今後，学生数は確実に減少するなか，一般教養センターなる学習拠点を設けて集約化することが必要。そうすれば教員や事務化の削減や効率化が効果的であると考ええる。</p> <p>通信教育部においては，文系の学科が多く，芸術や工学系の学科がない。現在の他大学をみると，例えば愛知産業大学で，昨年度に通信教育部・造形学部を開設している。その造形学部には建築学科や都市計画学科，デザイン学科ほかなどが設置されている。高齢社会はもとより，最近，単にCADで建築図が書けるだけの若い派遣社員が多数いる。かれらは専門的に建築を学んだことがなく，あくまでも作図オペレーターである。ところが，なかには本格的に建築を学んで資格を取りたい人が増えている。将来のない派遣社員を卒業したい傾向のようである。そうした意味で，芸術や工学系の学科増設を提案したい。</p> <p>社会交通工学科は，わたしの在学していた頃よりも，少し学科の特徴がボケているように感じる。もっと公開講座を増やし，公報活動を活発にするべきである。これは理工学部全体にも言えることだが，高校生に学部の魅力や将来性など，的を絞った具体的な強いメッセージを発信すべきと考える。</p> <p>特に，地球環境から都市環境に配慮した交通計画，都市工学，都市デザイン</p>	

の提言を社会に訴えるべきである。

#### これからの学生支援に望むこと

学生支援もいいが、それよりも学費を下げてほしい。企業では切磋琢磨して品質管理の上で合理化や製品コストの削減に努めている。切磋琢磨とは、リストラあり、正社員のほか契約、嘱託、外注、派遣という社員の構成変化、従来の雇用関係はすでに崩壊し、簡素化と効率化が強化されている。それでも業種間競争のため製品コストは上げられないのである。日本大学はどうだろうか。大半の教職員は従来の雇用規則に従ったままで、いわゆる公務員と化した雇用制度にアグラをかいていないか。少子化で学生の数は確実に減少するなか、民間企業のように早急な雇用制度改革に乗り出さなければ、日本大学の将来はないであろう。現に、わたしの娘も再来年には大学受験期を迎えるが、わたしの給料の減少と学費は頭痛の種である。娘は学費の安い大学を中心にキャンパス見学を行っている。

#### その他

これからの大学は、若い人から高齢者を対象とした広範囲な学習環境を整える必要がある。そのためには、駿河台に建設予定の仮称・日本大学センターは世代間を超えた総合的な学習拠点として位置づけてほしい。一般教養や公開講座、社会人で単位取得可能な学習センターや社会人教養講座など、多種多様な学習環境を整え、これまでの学部毎に孤立した学習体制を改革してもらいたい。

## 評価結果記述様式

評価した学部等	短期大学部（三島校舎）
評価者氏名	工藤政則・野中美香
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <p><b>学習支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館の蔵書について、専門書が多く充実している、また検索機能も良いと思います。</li> <li>・食物栄養学科の給食経営管理実習の検食を試食して、大変素晴らしいと思いました。特に人前での発表や試食アンケート調査など良いと思います。</li> </ul> <p><b>学生生活支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生相談室の開設があり、こころのカウンセリングにも対応していて良いと思います。</li> </ul>	
<p>改善や強化が必要な点</p> <p><b>学習支援に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館利用者数の拡大のための工夫が必要と思います。 学生全員が利用してもらえるよう授業の中で利用させる、また、難しいと思いますが正門近くに図書館を移転させる等の工夫が必要と思います。</li> </ul> <p><b>施設の改善に関して</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各教室の照明への工夫が必要と思います。（少し暗い感じがします）</li> <li>・食物栄養学科の資材や材料の搬入の為のエレベーターを設置した方がよいと思います。</li> <li>・地震時、物の転倒防止策の工夫が必要と思います。（特に実験機材など）</li> <li>・短大校舎の近くにも学生の利用できる休憩場所が、もう少し広くあれば良いと思います。</li> <li>・二輪車用駐車場のスペースの拡充と安全のため正門に専用出入り口の設置が必要と思います。</li> <li>・身障者が一人で利用できるよう、特に本館の改築や共用施設への分かりやすい案内板の表示などユニバーサルデザインの充実を図る必要があると思います。</li> </ul>	

### 編入学対策に関して

- ・ 商経学科は、国際関係学部への編入が多いことから単位の更なる整合性や、商学部や経済学部等への編入の強化対策。(カリキュラムの充実など)

### これからの学生支援に望むこと

- ・ 社会の生活格差の拡がりに応じて、学生の中でも奨学金制度を必要とする学生の急増が見られるようです。奨学金制度の見直しを進めるとともに、種類を増やし、枠の拡大などの改善をしていただけたらと思います。
- ・ 心のケアを必要とする学生が年々多くなっているようです。学生相談室の改善(部屋の雰囲気明るくするとか、もう少しプライバシーが守られるよう工夫するなど)に努めてください。カウンセラーの常駐や増員など、タイムリーな対応をお願いしたいです。

### その他

- ・ 地域と共に歩む大学として食育をテーマに立ち上げられたプロジェクトに参加し、地域住民の健康支援に大きく貢献しているところを見聞することができ、高く評価します。又、少子高齢化が進む中で、健康生活の基本である食生活は、益々重要になります。食に関する知識のニーズが高まる中で、管理栄養士の育成は重要で、そのための学科改編や整備が早急に望まれます。
- ・ とにかく校舎の老朽化がひどく、トイレも薄暗く和式トイレしかないので改善していただきたい。食物を扱う学科だけに清潔なイメージが求められるが、校舎が古いために印象は良くないと思いますので、早急に検討していただけたらと思います。



評価した学部等	短期大学部（船橋校舎）
評価者氏名	松尾登志子
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>教育理念・目的及び教育目標の明文化，教養教育に重点をおく専門学校との差別化，実践的な専門教育編成，単位互換制度による理工学部設置科目の履修は，進路の多様化への対応として効果的である。学生の学修活性化に向けた「教職員研修会」，WEBシステムによる統一した書式のシラバスはFD活動として効果的である。図書館は船橋・駿河台の利用，「LOOKS 21/U」全学共通図書館システムの活用で，理工系専門図書館のほか，多様な分野の研究に活用ができるネットワーク環境が整い効果的である。日中共同研究による中国政府からの学・協会賞受賞は，短期大学部の研究活動がハイレベルであることを社会に向けてアピールできる絶好の機会であり，優秀な教員による多様な研究活動を通して，実社会に貢献できる技術者の育成が可能となる教育環境が整っていることは評価できる。「公開市民大学」及び「図書館公開講座」の開催や産学連携の各種イベントへの参加は，教育研究上の成果の一部を地域社会に還元し，短期大学部の存在を多方面・多世代に広報できる機会になっており評価できる。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>履修科目で国語力・英語力の向上を上げているが，具体的に学習意欲を引き出す工夫が望まれる。（例）建設学科：英語表現法Ⅰ「映画で英語を学ぶ」だが，Z大学は「デザイン英語」で，専門性の高いテキストを使用し学習意欲を引き出している。外国人教員の受け入れ，原書購読，基礎教育科目と専門教育科目の連携強化が必要である。図書館開館時間は平成17年度から時間延長されているが，授業時間が平日は18時10分まで，土曜日にも建設学科では，後学期14時50分まであり，開館時間のさらなる延長や日祝日開館の検討等により利用環境の拡大を図ることが必要である。就職希望者は少数だが，短大は2年間の完成教育の場であり，就職希望者に専門指導を行うキャリアアドバイザーの配置が必要である。学生相談室には専門のカウンセラーが配置されているが，編入学希望者が圧倒的に多い入学者の現状では，編入学経験者等のピアカウンセラー配置の検討が必要である。短大専用講義室の収容人員と受講者が調和する教室の整備，耐震，情報インフラの整備，学内環境・施設のバリアフリー化・省エネ化等は理工系短期大学部として社会の要請に答えることが重要であり，総合的な環境改善は学習意欲向上に必要である。</p>	

### これからの学生支援に望むこと

受験生の志望先が急速に短期大学から離れる傾向にあり、18年度は2学科で定員割れを起こし、募集目標の人数を充足できていない。19年度入試では、志願者数の減少に歯止めをかけるため、応急措置として、入学者選抜方式の改善、出願要件の見直し、広報活動の強化等が図られている。工学系の短大で大切とされている数学・物理の学習範囲を未修得状態の学生を受け入れている現状の中、導入教育科目が設置され履修指導が行われているが、本来受講が必要な学生が受講していない。現在の導入教育科目である数学・物理に加え、英語・化学も導入教育科目とし、卒業に必要な単位数に算入し、基礎学力レベルの底上げ、専門教育科目に取り組める学習能力の習得が必要である。

入学生の質の向上に向け、経済状況を給付要件とする奨学金とは別に、短期大学部独自に優秀な学生を積極的に受け入れるための給付奨学金の充実も必要である。

### その他

現状では入学生の多くが理工学部等への編入学を希望し、編入学を考慮に入れた授業科目配置での学習となっている。4年生大学に編入学するために必要とされる「基礎学力の養成」を教育課程編成上の基本方針に据え、一方、就職希望の学生には、2年間の専門教育により即戦力として実社会に貢献できる「有能な工学系技術者の育成」を目指し、各学科で実践的な専門教育を編成している。2本の大きな教育目標の継続は、理工系短期大学としての特徴ある教育課程編成では重要であるが、近年の少子化や4年生大学入学希望者の増加により、多くの短期大学が学生募集の停止や入学定員の削減等の改組・転換を余儀なくされており、全入時代を迎え、短期大学存続に向けた教育課程編成の一元化の検討も必要であると考えられる。

評価した学部等	短期大学部（船橋校舎）
評価者氏名	村上道夫
<b>評価結果</b>	
<p><b>よい（効果的である）と思われる点</b></p> <p>短期大学部は、他の学部と比べて各学科コースの人数が少なく先生方との交流が親密にとれる環境である。また、2年間という短い時間しかないにもかかわらず多くの経験ができとても良い経験ができるのではないかと思います。</p> <p>学生の気質も変化してきているようですが、大筋は変わらないと思います。私の経験からして、大学の受験に失敗した学生にも寛大に接していただけるので大変おおらかな雰囲気があるのではないのでしょうか。このことは、とてもよいと感じています。多くの学生と話や交流ができるでしょうし、先生方の研究室がすぐ近くにあるのでさまざまなことができ大変有意義な2年間が送れる環境であると今回の視察で感じました。</p>	
<p><b>改善や強化が必要な点</b></p> <p>募集する学生の高等学校卒業時点での教育課程が様々であり、入学前および入学してからの教育カリキュラムを工夫する必要があると思います。編入学試験や就職活動が私たちの時代に比べて速くなっているので、授業時間数が1年時に前期に多くなってしまうと考えられるが、将来的な学力を向上させるためには必要なことではないのでしょうか。また、そのために必要な人材を短期大学部出身の高等学校の先生方に依頼するのも一つの方法ではないかと思います。</p> <p>さらに、学生との交流という観点から指導される先生方には大変負担になるとは思いますが、船橋校舎に滞在される時間をもっと増やしていただき学生との対話に充てるのが大切なのではないのでしょうか、他愛のない会話からいろいろな発見ができるのではないのでしょうか。理工学部各研究室での仕事や雑務も多くあると思いますが、2年間の学生生活を第一に考えていただきたいと思います。そのために、教員数の増員も視野に入れるべきではないのでしょうか。</p>	
<p><b>これからの学生支援に望むこと</b></p> <p>社会の意識が以前に比べて難しくなっています。いろいろな学生が入学してきていますが、基本的に大学に入学できる資質がある学生です。キャンパス内の食堂や購買部以外に展示スペースなどもあり施設は従来に比べて充実していて大変興味深いものがありました。</p>	

しかし、学生の学ぶ姿勢が依然よる低下しているのも現状としてあるのではないかと思います。進級の可否を厳密に行って学習する姿勢を大切にして欲しいと思います。また、学生の授業を見学させていただいて先生方をお願いしたいことは、高等学校の現場では教育課程の内容が大きく変化しています。その変化をぜひ授業に取り入れていただきたい。そして、学生に還元していただきたい。その上で、真剣に不真面目な学生を叱咤していただきたい。それが、一番の学生支援だと思います。学生は、ただ遊びに来ているわけではないと思います。先生方の熱意はきっと通じると思います。

## その他

同じような教育現場にいるものとして、10年前に比べて教える側の私たちに心のゆとりがなくなってきたように思えます。「ゆとり」と聞くと怠けていると、とられることが今の時代のニュースなどを聞くととられてしまいがちですが、その時その時の物事にとらわれすぎてしまって、全体を見ることがなくなってしまったのではないのでしょうか？

社会に対して責任のある人間を育てるために、多少時間がかかっても適切な対応がとれるような個々のシステムがあってもよいのではないのでしょうか。私が在籍させていただいた時代の短期大学部は、その様な雰囲気があったように思えます。今はただ、流れのままに時間が経っていきすぐ卒業してしまうといった感じしか得られないのではないのでしょうか。もっと、学生同士のつながりや同じ学科内でのつながりといったものが必要なのではないのでしょうか。

高等学校で、団体生活ができない生徒を見ているとなんだか悲しい気持ちになります。しかし、一人では生きていけないのですから同じ時間を共有することの意味をしっかりと理解させるように話をしていきたいと日ごろから思っています。

最後に、視察等で大変お世話になりました。自分自身のことも振り返ることができ再度教育の現場の奥深さを思い知りました。この経験をもとに心機一転私は、高校生と向かいあっていこうと思います。ありがとうございました。

評価した学部等	短期大学部（湘南校舎）
評価者氏名	藤森浩人
<b>評価結果</b>	
<p>よい（効果的である）と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・短大の位置づけを変更，明確にした点  分野を広範に捉えた短大の学習と編入制度は，社会の変化が激しく複雑化し進路の決定が難しくなっている今日に於いて，子供たちに進路を見定める機会を与える。さらに，例えば経済学部へ編入し，環境問題を経済学的に捉えるなど，複数分野の専門知識を習得することによって，従来の各分野を単に縦割りにした学習環境では成し得なかった人材の育成が可能である。つまり，大学院が専門分野を深く掘り下げるために機能するのとは逆に，短大は総合的な学習をし得る環境を提供する。</li> <li>・入学初年度から研究室に入室できる点  入学初年度から先生方の研究に間近に接することにより，学問への理解や探求心が深まり，さらにこれらを中心に仲間の輪も広がり，充実した学生生活が送れる。</li> </ul> <p>※ 上記2点は短大の特筆すべき点と思われる。ホームページやパンフレットでは今以上これらの点を強調し，子供たちが短大を積極的に進路として選択できる環境作りが望まれる。</p>	
<b>改善や強化が必要な点</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本大学としてのビジョンを明確化する。  例えば下のようなホームページ  <a href="http://www.asahi.com/ad/clients/waseda/opinion/index.html">http://www.asahi.com/ad/clients/waseda/opinion/index.html</a>  <a href="http://www1.gifu-u.ac.jp/~fukui/0701.htm">http://www1.gifu-u.ac.jp/~fukui/0701.htm</a>  これらは私が時折参考にするコラム等ですが，日本大学でもこのような一般への知識の提供を積極的に行う事は日本大学としてのビジョンを明確化することでもあり，イメージの強化に効果的と思われる。さらに，最近では細分化された専門分野に加え，複数の専門分野を跨ぐような知識や研究も要求される機会が増え，それこそ総合大学の強みと思われる。よってこれらの記事は一か所に（例えば <a href="http://www.nihon-u.ac.jp/indexs.shtml">http://www.nihon-u.ac.jp/indexs.shtml</a>）一元的に蓄えることが効果的であると思われるが，こうすることでホームページの編集を通じ，学部を超えた先生方の積極的な交流が促進され，そこから新たな見地が生まれる事も期</li> </ul>	

待でき、得られた成果は学生の指導に還元できる。

#### これからの学生支援に望むこと

##### ・日本大学らしさの創造。

日本大学を卒業して感じた事です、とにかく大学の陰が薄いと思います。名称は立派です、伝統もあり、OBも多数存在している訳ですが。その要因として、学生に主体性が欠けているのかも知れません。例えば大学生協が無いことも一つの要因かも知れません。また、縦・横のつながり（絆）も必要でしょう。しかし何より大切なのは、日本大学としてのビジョンを明確にする事だと思います。それを元に学生を指導し、人材を輩出することで日本大学らしさが根付いてくるのだと思う。

##### ・人と人との交流を大切にしてほしい

私は学生時代、素晴らしい先生方、良き仲間達に出会えたことが、とても良かったと思っているし、今の糧にもなっている。その点、今の短大は短大棟の中に集約しすぎていて、他の学科（学部）の学生や先生方との交流が希薄になっている印象を受けました。

##### ・就職活動の活性化

日大生は比較的、就職活動への取り組みがのんびりしているように思います。もっと意識を高める指導が必要かと思います。

#### その他

我々が学習する最たる目的は、自分のいる場所を的確に把握し、進むべき方向を見極めることだと思います。これまで成されてきた多くの研究は、複雑な事柄を複数の単純な要素に縦割りし、個々の要素を深く探求する事で発展してきました。我々はその成果を選択し組み立てながら今日に至っているわけです。しかし近年は経済のグローバル化、環境問題等々あらゆる事柄が加速度的に変化し複雑化し、進むべき方向を見極める事が困難になりつつあるように思えます。このような時代に於いては、物事を複合的に考える力、またはその考え方が重要なのだと思います。伝統があり、かつ総合大学としての日大だからこそ成し遂げられるテーマかも知れません。

##### ・本調査期間がもう少し欲しかった。

私事ですが、仕事が丁度忙しい時期に当たってしまい、学校へも正規の手続きを取らず急に訪問してしまった事もあり、欲を言えば半年程度頂ければと思いました。また、期間の途中で評価者同士の意見交換の機会があっても良いよ

うに思いました。

評価した学部等	短期大学部 生活環境学科
評価者氏名	三宅由佳
<b>評価結果</b>	
<b>よい（効果的である）と思われる点</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館などの資料は充実していると思われる。</li> <li>・藤沢キャンパスの自然環境がのびのびしていてよい。</li> <li>・教員の方々との距離が近く、気軽に相談できる。</li> </ul>	
<b>改善や強化が必要な点</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ITの有効利用 図書館内で自由にパソコンを使用できるブースを増設して欲しい。 館内でパソコンを使える場があれば、蔵書との内容比較等が可能となる。 オフラインでの利用も含め、学生の学習・研究の枠が拡大され、有効である。</li> <li>・施設の充実度を上げる ATMの利用率とメンテナンスが合っていない。 (通帳記入ができない、お札が足りなくなる等) 郵便局の窓口もあるとよい。 コピー機やPC、プリンターの充実したプレゼンテーションルームが必要。</li> <li>・洗練度を上げる 例えば綺麗でおしゃれなカフェがある。 食堂のイメージより、カフェのような雰囲気であるとよい。</li> </ul>	
<b>これからの学生支援に望むこと</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・OB（OG）の活動状況をネットなどで検索ができて、相談できるとよい。 編入先や就職先での体験談などの情報公開 (会社概要などの形式的なものではなく、実際の内面的な状況がわかるとよい)</li> <li>・キャンパス内の環境整備 以前あった緑が、校舎が増えたことで少なくなり藤沢キャンパスの魅力が減少した。あの芝生での時間が学生の心のゆとりになっていたと思う。</li> <li>・他大学との交流機会の増加 情報がふえるのはもちろん、学生の世界観が広がる。</li> </ul>	
<b>その他</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人的には先生方にも仲間にも恵まれ充実した2年間で送れ、日本大学を卒業して本当によかったと感じる。 卒業してからも資格取得（2級建築士・トレース・CAD利用技術者等）や転職の際、先生方の御支援があったからこそ今の自分があるのであり、感謝しています。</li> </ul>	



- 環境への取り組みが企業に比べ、遅れている。  
大学の社会への貢献度のアピールになるのではないか？
- 全体的に歴史を感じる大学なので洗練度に欠ける。  
そのためか I T 利用率など社会の波から遅れているように思える。

平成19年度外部評価者

1 大学全体の評価者

氏名	所属
村上 義紀	(財) 私立大学退職金財団常務理事
揚村 洋一郎	東京都立戸山高等学校長
石川 明	日本私立学校振興・共済事業団理事
森山 敏久	株式会社学究社取締役
宮嶋 宏幸	株式会社ビックカメラ代表取締役社長
朝倉 敏夫	読売新聞東京本社専務取締役, 論説委員長

2 学部等単位の評価者

氏名	卒業年度・学科等
柴田 秀一	昭和55年度・法学部政治経済学科
小堀 球美子	平成02年度・法学部法律学科
柳原 礼子	昭和56年度・文理学部史学科
伊藤 敏彦	平成04年度・文理学部応用物理学科
小松 秀寿	昭和59年度・経済学部経済学科
角田 あかね	平成11年度・経済学部経済学科
打田 素子	平成06年度・商学部商業学科
福島 一嘉	昭和56年度・商学部会計学科
井上 啓子	昭和62年度・芸術学部映画学科
草壁 伸雄	昭和51年度・芸術学部美術学科
高野 誠	昭和60年度・国際関係学部国際関係学科
杉山 恵美子	昭和60年度・国際関係学部国際関係学科
鈴木 義弘	昭和59年度・理工学部工業化学科
高橋 和希	平成06年度・理工学部交通土木工学科
三宅 修平	昭和56年度・生産工学部数理工学科
沖倉 優代	平成04年度・生産工学部建築工学科
角田 啓子	昭和48年度・工学部工業化学科
八重田 淳	昭和58年度・工学部機械工学科
村上 純子	昭和53年度・医学部医学科
鈴木 健彦	平成04年度・医学部医学科
安達 京子	平成06年度・歯学部歯学科
草間 薫	昭和54年度・歯学部歯学科
小川 久美子	昭和55年度・松戸歯学部歯学科
中村 茂	平成11年度・松戸歯学部歯学科
松崎 和夫	昭和48年度・生物資源科学部林学科
柳澤 成江	平成02年度・生物資源科学部獣医学科
西村 伸大	平成02年度・理工学部(現・薬学部)薬学科
村山 琮明	昭和53年度・理工学部(現・薬学部)薬学科
岡本 恵里	平成05年度・文理学部哲学専攻(通信教育部)
田中 重光	平成元年度・文理学部史学専攻(通信教育部)
工藤 政則	昭和54年度・短期大学部商経科(三島校舎)
野中美香	昭和56年度・短期大学部家政科食物栄養専攻(三島校舎)
松尾 登志子	昭和46年度・短期大学部建設学科建築コース(船橋校舎)
村上 道夫	昭和61年度・短期大学部応用化学科(船橋校舎)
藤森 浩人	昭和56年度・短期大学部農学科(湘南校舎)
三宅 由佳	平成02年度・短期大学部生活環境学科(湘南校舎)

## 平成19年度外部評価報告書

---

発行 平成20年1月

日 本 大 学

編集 日本大学自己点検・評価委員会

事務局 日本大学総合企画部

〒102-8275 東京都千代田区九段南 4-8-24

電話 03-5275-8138

印刷 株式会社 文成印刷